

注 釈

なおウェブサイトにつきましては、原書（『Mr.Putin : Operative in the Kremlin』）出版時のものであり、一部リンク切れ等、アクセス不能のものがございます。ご了承ください。（編集部）

目次リンク

第 I 部 第 1 章 第 2 章 第 3 章 第 4 章 第 5 章 第 6 章 第 7 章 第 8 章 第 9 章
第 II 部 第 10 章 第 11 章 第 12 章 第 13 章 第 14 章

第 I 部 作員、現わる

第 1 章 プーチンとは何者なのか？

1. 以下を参照：

Vladimir Putin, “Obrashcheniye Prezidenta Rossiyskoy Federatsii” [Address by the President of the Russian Federation], March 18, 2014, at

<http://news.kremlin.ru/news/20603>.

<http://eng.news.kremlin.ru/news/6889>（英語版）

2. Olga Rudenko and Jennifer Collins, “As Many as 100 Killed in New Ukraine Clashes,” *USA Today*, February 21, 2014, at

www.usatoday.com/story/news/world/2014/02/20/ukraine-protests-truce-eu-leaders/5634235/.

3. Shore (2014), pp. 5–6.

4. Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000).（『プーチン、自らを語る』〔高橋則明訳／扶桑社〕）

5. Rahr (2000).

6. Dawisha (2014)が最近の類似本。

7. Peter Baker, “Sanctions Revive Search for Secret Putin Fortune,” *New York Times*, April 27, 2014.

8. van der Does de Willebois and others (2011)を参照。

9. 一例として、以下のような記事がある。Stephen Sestanovich, “Putin’s Reckless Gamble,” *New York Times*, March 29, 2014, at

<http://www.nytimes.com/2014/04/01/opinion/putins-reckless-gamble.html>.

10. たとえば、Gessen (2012) や Judah (2013) にもこのエピソードは登場する。Judah は情報源として、『プーチン、自らを語る』ではなく Gessen の本を提示。一方、Gessen は『プーチン、自らを語る』が情報源であることを明記しているが、エピソードの信憑性については触れていない。

（Gessen (2012)の邦題は『そいつを黙らせる——プーチンの極秘指令』〔松宮克昌訳／柏書房〕）

11. Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), p. 34.（邦訳は 51 ページ）

12. 同上, p. 188.（邦訳は 254 ページ）

13. 同上, p. 35.（邦訳は 52 ページ）

14. James Rosen and Luke A. Nichter, “Madman in the White House: Why Looking Crazy Can Be an Asset When You’re Staring down the Russians,” *Foreign Policy*, March 25, 2014, at

www.foreignpolicy.com/articles/2014/03/25/madman_in_white_house_nixon_russia_obama.

15. 同上: Haldeman (1977)からの引用。ローゼンとニクターによれば、「狂人理論」を説明するにあたって、ニクソンは「狂気の戦略的な可能性についての概念」(キッシンジャーが学生時代から詳しく知っていた考え)に再び言及したという。その際にニクソンがキッシンジャーに伝えた言葉は、ホワイトハウスのテープ録音資料に残されている。「ヘンリー、われわれはこのチャンスを見逃してはいけない。絶対にやり遂げるんだ。私はあの忌々しい国を破壊する。本気だ。もちろん、破壊する必要があるなら、という意味だが。必要ならば、核兵器の使用も辞さないつもりだ。本当に必要なら。だが、きっと必要なことではないだろう。しかし、核兵器も選択肢であると見せることが重要なんだ。“核兵器を使う”というのは、まずは北ベトナムの生き残りを空襲で殲滅させ、それから誰かが邪魔をしてきたら核兵器の使用をちらつかせて脅すという意味だ」

Foreign Relations of the United States, 1969–1976, Vol. XIV, Soviet Union, October 1971–May 1972, Document 126. Conversation between President Nixon and His Assistant for National Security Affairs (Kissinger). Washington, April 19, 1972. Available at

<http://history.state.gov/historicaldocuments/frus1969-76v14/d126>.

相手を操ろうとする性格は、テレビドラマや大衆小説の主要人物の性格としてもよく利用される。たとえば、アメリカのHBOで放送された超人気シリーズ『ゲーム・オブ・スローンズ』に登場するピーター・ベイリッシュ公は、シーズン4のある回の台詞で、「相手を操る」とは何たるかを見事に要約してみせた(奇妙な偶然だが、この回は、ウクライナで実際に危機が勃発していた2014年4月に放送された)。ジョフリー王を毒殺した直後ベイリッシュ公は、別の主要キャラクターであるサンサ・スタークにこう言う。「常に敵を混乱させておくんだ。こちらが誰なのか、何者なのかを相手が知らなければ、相手はこちらが次にどんな作戦に出るかを予測することはできない」:『ゲーム・オブ・スローンズ』シーズン4第4話「Oathkeeper (誓約を果たすもの)」より:

http://gameofthrones.wikia.com/wiki/Petyr_Baelish#cite_note-26

16. 「ミスター・ベン」については以下のウェブサイトが詳しい。

www.clivebanks.co.uk/

17. Gessen (2012).

18. ここ数年、プーチンの「多様性」はロシア国内外において新たな産業を生み出し、数々のスピンオフやパロディーが作られてきた——プーチンのパフォーマンスを称賛するミュージック・ビデオ、カレンダー、テレビゲーム、「スーパー・プーチン」を主人公にした新聞連載マンガ……。また、ボヴァ(ウラジーミル・プーチン)とディマ(ドミートリー・メドヴェージェフ)という男の子が主人公の子供用塗り絵帳には、2人が大切な問題に「タンデム体制」で取り組む姿が描かれている。この塗り絵帳は、プーチンの2011年10月の誕生日を記念して出版された。詳しくは以下のウェブサイトを参照:

<http://like-putin.ru/>;<http://superputin.ru/>;

<http://seansrussiablog.org/2011/10/10/vova-and-dima-coloring-book/>.

19. 著者のメモより。

20. この点におけるプーチンの発言については、視聴者参加型のテレビ討論番組『ホットライン』に初登場したときの説明を参照(第8章)。

21. プーチン大統領は個人的にマーシャ・ゲッセンをクレムリンに呼び出したという。その直前までゲッセンはロシア随一の人気を誇る科学雑誌の編集者として働いていた。が、超軽量飛行機を操縦して絶滅の危機に瀕する渡り鳥を先導するプーチンのパフォーマンスに、自社の記者を派遣することを拒んだため、解雇された。詳しくは以下のウェブサイトを参照。

Masha Gessen, “A Call from the Kremlin,” September 16, 2012, at

<http://latitude.blogs.nytimes.com/2012/09/16/a-call-from-the-kremlin/>.

22. この無題の詩には数々の英訳が存在するが、本書ではBillington (1996), p.320の訳を採用した。

23 . <http://valdaiclub.com/>.

第2章 ボリス・エリツインと動乱時代

1. 1990年代のエリツイン政権下のロシアに関する国内外における議論については、“The End of the Yeltsin Era,” in Shevtsova (2005), pp. 44–68 がわかりやすい。この章で説明する1991～96年のロシアの主要な国内・外交政策の進展については、一部、フィオナ・ヒルのハーバード大学の歴史博士号論文（1998）の議論を転用した。

2. Gaddy (1996), p. 72.

3. 1990年代の経済状況に関連する本文内のデータは、この期間にロシア政府が正式発表した多種多様な資料から収集したものである。

4. 正式な死傷者数については以下を参照： *Izvestiya*, December 25, 1993.

5. 政治戦略家であつてクレムリンの顧問だったグレブ・パヴロフスキーに対する、デイヴィッド・ハーストとトム・パーフィットのインタビュー (*The Guardian*, January 24, 2012.) を参照。『ガーディアン』のコラムニストであるデイヴィッド・ハーストは、このインタビューの未編集の英語版完全原稿を提供してくれた。心から感謝したい。もともとのインタビューは、ハーストと『ガーディアン』のモスクワ特派員だったトム・パーフィットによって行なわれ、パーフィットがパヴロフスキーのロシア語の回答を翻訳した。インタビューの一部は、以下の記事で引用されている。

David Hearst, “Will Putinism See the End of Putin?,” *The Guardian*, February 27, 2012, at www.theguardian.com/world/2012/feb/27/vladimir-putin-profile-putinism;

and David Hearst and Miriam Elder, “How Dmitry Medvedev’s Mentor Turned Him into a Lame Duck,” *The Guardian*, March 2, 2012, at

www.theguardian.co.uk/world/2012/mar/02/dmitry-medvedev-rivalry.

6. Celestine Bohlen, “A. A. Sobchak Dead at 62; Mentor to Putin,” *New York Times*, February 21, 2000.

7. Leonova (2012)を参照。この議論については、ブルッキングス研究所の客員研究員ウィリアム・パートレットに感謝したい。パートレットは、1993年のロシア憲法に関する彼の研究の成果を私たち著者に提供し、憲法の審議・起草にかかわったロシア人法学者への橋渡しをしてくれた。1993年のロシア憲法がいかに西側の憲法モデルを拒絶するものかという議論については、Partlett (2012)に詳しい。

8. McFaul (2001), pp. 273–78 を参照。

9. 数人の議員が止めに入ったが、その混乱のなかで、〈ロシア自由民主党〉党首のウラジーミル・ジリノフスキーが女性議員を殴ってしまう一幕もあった。

10. たとえば、以下を参照： Alexandra Odynova, “Putin Says He’s Prepared for Runoff,” *Moscow Times*, February 2, 2012, accessed through EastView at

<http://dlib.eastview.com/browse/doc/26540808>.

(<https://themoscowtimes.com/news/putin-says-hes-prepared-for-runoff-12324>)

11. McFaul (2001), pp. 279–82を参照。ボリス・エリツインは回顧録『ボリス・エリツイン最後の証言』のなかで、この経緯について偏見に満ちた意見を述べている。それは、プーチン大統領のもとでも同じような活動が行なわれていたことを明らかに示唆するものである。「一九九五年には、チェルノムイルジンが〈我が家ロシア〉という与党を立ち上げた。穏健なりベラル派を集め、国家の立場を優先させる方針を打ち出していた。ところが実際に集まってきたのは、実業家、知事、官僚という政府寄りの人間で、これは完全な失敗だった。様々なグループの利害を反映させるのが政党だとすれば、官僚式の上下の命令系統でそれを動かすのは無理だ……この結果は国家運営、経済活動、いや市民社会の全システムにとってマイナスとなった」： Yeltsin (2000), p. 352. (『ボリス・エリツイン最後の証言』〔網屋慎哉・桃井健司訳／NCコミュニケーションズ〕より引用：531ページ)

ジ)

12. 1996年の大統領選シーズンについては、ティモシー・コルトンによるボリス・エリツインの伝記内の説明がもっともわかりやすい。14章と15章 (pp. 345–406) には、エリツインの支持率の低さ、心臓発作、選挙活動における障壁などについて詳しく描かれている：Colton (2008)を参照。

13. David Filipov, “Russian Mogul Makes Politics His Latest Venture,” *Boston Globe*, March 5, 1997を参照。

14. Freeland (2000); Hoffman (2003); and Treisman (March 2010)を参照。

15. 以下を参照：

Bill Nichols, “Yeltsin’s Latest Firing Is Seen as Self-Preservation, Experts: He Wants Someone Who Will Protect Him, Cronies,” *USA Today*, August 10, 1999; David Filipov and Brian Whitmore, “Yeltsin’s ‘Family’ Is Seen behind Latest Move,” *Boston Globe*, August 10, 1999; Dmitri Simes, “Yeltsin’s Goal Is to Protect Inner Circle,” *Newsday*, August 11, 1999; and Jonathan Steele, “Keeping It in the Family: In Today’s Russia, Politicians and Businessmen Are Carving up Power between Them—And That’s How to See Yeltsin’s Latest Manoeuvres,” *The Guardian*, August 13, 1999.

エリツインの次女タチアナ・ユマシェワは、「エリツイン・ファミリー」の中心的人物だった。彼女はロシア人実業家のアレクセイ・ディアチェンコと結婚し、その後の2001年、ファミリーの重要人物であるエリツインの元顧問ワレンチン・ユマシェフと再婚。ユマシェフの娘は、オリガルヒのオレグ・デリパスカと結婚。ファミリーのほかの関係者としては、以下のような人物がいた。エリツインとプーチンの両方に大統領府長官として仕えたアレクサンドル・ヴォローシン。オリガルヒのボリス・ベレゾフスキー。彼が設立した石油会社〈シブネフチ〉の重役ロマン・アブラモヴィッチ。エリツインは回顧録『ボリス・エリツイン最後の証言』のなかで、タチアナ、ユマシェフ、ヴォローシンを「側近」と挙げている：Yeltsin (2000), p. 332.

16. ドミトリー・ロゴージンは、軍需産業担当の副首相に就任する以前、ロシアのNATO大使を務めていた。1990年代以降、彼は華やかな政治キャリアを築いていくなかで、民族主義の色合いをみるみる強めていく。1990～91年にかけて、ロゴージンは立憲民主党（カデット）の創設者の1人として政治人生を歩みはじめる。立憲民主党は、帝政時代にパーヴェル・ミリュコーフらによって設立された政党を復活させたものだった。歴史家のミリュコーフは、自由保守主義を提唱する帝政時代の代表的な政治家であり、立憲君主制の制定を促進し、1900年代初頭に議会で活躍した。詳しくは以下を参照：

Vladimir Gromov, “Dmitry Rogozin: The Man behind Major Political Figures in Congress of Russian Communities,” *Moskovskiy komsomolets*, November 14, 1995, accessed in English through the Foreign Broadcast Information Service, FBIS, in 1995.

1993年、ロゴージンはアレクサンドル・レベジとともに〈ロシア人共同体会議〉を設立し、その後に国会議員に当選、下院の外交委員会の議長となる。2003年、彼は民族主義政党〈祖国（ロージナ）〉の設立に参加。2006年以降、クレムリンによる妨害工作によって政界の隅へと追いやられるが、2008年にNATO大使に指名される。ロゴージンは2006年にロシア人共同体会議を政党ではなく「市民社会組織」として復活させ、さらに2011年にプーチンの〈全ロシア人民戦線〉にも参加。2011年12月および2012年5月、プーチンはロゴージンを軍事担当の副首相に指名。ドミトリー・ロゴージンや彼を支援する民族主義者たちを仲間に引き入れようとするプーチンの試みについては、以下を参照：

Michael Bohm, “Putin Playing with Fire by Courting Rogozin,” *Moscow Times*, September 23, 2011, at

www.themoscowtimes.com/opinion/article/putin-playing-with-fire-by-courting-rogozin/444203.html#ixzz1IG7UuSja.

17. Baker and Glasser (2005)を参照。第4章の“The Takeover Will Be Televised” (pp. 78–98)では、ベレゾフスキーおよびグシンスキーとプーチンの対立、NTVやグシンスキーが所有するその他のメディアをクレムリンの影響下に置こうとするプーチンの試みについて描かれている。また、第14章の“Twilight of the Oligarchs” (pp. 272–92)は、ミハイル・ホドルコフスキーとプーチンの決定的な対決についてのセクションである。一方、ホドルコフスキーとプーチンの対立、ホドルコフスキーが1990年代に設立した石油会社〈ユコス〉の差し押さえと解体を取り巻く状況については、Coll (2012)が詳しい。12章では、〈ユコス〉設立の経緯について詳説され、アメリカの石油メジャー〈エクソンモービル〉とホドルコフスキーが進めていた合併事業計画に関する経緯も説明されている：Coll (2012), pp. 250–79.

18. ミハイル・ゴルバチョフ政権下において、コーカサスやバルト三国の民族主義グループは、ソビエト圏内の国境線の改訂、中央政府の政策に左右されないより大きな自治権を求め、最終的には完全な独立を要求した。ソ連構成国をつなぎとめるための新連邦条約の締結を仲介するというゴルバチョフの試みは失敗し、それが1991年8月のクーデターを引き起こす要因の1つとなった。ソビエト政府や軍の保守派によるこのクーデターがきっかけとなり、ソ連は1991年12月の崩壊へと突き進むことになった。Dunlop (1993) and Hajda and Beissinger (1990)を参照。

19. たとえば、Lieven (1998)を参照。

20. ロシア政府がチェチェン共和国と一連の停戦協定を結んでから間もない1997年、ハーバード大学ケネディ・スクールで開かれたセミナー内で、アレクセイ・アルバトフ（1994～2003年にロシア下院の防衛委員会の副議長を務めた、〈ヤブロコ〉党を代表する政治家）は、ロシア政府・軍関係者のなかでチェチェン戦争の終結を希望する人間は誰1人いないことを強調した。彼は、モスクワ政府がいずれ再びチェチェンを支配下に置かろうと指摘。1997年夏、著者フィオナ・ヒルがハーバード大学の博士号論文執筆の準備のためにモスクワで開いた会議の席でも、ロシアの高官たちがアルバトフと同じような発言を繰り返した。

21. エリツィン政府の重要な顧問で、1993年の憲法起草者の1人であるセルゲイ・シャフライは、1994年以降に次のように明言した——タタルスタンとの条約とそれに引きつづく各国との相互条約は、新しいロシア連邦を築き上げるブロックではなく、当座しのぎの策だと考えられた。それらの条約には、一部の反抗的な共和国をなだめ、チェチェンのような独立路線に進むことを防ぐ意図があった。以下を参照：

Sergei Shakhrai, “Official Memorandum to President Boris N. Yeltsin,” No. 1576, March 1995, cited in Rafael Khakimov, “Federalization and Stability: A Path Forward for the Russian Federation,” *CMG Bulletin*, June 1995, pp. 10–14 (citation on p. 11).

22. James Hughes, “Moscow’s Bilateral Treaties Add to Confusion,” *Transition*, September 20, 1996, pp. 39–43を参照。

23. Jean-Robert Raviot, “Fédéralisme et Gouvernement Régional en Russie” [Federalism and regional government in Russia], *Politique Étrangère* (Paris), December 1996, pp. 803–12; and “Russia’s Regions: Fiefs and Chiefs,” *The Economist*, January 25, 1997を参照。

24. Mark Whitehouse, “Nazdratenko Rules a Far East Fiefdom,” *Moscow Times*, July 26, 1997. 25. Brown (1996), pp. 212–51を参照。

26. Lough (March 12, 1993), pp. 21–29; and Lough (May 14, 1993), pp. 53–59を参照。また、William Safire, “On Language: The Near Abroad,” *New York Times Magazine*, May 22, 1994も参照。

27. “Foreign Minister Returns to Anti-West Ways—Not!” *New York Times*, December 15, 1992; and Hill and Jewett (1994)を参照。その閣僚会議に参加したアメリカの高官の1人がのちにごう証言した。「コズイレフが突然スピーチをしたのは、1992年12月にストックホルムで開催されたOSCEの〔毎年恒例の外相級〕閣僚会議の席でのことだった。その演説はまったく予想外のこと

だった。だから、スピーチを聞いていた [国務長官の] ローレンス・イーグルバーガーは急に怒り出した。いったい何が起きているんだ、と。コズイレフが2回目の“本物のスピーチ”をするまえ、控室にいた彼はこう説明した——最初のスピーチは、モスクワの政治世界の大多数の意見を反映させたものであり、エリツィンとコズイレフの政策を支援しないとどうなるかを出席者に示すものだった」。当時、米務省のOSCE担当調整官だったウィリアム・ヒルと著者の文書によるやり取りより。

28. Jeffrey Sachs, “Toward *Glasnost* in the IMF: Russia’s Democratization Policy and the International Monetary Fund,” *Challenge*, May 1994 を参照。また、1994年2月5日の銀行取引、住宅、都市問題に関する米上院委員会におけるサックスの証言を参照。

29. Roman Glebov, “Russia and Ukraine—Controversy over the Black Sea Fleet,” *Kommersant Daily*, January 13, 1992 (accessed in English through FBIS in 1995).

30. この期間の事態の進展については、Hill and Jewett (1994)を参照。

31. 同上内p. 6. : Andrei Kozyrev, *Moscow News*, October 22, 1993.

32. Hill and Jewett (1994)を参照。

33. “RF-SNG: Strategicheskii kurs. Ukaz Prezidenta Rossiyskoy Federatsii ob utverzhenii strategicheskogo kursa Rossiyskoy Federatsii s gosudarstvami-uchastnikami Sodruzhestva nezavisimyykh gosudarstv” [RF-CIS: Strategic course. Decree of the president of the Russian Federation on establishing the strategic course of the Russian Federation with the state-participants in the Commonwealth of Independent States], No. 940, September 14, 1995, in *Dipkur'er*, No. 16/18, 1995.

34. Mikhail Gorbachev, “Russia Will Not Play Second Fiddle,” *Moscow News*, No. 37, September 22–28, 1995.

35. 同上。

36. 同上。

第3章 国家主義者

1. たとえば、Gerschaft (October 1995), p. 2やKokoshin (1997), p. 41を参照。ロシア国家を取り戻そうとする1990年代の動きや「ロシア思想」についてのこの章の情報は、フィオナ・ヒルのハーバード大学の歴史博士号論文 (1998) に基づくものである。論文内には、1994~97年にモスクワで行なわれた、著名なロシア人政治家や専門家との数多くのインタビューの記述も含まれている (その一部の人々は、この章にも登場する)。

2. Yavlinsky (1994). 1996年12月に『ネザヴィシマヤ・ガゼータ』紙に掲載された記事では、解説者ルスタム・ナルジークロフが、エリツィン政権の全員と大勢のロシア人エリートたちが、強いロシア国家の復活という考えに取り憑かれていたと証言。ナルジークロフは記事のなかで、「改革のための強い国家復活」のアプローチを支持する政治エリートをリストアップした。そのリストには、次のような政治家が含まれていた。オリガルヒで副首相のウラジーミル・ポターニン、学者で経済相のエフゲニー・ヤシンといった経済畑の面々。さらに、ソ連崩壊後のロシアでもっとも影響力の強い政治家の1人であるモスクワ市長ユーリ・ルシコフ、首相のヴィクトル・チェルノムイルジン。「これは驚きである」とナルジークロフは記事で指摘した。「数年前まで権力を持つ機関を究極の悪だとみなしていた人々までもが、“強い国家”復活の考えを持つようになった。たとえば、アナトリー・チュバイスの未来を誰が予測できただろうか——彼は前例のない手段の支持者のための擁護者となり、同時に経済というゲームの規則を頑なに順守しようとする人々の擁護者にもなったのだ」。

Rustam Narzikulov, “Ot resul’tata bor’by storonnikov i protivnikov sil’nogo gosudarstva” [From the results of the struggle between supporters and opponents of a strong state], *Nezavisimaya*

gazeta, December 31, 1996を参照。

アナトリー・チュバイスは、エゴール・ガイダルと並び、ロシアを代表する自由主義経済改革者である。1993年にガイダルが力を失うと、チュバイスはロシアの自由主義経済への移行を担う重要人物になった。しかしながら、チュバイスが前例のない手段を提唱するのを予測するのは、それほど難しいことではなかったのかもしれない。彼は過去にも、必要とあらば人々の意に反してでも、資本主義を導入すべきだと主張したことがあった。この点については、Reddaway and Glinski (2001)を参照してほしい。また、後章で論じるとおり、チュバイスはサンクトペテルブルクにゆかりのある人物であり、1996年のウラジーミル・プーチンのモスクワ異動を取り巻くさまざまな出来事において、中心的な役割を果たすことになる。

3. Shevtsova (2005)を参照。

4. Putin, Millennium Message, December 29, 1999. ロシア語の全文は『ネザヴィシマヤ・ガゼータ』紙のウェブサイトで見覧可能：

www.ng.ru/politics/1999-12-30/4_millennium.html.

5 ここでいうロシア情報機関には、KGB、FSB、フェリックス・ジェルジンスキーによって設立されたボルシェビキのチェカー（非常委員会）、自分たちを高等警察と位置づけた革命前の秘密警察組織などを含む。崇高な使命を持つという職員独自のアイデンティティと感覚については、Murawiec and Gaddy, *The National Interest* (Spring 2002)を参照。帝政時代の高等警察の創設者で、史上もっとも有名な長官といわれるのが、アレクサンドル・フリストフォロヴィチ・ベンケンドルフ伯爵（1783～1844）である。2012年の大統領選のあいだ、ウラジーミル・プーチンは『コメルサント』紙に記事「民主主義と国家の質」（2月6日付）を寄稿し、ベンケンドルフ伯爵について言及した：

www.kommersant.ru/doc/1866753

6. Pavel Yevdokimov, “Russkaya pravda Generala Leonova” [The Russian truth of General Leonov], *Spetsnaz Rossii* (May 2001).

7. 同上。大統領に就任したころ、国家初の秘密警察の創設を祝う記念日における諜報部員を前にした有名な演説のなかで、ウラジーミル・プーチンは冗談っぽくこう言った。「君たちも気づいているだろうが、ロシア政府内に潜入した諜報員たちが、作戦の第1段階を成功裏にやり遂げた」。のちにプーチンはそれがジョークだったと強調したが、諜報部員への演説であえてこう言及したという事実は、「真の国家の下僕」が国家を引き継ぎ、国家に秩序をもたらすうえで重要な役割を果たすという考えやKGBの神話を裏づけるものだろう：

Vladimir Putin interview with Ted Koppel: “Vladimir Putin Arises from Murky Background of KGB to Become Acting President of Russia,” *Nightline* (Friday Night Special), ABC News, March 24, 2000 (transcript, with Mr. Putin speaking through a translator), accessed through Nexis.com.

8. クレムリンの元政治戦略顧問グレブ・パヴロフスキーのインタビューを参照：*The Guardian* on January 24, 2012.

9. 政治や社会に積極的に参加するロシア人エリートを指し示すための「インテリゲンチャ」という言葉は、19世紀前半の西ヨーロッパに起源を持つものである。フランス語の *intelligence* とドイツ語の *Intelligenz* が組み合わさった *intelligentsiya* が1860～70年代にロシアで広まり、「社会で顕著な活動を行なう教養のある階級の人々」を全般的に意味する言葉として使われるようになった。当時の政治評論家の一部は、インテリゲンチャがロシア社会で果たす役割を、同時期のヨーロッパの国々の社会で中流階級やブルジョア階級が果たす役割と同等のものだと見ていた。Pipes (1974), p. 251を参照。

10. 20世紀初め、ウラジーミル・レーニン率いるボルシェビキは、インテリゲンチャがロシアのエリート社会の代表者であるという一般的な考えを利用した。結果、彼らはボルシェビキを「プロレ

タリートの指導者」に変えることに成功した。

11 . Milyukov (1906), pp. 560–61を参照。

12 . Pipes (1974), p. 252. 1980年代初めのソ連の定義では、「インテリゲンチヤ」には非肉体労働者および大学生の全員が含まれていた。White, Rose, and McAllister (1997), p. 12; and Petro (1995), p. 99を参照。

13 . “Valeriy Zor’kin,” *Lentapedia*, February 24, 2012, at <http://lenta.ru/lib/14164180/full.htm#65>.

14 . Yan Ulanskiy, “Otvstavka Valeriya Zor’kina” [The resignation of Valery Zorkin], *Kommersant*, October 7, 1993, at <http://kommersant.ru/doc/61475>.

辞任後、ゾリキンは裁判所の一員にとどまりつつも野党の議員たちと協力し、国民投票のわずか8日前にもかかわらず、新憲法の議会通過に対して反対活動を繰り広げた。ゾリキンと協力した野党議員には、ジュガーノフやオレグ・ルミャンツェフが含まれていた。ルミャンツェフは、1993年の憲法を起草したワーキング・グループの責任者だった。

“Bloki obsuzhdayut konstitutsiyu” [Blocs discuss the constitution], *Kommersant*, December 4, 1993, at

<http://kommersant.ru/doc/66482>

15 . Maksim Sokolov, “Politicheskiy vektor: Yedinstvo i soglasiye: ot slovo mezhdometiya k slovo-parazitu” [Political vector: unity and accord: from the word of an interjection to the word of a parasite], *Kommersant vlast’*, March 22, 1993, at

www.kommersant.ru/doc/9692.

16 . たとえば、1996年にプーチンがモスクワに異動になった直後、ウラジーミル・メドベージェフ（下院のロシア地域グループの一員）はロシアの報道機関に向けて、すべての政治派閥とエリートたちが丸となって——〈合意〉運動に参加した人々にしろ——ロシアを危機から救い出すべきだと訴えた。

Vladimir Medvedev, “V chem prichina ‘nesostoyavshikhnya pobed?’” [What is the reason for the ‘incomplete victories?’], *Nezavisimaya gazeta*, November 16, 1996を参照。

17 . Andrey Kokoshin, “Natsional’naya bezopasnost’ i voyennaya moshch’ Rossii” [National security and Russia’s military might].

1995年、著者フィオナ・ヒルはココーシン本人から論文を受け取った。この論文は、ココーシンの著書 *Armia i politika* [The army and politics] (Moscow: Mezhdunarodnyye otnosheniya, 1995) の最終章にも掲載されている。この著書はのちに英語に翻訳され、*Soviet Strategic Thought 1917–1991* (Cambridge, Mass.: Belfer Center for Science and International Affairs, John F. Kennedy School of Government, Harvard University, 1998) として出版された。英語版では、論文は第4章に掲載されている。“In Lieu of a Conclusion: Russia’s National Security and Military Power,” pp. 193–209.

18 . 同上、p. 255.

19 . たとえば以下を参照：

Lebed (1995); “Lebed Sets Forth Russia’s National Security Concept,” *Interfax*, June 26, 1996; online interview with Alexander Lebed at www.IntellectualCapital.com, November 14, 1996; and Alexander Lebed presentation on “International Aspects of Russia’s Development,” at the German Society of Foreign Policy, Bonn, January 1997 (transcript obtained from the German Society of Foreign Policy).

この問題に関するレベジのもっとも有名な著書（1995年刊行）のタイトル *Za derzhavu obidno* [自分の母国が恥ずかしくなる] は、1970年のソ連の大ヒット映画 *Beloye solntse pustyni* [砂漠の白い太

陽]の有名な台詞の1つである。この映画は、1920年代のロシア内戦のあいだ、中央アジアで戦うボルシェビキの赤軍のある1人の兵士の苦難を描いたものだ。ロシア人にとってのこの台詞が何を意味するか、という議論については以下を参照：

Michele Berdy, “Eastern Tricks for Western Predicaments,” *Moscow Times*, July 11, 2003, accessed through Nexis.com.

20 . Gerschaft (1995), p. 5. 加えて、以下などを参照：

RAU Corporation (1995); Aleksey Podberezkin, “Reserv ustupok so storony Rossii ischerpan” [Russia has exhausted its reserves for concessions], *Nezavisimaya gazeta*, June 4, 1996;

Aleksey Podberezkin, “Russkiy put” [The Russian path], *Avtograf*, May 22–June 6, 1997; and Zyuganov (1994); Gennady Zyuganov, “Junior Partner? No Way,” *New York Times*, op-ed, February 1, 1996; Gennadiy Zyuganov, “Smuta” [Troubles], *Nezavisimaya gazeta*, October 17, 1996; David Hoffman, “Zyuganov’s Goal is Russia’s Glory,” *Washington Post*, May 13, 1996; and John Thornhill, “Fears of National Socialism,” *Financial Times*, April 11, 1996.

21 . Gennady Zyuganov, Report to Congress of the Communist Party of the Russian Federation (CPRF), April 22, 1997.

22 . Chinyaeva (1997), pp. 40–46.

23 . James Rupert, “In Search of the Russian Meaning of Life: Yeltsin Asks a Bear of a Question of His Post-Soviet Nation, Wants Answer within a Year,” *Washington Post*, August 4, 1996より。

24 . Chinyaeva (1997), p. 46より。

25 . Maria Balynina and Lyudmila Vanina, “Satarov Presents Book on Russia in Search of an Idea,” RIA Novosti, August 8, 1997; Bronwyn McLaren, “Big Brains Bog down in Hunt for the Russian Idea,” *St. Petersburg Times*, August 18–24, 1997.

26 . Chubays (1996).

27 . Fiona Hill, personal interview with Igor Chubais at the Journalists’ Club in Moscow, May 28, 1997. カギカッコ内のフレーズは、ロシアの哲学者ピョートル・チャーダーエフの有名な著書 *Philosophical Letters* に登場するものである。チャーダーエフのこの著書の原稿は19世紀のロシアのエリート界で広く出回り、1836年に学術誌 *Teleskope* 内に初めて正式に掲載された。チュバイスの綴る言葉には、このような歴史への言及や意図的な模倣が多く含まれている。

28 . Chubays (1996), p. 9.

29 . 同上, p. 10.

30 . Yekaterina Sytaya, “Ocherednoy proyekt geopolitikov” [The latest geopolitical project], *Nezavisimaya gazeta*, October 18, 1996.

この公聴会には次のような名前が付けられていた——“Russkaya ideya na yazyke narodov Rossii (Kontseptsiya geopoliticheskoy i natsional’noy bezopasnosti)” [ロシア人民の言葉によるロシア思想 (地政学的・国家的安全保障のためのコンセプト)]

31 . Paul Goble, “Orthodoxies Old and New,” *RFE/RL Analysis from Washington*, January 23, 1997より。

32 . Yevdokimov, “Russkaya pravda Generala Leonova.”

33 . 同上。「プロ愛国者」は記事を書いた記者エヴドキモフの造語で、彼自身やインタビュー相手のレオノフを示す言葉だった。

34 . Putin, Millennium Message, December 29, 1999.

35 . チュバイスは1996年7月から1997年3月まで大統領陣営のトップを務め、その後に第一副首相に就任。

36 . Colton (2008)を参照。

37 . “Poslaniye Prezidenta Rossiyskoy Federatsii Federal’nomu Sobraniyu. Poryadok vo vlasti—

poryadok v strane (O polozhenii v strane i osnovnykh napravleniyakh politiki Rossiyskoy Federatsii)” [Message of the President of the Russian Federation to the Federal Assembly. Order in the state authority—order in the country (on the situation in the country and on the fundamental directions of politics in the Russian Federation)], March 6, 1997. See www.inpravo.ru/baza1/art4z/nm-8zbwxv/index.htm.

38. この教書演説で描かれる国家のコンセプトはきわめて実用的だ。この文書はまた、実に冷静かつ簡潔に書かれている。これは、教書演説を起草したテクノクラートや経済学者のグループの意見を反映させたものである。

39. 『エコノミスト』誌のアナトリー・サブチャークの死亡記事を参照：

“Anatoly Sobchak, a Flawed Reformer, Died on February 20th, Aged 62,” *The Economist*, February 24, 2000.

40. Sobchak (1990), pp. 211–16を参照。

41. Vladimir Putin, “Vystupleniye na tseremonii vrucheniya Vladimiru Putinu mantii pochetnogo doktora yuridicheskogo fakul’teta Sankt-Peterburgskogo gosudarstvennogo universiteta” [Speech at the ceremony granting Vladimir Putin an honorary doctorate from the law faculty of St. Petersburg State University], January 13, 2000, at <http://archive.kremlin.ru/text/appears/2000/01/121198.shtml>.

42. Vladimir Putin, “Vstupleniye na rasshirennom zasedanii kollegii Ministerstva yustitsii” [Speech to the full meeting of the Ministry of Justice], January 31, 2000, at <http://archive.kremlin.ru/text/appears/2000/01/28883.shtml>.

この授与式におけるプーチンのスピーチの冒頭の言葉は、彼の国家主義者としての信念についての法の重要性を如実に示すものだといえる。「この会場に集まった人々の仕事は、2つの言葉に集約される——国家的地位[*gosudarstvennost’* (ゴスダルストヴェノスチ)]の確立と法律厳守[*zakonnost’* (ザコンノスチ)]である」

43. サブチャークの経歴と数々の功績については、以下のウェブサイト参照：*World Socialist website*, March 10, 2000, at www.wsws.org/articles/2000/mar2000/sobc-m10.shtml.

44. 自伝『プーチン、自らを語る』のなかで、プーチンはアナトリー・サブチャークが彼にとっていかに重要な人物だったかを説明している。「彼は非の打ちどころのない評判を持つ、まっとうな男である。非常に聡明で、オープンで、才能豊かな人物だ。私たちはまったくタイプの異なる人間同士だが、私はアナトリー・アレクサンドロヴィッチが大好きだ。私は、彼のような人々を愛してやまない。彼は本物の人間だ……アナトリー・アレクサンドロヴィッチと私が非常に親しく友好的な信頼関係を築いていたことを知る人は少ない。海外にいるあいだ、私たちはよく会話したものだ。われわれ2人だけで、何日ものあいだ語り合ったこともある。まさに、彼は私のメンターとっていい」：Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), pp. 112–13. [邦訳は152ページ] サブチャークもまた、プーチンや2人の関係について賞賛する言葉を数多く残している。たとえば、1996年の市長選での落選について、サブチャークは自著で次のように述べた。「……長い選挙戦のあいだずっと、V・プーチンは最高の働きを見せてくれた。ほかの多くの人々とは違い、彼は私を裏切らなかった。さらに、プーチンは有力な権力者に支援を求める手紙を書き、私の擁護に奔走してくれた」：Sobchak (1999).

45. Vladimir Putin, “Otkrytoye pis’mo izbiratelyam” [Open letter to voters], February 25, 2000. 最初に『イズヴェスチヤ』『コメルサント』『コムソモリスカヤ・プラウダ』の3紙に掲載されたこの書簡は、クレムリンのウェブサイト・アーカイブ（ロシア語）で閲覧可能：

http://archive.kremlin.ru/appears/2000/02/25/0000_type63374type63382_122118.shtml

http://archive.kremlin.ru/eng/speeches/2000/02/25/0000_type82912type104017_124556.shtml

(英語版)

46. 本書のこのセクションについて、ブルッキングス研究所の元客員研究員ウィリアム・パートレットの支援に心から感謝したい：Partlett (2013)を参照。ゾリキンはまだ、ロシアの各地域と相互条約を結ぶエリツインの政策を猛烈に批判した1996年のインタビューのなかでも、「法による独裁 (*diktatura zakona*) 」という言葉を使った：Trochev (2008), p. 142を参照。プーチンの自由保守主義への傾倒に関する詳しい議論については、Prozorov (2004)を参照。

47. 19世紀末から20世紀初めにかけて、ロシアのインテリゲンチヤ内の大集団だった自称リベラル派たちが、ボリス・チチュエリンの書物に夢中になった。また、このエリート集団のメンバーたちは、立憲民主党 (カデット) の設立において重要な役割を果たした。立憲民主党は、最後の皇帝ニコライ2世 (在位1894 - 1917) 時代、法律に基づく立憲君主制の確立を促進する役目を担った。1990年代初め、ドミトリー・ロゴージンはこの立憲民主党を復活させ、現代を代表する民族主義政治家としてのキャリアを歩み出した。

48. 帝政時代のロシアの保守政治思想に関する詳細な議論については、Pipes (2005)を参照。

49. サプチャークと同様、ゾリキンもソ連共産党による恣意的な権力利用の傾向に危機感を抱いていた。そこで彼は、ソ連の国家として基本的な構造を壊すことなく、この共産党の傾向を打開する方法を模索した。1960~91年のあいだ、ワレリー・ゾリキンは国家主義者の学者による著書を読み漁った。彼はまた、ボリス・チチュエリン、セルゲイ・ムロムツェフ、その他の突出した先人たちの伝記を執筆。ゾリキンは当初、モスクワ大学で憲法学の教授になることを目指していたが、結局最後まで博士論文を提出することができなかった。その論文のテーマは、イデオロギーや社会学に深く関知しない法理論を作り上げるという、帝政時代末期の国家主義者の努力についてだった。すると、内務省アカデミーがゾリキンを雇い、研究を続ける場を提供。当時の内務省アカデミーは、セルゲイ・クリロフ少佐のリーダーシップのもと、より「リベラル」な専門家を探していた。ゾリキンのソビエト時代の研究生活については以下が詳しい：

Boris Vishnevskiy, “Eks-predsedatel’ konstitutstionnogo suda” [Ex-chairman of the constitutional court], *Nezavisimaya gazeta*, March 28, 1998. 以下も参照 Zor’kin (1984).

50. ゾリキンにはロシアの官界に多くの支持者がいた。2000年代のプーチン政権下、ゾリキンは、ロシアの国権を復活させる取り組みにおいて中心的役割を果たすようになった。2000年3月、プーチン大統領は、長年ロシア国家に仕えたゾリキンに勲章を授与した。

51. ワレリー・ゾリキンが2011年12月と12年1月に『ロシースカヤ・ガゼータ』紙に投稿した記事が、帝政時代末期の国家主義を現代に適応させる取り組みの典型例を示すものである：

“Dukh zakona” [Spirit of the law], *Rossiyskaya gazeta*, December 12, 2011, at

www.rg.ru/2011/12/11/zorkin-site.html

；“Rossiya: dvizheniye k pravu ili khaosu?” [Russia: moving toward law or chaos?], *Rossiyskaya gazeta*, January 26, 2012, at

www.rg.ru/2012/01/26/zorkin.html.

52. 2012年1月の『ガーディアン』のデイヴィッド・ハーストとトム・パーフィットによるインタビューのなかで、グレブ・パヴロフスキーはロシア大統領の稀有な地位について強調した。「憲法では、ロシア大統領があらゆるものの上位に立つ存在だと定められている。大統領が三権分立の制度の上位に立つ存在であるという考えは、われわれの憲法に明記されたものだ。大統領は、行政権とも別物の特別な力を有している……行政権の範囲は首相で終わる……皇帝のように、大統領はそのすべての上に存在する。プーチンにとって、それこそがもっとも重要な原則なのである」

53. たとえば、“Russia’s Putin Won’t Run for Re-Election in 2008,” Reuters, April 13, 2005を参照。

54. Marc Bennetts, “Putin Quits United Russia Party,” RIA Novosti, April 24, 2012, at

<http://en.rian.ru/russia/20120424/173011431.html>.

55. Putin, “Rossiya sosredotochivayetsya: vyzovy, na kotoryye my dolzhny otvetit’” [Russia muscles up: the challenges we must respond to], January 16, 2012.

この記事は最初に以下に掲載された :

Izvestiya, at <http://izvestia.ru/news/511884>.

また、以下も参照 : William Partlett, “Vladimir Putin and the Law,” Brookings Institution, February 28, 2012, at

www.brookings.edu/opinions/2012/0228_putin_law_partlett.aspx.

この記事が出た7日後、プーチンは「国家の問題」に関するアイデアを組み立てるにあたって、再びワレリー・ゾリキンの考えを拝借したようだ。以下の2つの記事を比べてみてほしい。

1) Vladimir Putin, “Rossiya: natsional’nyy vopros” [Russia: the national question], January 23, 2012, originally printed in *Nezavisimaya gazeta*, at

www.ng.ru/politics/2012-01-23/1_national.html,

2) Valery Zorkin, “Sovremennoye gosudarstvo v epokhu etnosotsial’nogo mnogoobraziya” [The modern state in an era of ethno-social diversity], *Rossiyskaya gazeta*, September 7, 2011, available on *Rossiyskaya gazeta’s* website at

www.rg.ru/2011/09/07/zorkin-site.html.

56. Putin, “Demokratiya i kachestvo gosudarstva” [Democracy and the quality of the state], *Kommersant*, February 6, 2012, at

www.kommersant.ru/doc/1866753.

57. Vladimir Putin, Annual Address to the Federal Assembly of the Russian Federation, April 25, 2005.

誤った引用の例としては、以下を参照 :

Mike Eckel, “Putin Calls Soviet Collapse a ‘Geopolitical Catastrophe,’” Associated Press, April 26, 2005.

58. 以下で引用されている :

“Putin Warns ‘Mistakes’ Could Bring Back ‘90s Woes,” RFE/RL, October 17, 2011, at www.rferl.org/content/putin_mistakes_could_bring_back_1990s_woes/24362626.html.

59. Gaidar (2007).

60. ガイダルは、国家に仕えてきた長い歴史を持つ著名な知識人一家の出身だった。彼の父チムール・ガイダルはソ連海軍将校で、のちにソ連の主要紙である『プラウダ』の従軍記者になった。祖父のアルカジー・ガイダルは有名なジャーナリストで、児童文学作家としても人気を博した。母方の祖父パーヴェル・バジヨーフは、ウラル地方に伝わる物語をもとにした童話や民話のシリーズを執筆した有名作家。

61. 2007年12月3日、2009年4月14日のブルッキングス研究所のヒューイト・フォーラムにおけるエゴール・ガイダルのプレゼンテーションでの私たち著者のメモより。また、2005年9月6日にモスクワのガイダル研究所、および2009年11月3日にワシントンのブルッキングス研究所にて行なわれた、エゴール・ガイダルとの研究会議での会話より。

62. グレブ・パヴロフスキーのインタビューより : *The Guardian*, January 24, 2012. この10年前の2001年、元KGB将軍ニコライ・レオノフは『スペツナズ・ロシイ』紙のインタビューで次のように語った。「エリツィンによって、ロシアの偉大な力[*velikaya derzhava*]は瓦礫の山と化した。エリツィンは、チェチェンの出来事……すべての状況によって力を失い、国を事実上の分裂状態にしたのである」。さらにレオノフはチェチェンについて、ウラジーミル・プーチンがボリス・エリツィンから引き継いだ「負の遺産」の一部だと表現した。「北コーカサスのガン腫瘍は、国じゅうに転移していたのだ」 : Yevdokimov, “Russkaya pravda Generala Leonova.”を参照。

63. 以下を参照 : “Pis’mennoye interv’yu v’etnamskoy gazeta ‘Nyan zan’” [Written interview

with Vietnamese newspaper “Nyan zan”], February 27, 2001, at <http://archive.kremlin.ru/text/appears/2001/02/28489.shtml>.

64. Dunlop (1993), p. 13を参照。ラマザン・アブドゥラティポフ——北コーカサス出身のアヴァール人で、当時のロシア連邦院（上院）の副議長——でさえも、この見方に同情的だった。とはいえ同時に、現存する行政機構を廃止すれば「別の紛争を駆り立てる」だけだと彼はわかっていた：Ramazan Abdulatipov, “O federativnoy i natsional’noy politike Rossiyskogo gosudarstva” [On the federal and national policies of the Russian state], published in full in *CMG Bulletin*, June 1995, p. 8.

65. セルゲイ・シャフライ、エゴール・ガイダル、グリゴリー・ヤ布林スキー、民族問題を専門に扱う省の大臣だったヴァレリイ・ティシュコフらはみな、新たな行政単位の導入を支持し、ドイツの連邦州（ラント）のシステムに似た恩恵を受けることができるはずだと主張した。2012年1月の『ガーディアン』のインタビューにおいて、グレブ・パヴロフスキーは次のように述べた。「プーチンは大統領に就任するなり、地方行政に関するこれらすべてのアイデアをそのまま採用した。エリツィンもこのような仕組みの成立を望んでいたが、彼にはそれを達成する機会がなかった。もともと、ロシアではとても人気のあるアイデアだった」

66. 2010年には8つ目の連邦管区が作られた。

67. Hill (2005)を参照。

68. ニキータ・ミハルコフの経歴とウラジーミル・プーチンとの「微妙な関係」については、以下を参照：

“Cannes Russia Director: Genius or Pro-Kremlin Opportunist,” *Sydney Morning Herald*, May 19, 2010, at

www.smh.com.au/entertainment/movies/cannes-russia-director-genius-or-prokremlin-opportunist-20100519-vdak.html.

69. ドキュメンタリー番組を発表したあと、ミハルコフは——憲法の規定に関係なく——2008年以降もプーチンが3期連続で大統領を務めるべきだと積極的に発言した：

Georgy Bovt, “Putin’s Plan for Higher Turnout,” *Moscow Times*, November 1, 2007. Later, in October 2010, Mikhalkov put out his own manifesto on the Russian state entitled *Pravo i pravda: Manifest prosveshchennogo konservatizma* [Law and truth: a manifesto of enlightened conservatism].

ミハルコフは、国家の基礎となる法、独立国家としてのロシアを保障するものとしてロシア憲法の正しい地位を取り戻すべきだと主張し、2008年の憲法からの逸脱を正当化しようとした。自らがプーチンと同じような立場にいること、つまり国家主義者（*gosudarstvenniki*/ゴスダルストヴェンニク）が集まる大きな集団の代表者であることを表明した。ミハルコフはさらに、1999年のプーチンのミレニウム・メッセージの核となる考えに言及し、伝統的なロシアの価値観を復活させ、ロシアの歴史や文化に焦点を合わせることの重要性を説いた。また彼は、統一の大切さをとりわけ強調し、ワレリー・ゾリキンによる法治国家（*pravovoye gosudarstvo*）の議論によって提唱されたコンセプトの多くを再び引き合いに出した。そのなかには、社会が国家に従属するものであるという考えも含まれていた：Mikhalkov (2010).

70. Bobkov (1995).

71. 同上、pp. 376–77.

72. 同上、pp. 378–79.

73. Putin, Millennium Message, December 29, 1999.

74. 同上。

75. ウラジスラフ・スルコフは、1999～2011年にロシア大統領府副長官および第一副長官、11～13年に第一副首相を務め、その後もプーチンの側近として活躍している。彼はクレムリンを代表す

るイデオロギー信奉者で、「灰色の枢機卿」と称され、ロシア国家に関するプーチンの核となるアイデアの多くを形作るうえで重要な役割を果たしてきた：

Pomerantsev (2011), pp. 3–6; and Vladimir Stepanov, “The Gray Cardinal Leaves the Kremlin,” *Russia Beyond the Headlines*, December 28, 2011, at

http://rbth.com/articles/2011/12/28/the_gray_cardinal_leaves_the_kremlin_14123.html.

第1版に掲載された以下の情報はインターネット上から削除されている：

“Bespartiynyy ideolog Vladislav Surkov” [The partyless ideologue Vladislav Surkov], *Gazeta.ru*, May 16, 2007.

第4章 歴史家

1. この章で詳説する議論は、Hill and Gaddy (2012)で最初に発表したもの。

2. この考えは本質的に、ジョージ・オーウェルが『1984』で提示するアイデアと一致するものである——「過去をコントロールするものは未来をコントロールし、現在をコントロールするものは過去をコントロールする」Orwell (1949), p.37. (邦題は『一九八四年』[高橋和久訳/早川書房] 56ページより)。実際、2012年5月、プーチンは新しいロシア文化大臣にウラジーミル・メジンスキーを任命した。メジンスキーはロシア史をテーマにしたベストセラー小説シリーズ『ロシアの神話』の著者で、この連作はロシアの過去についての否定的な描写に異議を唱えるものである。2009年にメジンスキーは大統領委員会のメンバーに選ばれ、ロシアの出版物や公式文書における歴史の「改竄」の撲滅に取り組んだ：

Amy Knight, “Russia’s Propaganda Man,” *NYR* (blog), *New York Review of Books*, May 31, 2012, at

www.nybooks.com/blogs/nyrblog/2012/may/31/putins-propaganda-man/.

3. Blotskiy (2002), p. 76. 2巻に及ぶ大作『ウラジーミル・プーチン：人生の歴史 (*Vladimir Putin: istoriya zhizni*)』のなかで、ブロツキーは伝記的な情報と、プーチン本人や彼の人生のさまざまな段階の知人たちとのインタビューの引用を組み合わせている。興味深いことに (かつ巧みに)、ブロツキーは本の各セクションを「章」とは呼ばず、「istorii=歴史」と呼ぶ——第1歴史、第2歴史といった具合だ。

4. 以下からの引用：

Guy Falconbridge and Gleb Bryanski, “Putin Invokes History’s Lions for Return to Kremlin,” Reuters, November 1, 2011, at

<http://in.reuters.com/article/2011/11/01/idINIndia-60243820111101>.

5. プーチンとボリス・エリツィンによる歴史の言及と利用にまつわる詳しい議論については、以下を参照：Malinova (2011), pp. 106–22. たとえば、2012年1月の『ネザヴィシマヤ・ガゼータ』紙に掲載されたロシアの国家的な問題に関する記事のなかで、プーチンは歴史について“選択的に”言及した。彼はロシアの民族間の調和の取れた理想像を描くために、11世紀のロシアの歴史的資料に触れ、次に19世紀について言及し、さらに共産主義後のロシアについて語った。が、ソビエト時代はあからさまに回避した。

6. Clifford Gaddy and Fiona Hill, “Vladimir Putin’s League of Extraordinary Gentlemen,” Valdai Discussion Club, January 30, 2012, at

www.brookings.edu/opinions/2012/0130_putin_gaddy_hill.aspx.

7. Riasanovsky (1959), p. 74.

8. Konstantin Azadovsky, “Russia’s Silver Age,” in Isham (1995), pp. 79–90, p. 84.

9. 同上, p. 89. どちらの時代の政府も、輝かしい (とされる) ロシアの過去の時代とのつながりを作り出すために、驚くほど似たような戦略を採った。たとえば1913年、ロマノフ王朝はロシア支配300周年を祝った。その式典 (とその直前の数年間) は、中世ロシアのルーツであるモスクワ大

公国への賛美に彩られたもので、17世紀をテーマとした建設プロジェクトが進められ、宮中舞踏会や野外劇がたびたび行なわれた。サンクトペテルブルクが建都されたのは18世紀になってからのことだが、その際、中心地にはモスクワ大公国様式の教会が建設された。また、かつてのモスクワ大公国を想起させるネオ・ビザンティン建築様式で復元された建物も少なくない。帝政ロシアの過去の神話や象徴への回帰の大切さに関する包括的な議論については、Wortman (2006)を参照。“世紀の切れ目”としての1900年代と1990年代における出来事、考え、討論の類似性は、著者フィオナ・ヒルのハーバード大学・歴史博士号論文 (1998) の主要なテーマの1つである。

10. 2005年9月のヴァルダイ会議においてウラジーミル・プーチンとクレムリン内で面会した際、私たち著者は、これらの胸像や肖像画を実際に目にした。

11. 以下を参照：

“Vystupleniye Predsedatelya Soveta Federatsii S. M. Mironova na konferentsii ‘Rol’ Gosudarstvennogo soveta i Soveta Federatsii Federal’nogo Sobraniya Rossiyskoy Federatsii v istorii rossiyskogo parlamentarizma” [Speech by Chairman of the Federation Council S.M. Mironov at the conference on “The Role of the State Council and the Federation Council of the Federal Assembly of the Russian Federation in the history of Russian parliamentarianism”], December 18, 2006, at

http://council.gov.ru/inf_ps/chronicle/2006/12/item5465.html.

12. アンドレイ・ソルダトフとイリーナ・ボロガンは、2000年代のKGBとFSB出身の役人の台頭について描いた著書『新たな貴族 (*The New Nobility*)』のなかで、諜報機関の元トップでソ連指導者だったユーリ・アンドロポフの評判を回復させるための1999年以降の動きについて詳述している。たとえば1999年12月20日、アンドロポフを称える飾り額を再設置するための式典がFSB本部で行なわれ、プーチンも参加した。また、アンドロポフの生誕90周年を祝い、学校に彼の名前が付けられ、高さ3メートルの銅像も作られた。さらに、アンドロポフの人生とキャリアについての本も数冊出版された。2005年には、ボルシェビキの秘密警察チェカーの創設者フェリックス・ジェルジンスキーの胸像が、撤去される前と同じモスクワ警察本部の中庭に戻された。しかしながら、さらに有名なジェルジンスキーの像——モスクワ警察本部から何本か通りを隔てたFSB本部の前のルビャンカ広場 (旧ジェルジンスキー広場) に1991年まで設置されていた像——のほうは、2002年に当時のモスクワ市長ユーリ・ルシコフが再設置を提案したものの、実現することはなかった：Soldatov and Borogan (2010), pp. 91–97; Brian Whitmore, “Andropov’s Ghost,” *The Power Vertical* (blog), RFE/RL, February 9, 2009, at

www.rferl.org/content/Andropovs_Ghost/1467159.html

; and Douglas Birch, “Russian Nostalgia Feeds Struggle Over Monument to KGB Founder,” *Baltimore Sun*, November 30, 2002, at

http://articles.baltimoresun.com/2002-11-30/news/0211300276_1_statue-secret-police-monument.

同様に、スターリンに関するドナルド・レイフィールドの著作によれば、2002年にロシアの郵便局は記念切手「ソビエト防諜活動80周年」を発行したという。この切手には、何十万人もの市民の殺害を計画した、1920年代の諜報機関のもっとも「恐ろしい」指導者たちが描かれていた：

Rayfield (2004), pp. xii–xiii.

13. 以下を参照：

Max Delany, “An Inside Track to President Putin’s Kremlin. Profile: Vladimir Yakunin,” *St. Petersburg Times*, October 2, 2007, at

http://sptimes.ru/index.php?action_id=2&story_id=23175.

また、ヤクーニンが代表を務める〈Fond Andrey Pervozvannogo〉 (聖アンデレ基金) のウェブサイトも参照：

www.fap.ru/

14. Elif Batuman, “The Bells: How Harvard Helped Preserve a Russian Legacy,” *The New Yorker*, April 27, 2009を参照。要約は以下で閲覧可能：

www.newyorker.com/reporting/2009/04/27/090427fa_fact_batuman

15. Bush (2010), p. 196; and Rice (2011), p. 63を参照。

16. たとえば、以下を参照：

Yakov Krotov, “Oni v svoikh korridorakh: Svyataya pustota—Vliyaniye dukhovnika prezidenta na sud’bu strani sil’no preuvelicheno” [In their corridors: A sacred nonentity—The influence of the president’s confessor on the country’s destiny is greatly exaggerated], *Obshchaya gazeta*, December 20, 2001.

英語版：*Johnson’s Russia List*, “Views of Putin’s Priest Described,” January 8, 2002, at

www.cdi.org/russia/johnson/6009-10.cfm.

17. Gvosdev (2009), pp. 347–59を参照。グヴォスデブ (Gvosdev) は、1997～2007年のあいだにウラジスラフ・スルコフがロシアの政治文化について著したさまざまな資料を調査した。主権民主主義についての議論はp. 349を参照。

18. このような理由づけは、ワレリー・ゾリキンの著作にもよく出てくる。さらに2012年、プーチンの側近ウラジーミル・ヤクーニンとモスクワ国立大学教授ステパン・スラクシン (Stepan Sulakshin) が、ロシアの歴史的価値観——共同体 (*obshchinnost*)、集産主義 (*kollektivizm*)、温情主義 (*paternalizm*) ——に沿ってロシア憲法を書き換えるという提案を出した際にも、同じような理由づけが利用された。この動きは、1993年制定のロシア憲法に記された一般的な民主主義の価値観を取り除き、1999年のミレニウム・メッセージでプーチンが枠組みを示した基礎的な概念への回帰を目指すものである。

<http://kommersant.ru/doc/1939276>

19. たとえば、『ニューヨーク・タイムズ』のモスクワ支局長エレン・バリーは、2012年2月初旬の私たち著者とのメールでのやり取りのなかで、次のように明かした。同年3月4日の大統領選に向けた選挙期間中、彼女はプーチンの報道官ドミトリー・ペスコフにインタビューを行ない、ロシア社会のあらゆる変化にプーチンはどのように対応しているのかと尋ねた。するとペスコフは、「プーチンは一般的なロシア国民 (ナロード) と対話することによって対応している」と答えた。国民との交流によって築いた信頼関係を通して、プーチンは自分こそがロシア人の最大の理解者だと信じているという：

Ellen Barry, “Putin Aide Says Foreign Hands Are Behind Protests,” *New York Times*, February 3, 2012, at

<http://www.nytimes.com/2012/02/04/world/europe/putin-aide-promises-significant-changes-in-russian-political-system.html? r=0>.

20. 以下を参照：

Fiona Hill, “Dinner with Putin: Musings on the Politics of Modernization in Russia,” *Brookings Foreign Policy Trip Reports*, No. 18, October 2010, at

www.brookings.edu/reports/2010/10_russia_putin_hill.aspx.

21. 〈全ロシア人民戦線〉の公式ウェブサイト：

<http://narodfront.ru/organization/20110606/379742791.html>.

22. Bobkov (1995), p. 381.

23. Putin, Millennium Message, December 29, 1999, 『ネザヴィシマヤ・ガゼータ』紙のウェブサイトで見ることが可能：

www.ng.ru/politics/1999-12-30/4_millennium.html.

24. “Predsedatel’ Pravitel’sтва Rossiyskoy Federatsii V.V. Putin prinyal uchastiye v rabote

syezda Vserossiyskoy politicheskoy partii ‘Yedinaya Rossiya’” [Prime Minister Vladimir Putin takes part in the conference of the “United Russia” Party], November 27, 2011, at

<http://archive.premier.gov.ru/events/news/17248/>.

<http://archive.premier.gov.ru/eng/events/news/17248/>. (英語版)

25. 2010年8月31日～9月7日に開かれたヴァルダイ会議の概要については、ヴァルダイ会議のウェブサイトで閲覧可能：

<http://valdaiclub.com/event/22152.html>.

26. 2010年9月6日、ソチのサナトリウムで開かれたヴァルダイ会議でのウラジーミル・プーチンとの会合のメモより。

27. Mikhalkov (2010). この引用の最後から2番目の文章では「*delit' ikh na svoi i chuzhiye*」というロシア語が使われている。*svoi*は*nashi* (私たち) と同等の意味を持ち、*chuzhiye*は「よそ者」や「他者」を意味する。つまり、ミハルコフはここで、プーチンが日ごろから繰り返す警告——すべてを「私たち」と「私たち以外」あるいは「私たち対彼ら」の構図に当てはめてはいけ——に同調しているのだ。

28. たとえば2012年4月11日の首相として最後の議会演説で、プーチンは下院代議士の質問に答え、「ロシア人」を意味する包括的な考えの重要性について話した。「いいかね、これはすでに公の場でも話してきたことだ。あるとき、私は教会に残された資料を渡された。そこには、1600年過ぎのある年から私の代に至るまで、親戚全員がモスクワから120キロか180キロほど離れた1つの村に住んでいたことが示されていた。そして300年あまりのあいだ、親戚たちは同じ教会に通いつづけたんだ」：

“Predsdatel' Pravitel'stva Rossiyskoy Federatsii V.V. vystupil v Gosudarstvennoy Dume s otchyotom o deyatelnosti Pravitel'stva Rossiyskoy Federatsii za 2011 god” [Chairman of the Government of the Russian Federation V.V. Putin appeared before the State Duma with the report on the activity of the Government of the Russian Federation for 2011], April 11, 2012, at

<http://archive.premier.gov.ru/events/news/18671/>.

<http://archive.premier.gov.ru/eng/events/news/18671/>. (英語版)

29. たとえば、以下を参照：

“United Russia—Racing to the 2012 Elections,” *Nezavisimaya gazeta*.

RIA Novosti in *Russian Press—Behind the Headlines*, October 7, 2011, at

<http://en.ria.ru/papers/20111007/167471677.html>. (英語版)

30. 私たち著者としては、カーネギー国際平和基金モスクワセンターの職員で、学術誌『*Pro et Contra*』の編集者でもあるマリア・リップマンに感謝したい。『ナショナル・インタレスト』誌の記事を執筆していたとき、リップマンはこのコンテストの存在を私たちに思い出させてくれ、当時の状況や奇妙な点について教えてくれた。ほかにも、以下を参照：

Tom Parfitt, “Medieval warrior overcomes Stalin in poll to name greatest Russian,” *The Guardian*, December 28, 2008, at

www.guardian.co.uk/world/2008/dec/29/stalin-name-of-russia.

31. 秩序を取り戻す取り組みの一部として、1906年8月、ストレイピンは軍主導による市民のための軍法会議の設立を命じ、死刑宣告を受けた反対勢力を即座に処刑していった。1906～11年のいわゆる「ストレイピンの反動」の時期、絞首刑のために使われた縄は「ストレイピンのネクタイ」と呼ばれた：Pipes (1990), pp. 170–71. 抑圧と改革のバランスに関するストレイピンの見方については、以下を参照：Pipes (2005), p. 175.

32. これは「強者への賭け」と呼ばれ、ロシア君主制を支持する地方の自然発生的な保守的勢力を作り出すための試みだった。多くの学者が指摘してきたとおり、ストレイピンの政策のこの点については、歴史家のプーチンも見習おうとはしなかった。「プーチニズムに対する支持ベースを作る

という周到な政策がないことが……大きな欠点の1つである……2011～12年の抗議活動が示すとおり、“新たな階級”は都会の住民であり、あからさまにプーチンに対して批判的だった……プーチンはロシア社会を見ると、エリートと画一的な一般大衆しか見ていないのである」（2012年7月24日、マーク・ガリオツティと著者のやり取りより）。以下も参照：

Mark Galeotti, “Putin, Kudrin and the Real Stolypin,” *In Moscow’s Shadows* (blog), January 6, 2012, at

<http://inmoscowsshadows.wordpress.com/2012/01/06/putin-kudrin-and-the-real-stolypin/>.

ガリオツティの主張は、2011年11月にカルーガで開かれたヴァルダイ会議でより強固なものになる。その席において、クレムリンの社会学者や顧問たちは、エリートと人民（ナロード）について繰り返し言及した。しかし、この問題に関してほかの参加者に深く追及されると、クレムリン関係者たちは、エリートと人民という2つの拡大するカテゴリーのなかに新たに出現した社会的団体や利益団体を見分けることも、世論形成におけるその集団が持つ役割を識別することもできなかった：

“2011–12 Elections and the Future of Russia. Development Scenarios for the Next 5–8 Years,” Kaluga, November 7–9, 2011 における著者の個人的なメモより。

33 . Pipes (1990), pp. 169–70 and pp. 177–78を参照。

34 . Pipes (2005), p. 177.

35 . 2007年9月14日、ソチ郊外の大統領邸宅〈ボチャロフ・ルチェイ〉で開かれたヴァルダイ会議でのウラジーミル・プーチンとの会合における著者の個人的なメモより。

36 . Pipes (1990), pp. 175–77を参照。

37 . Falkus (1972), pp. 83–84.

38 . 2012年4月11日、下院でのプーチンの演説（全文は原注28を参照）。

39 . たとえば、ロシア経済開発貿易省が発表した「ロシア2020」に関するレポートが以下でダウンロード可：

“Innovatsionnaya Rossiya–2020 (Strategiya innovatsionnogo razvitiya Rossiyskoy Federatsii na period do 2020 goda)” [Innovative Russia–2020 (a strategy for the innovative development of the Russian Federation in the period until 2020)] at

<http://innovation.gov.ru/taxonomy/term/586>.

40 . これは、1997年の次教書演説でエリツィンのチームが表明したのとはほぼ同じ考えである。つまり、現政権の改革プログラムが未完了のまま終わった場合、ロシア国家の秩序が完全に回復することはないという意味：

Hill, “Dinner with Putin: Musings on the Politics of Modernization in Russia,” Brookings Foreign Policy Trips Reports; and Fiona Hill and Clifford Gaddy, “Putin’s Next Move in Russia: Observations from the 8th Annual Valdai International Discussion Club,” December 12, 2011, at

www.brookings.edu/interviews/2011/12/12_putin_gaddy_hill.aspx.

また、2012年2月6日にモスクワで開かれた、プーチンとロシア人政治学者の集団との会合については、以下のフョードル・ルキヤノフ（Fedor Lukyanov）によるレポートを参照：

http://ria.ru/vybor2012_analysis/20120207/559346082.html.

41 . Figes (2003)より。

42 . 2012年4月11日、下院でのプーチンの演説。

第5章 サバイバリスト

1. Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), pp. 9–10. [邦訳では16ページ]

2 . See Moskovoff (2002), p. 196.

3 . 2003年6月20日、国内外メディアとのプーチンの記者会見で、プーチンはこう続けた。「この国

で栽培されるジャガイモの90%がそういった小さな家庭菜園で育てられている。90%だ！ さらに、野菜の80%、果物の60%が家庭菜園で栽培されたものだ」。実際のところ、2011年になると、その割合はわずかに減少した。それでも、2011年にロシアの一般家庭で個人的に栽培されたジャガイモの量は、アメリカの農業部門全体でのジャガイモの収穫量の3分の1に相当した。ロシア全体での“個人による”ジャガイモの生産量は、1世帯につき年間540キロを超える。著者によるこの計算は、Russian Federal State Statistics Service, *Statistical Yearbook for 2011*のデータに基づくものである。また、家庭菜園に関するプーチンのコメントはRies (2009), p. 202より引用。この記事のなかでリース (Ries) は、ロシアにおける毎日の生き残りとして自給自足のメカニズムの中心を占めるのがジャガイモであり、この地味な野菜こそが「歴史的な記憶に埋め込まれた知識の複合的なシステム」として作用していると主張する。記者会見の全文は以下を参照：

“Stenograficheskiy otchet o press-konferentsii dlya rossiyskikh i inostrannykh zhurnalistov”

[Press conference with Russian and foreign media], June 20, 2003, at

http://archive.kremlin.ru/appears/2003/06/20/1237_type63380type63381type82634_47449.shtml

1. http://archive.kremlin.ru/eng/text/speeches/2003/06/20/1712_type82915_47467.shtml. (英語版)

4. Gaidar (2007), p. 145 : ソ連閣僚会議の最高会議幹部会が作成した資料からの抜粋。

5. 同上, p. 187 : 1990年11月16日のソビエト政治局の会合での、共産党レニングラード州委員会の第1書記ボリス・ギダスポフの発言。

6. 同上, p. 198.

7. 同上, p. 239.

8. 同上, pp. 198–99.

9. Gessen (2012), pp. 104–05 and pp. 118–19を参照。

10. 以下を参照：

“Prime Minister Vladimir Putin Meets with Heads and Editors-in-Chief of Domestic Television and Radio Broadcasting Companies and Print Media,” January 18, 2012, at

<http://archive.premier.gov.ru/eng/events/news/17798/>.

11. プーチンの論文にまつわる詳しい議論については、第9章の囲み部分を参照。

12. King and Cleland (1978).

13. 同上, *passim*.

14. Zen'kovich (2006), p. 130. 2004年3月、国家備蓄局 (*Gosrezerv*) は「ロシア連邦国家備蓄局 (*Rosrezerv*)」に改名された。

15. Grigory Puganov and Yury Shtukin, “Zakroma Rodiny: Ne vse v Rossii plokho lezhit” [The granary of the Motherland: not everything is in a bad condition in Russia], *Izvestiya*, August 9, 2000, at

<http://dlib.eastview.com/browse/doc/3049287>.

16. Andrey Sergeev, “Vserossiyskaya zanachka” [The all-Russian stash], *Russkiy kur'er*, No. 11, March 20, 2006.

17. 同上。

18. Puganov and Shtukin, *Izvestiya*, August 9, 2000.

19. 同上。

20. Sergeev, *Russkiy kur'er*, March 20, 2006.

21. 著者によるこの計算は、以下の記事内に出てくる量と商品のタイプに関する情報に基づくものである：

Mikhail Falaleyev, “Veto na neprikosnovenny zapas” [A veto on emergency stores], *Rossiyskaya gazeta*, May 19, 2006.

22. Yevgeniy Verlin, “Gosregulirovaniye. Aleksandr Grigor’ev: ‘Polnykh analogov sistemy Rosrezerva v mire ne sushchestvuyet’” [Regulating the state. Alexander Grigoriev: “A complete analogue to the Rosrezerv system does not exist elsewhere in the world”], *Profil*, July 17, 2006.
23. 引用は同上より。
24. Gaidar (2007), pp. 110–14.
25. Gaddy and Ickes (2010), pp. 281–311, note 9を参照。
26. Gaddy and Ickes (2009)を参照。
27. Gaddy and Ickes (2010)を参照。
28. 2012年4月11日、下院でのプーチンの演説。「支払い能力」を示すロシア語「*sostoyatel'nost'*」は多種多様な意味を持ち、「力」「不屈の精神」「富」「資金」などの考えを包括的に指す単語である：
- “Predsedatel' Pravitel'stva Rossiyskoy Federatsii V.V. vystupil v Gosudarstvennoy Dume s otchyotom o deyatel'nosti Pravitel'stva Rossiyskoy Federatsii za 2011 god” [Chairman of the Government of the Russian Federation V.V. Putin appeared before the State Duma with the report on the activity of the Government of the Russian Federation for 2011], April 11, 2012, at <http://archive.premier.gov.ru/events/news/18671/>.
<http://archive.premier.gov.ru/eng/events/news/18671/>. (英語版)
29. 2012年4月17日、財務省職員に向けたプーチンの演説：
www.newsru.com/russia/17apr2012/kudrin.html
30. Blotskiy (2002), pp. 59–62. この章タイトル「“砂場”の街」(the ‘Sandpit’ Streets) は、本書内でプーチンが引用する1971年公開のアメリカ映画 *The Sandpit Generals* のロシア語版タイトル *General'y peschanykh kar'yerov* を暗示するものである。この映画は、ブラジルに住むホームレスの若者たち (ストリート・ギャング) の日々の苦労を描いたもので、ソ連では異例の大ヒットを記録。プーチンが20代前半だった1974年、『コムソモリスカヤ・プラウダ』紙は、この映画を「過去最高の外国映画」と称賛した。ソ連の大衆文化を引き合いに出すのは、プーチンの得意技といっている。特に、とりわけ思い入れのある個人的な経験にスポットライトを当てたり、ある事実を強調したりするときには言及することが多い。
31. Blotskiy (2002), pp. 60–61.
32. 以下などを参照：
- Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), pp. 20–22; Blotskiy (2002), pp. 125–36.
- プーチンは柔道で才能を見事に開花させ、レニングラード市でも一、二を争うトップ選手にまで成長。レニングラード市代表チームの一員として市外の大会に遠征に行くことも多かった。
33. Evangelista (2002), pp. 46–86を参照。
34. たとえば、以下を参照：Evangelista (2002), pp. 63–86; and Shevtsova (2005), pp. 134–62; 引用はp. 134.
35. Gessen (2012). “Rule of Terror,” pp. 199–226を参照 [邦訳は「九章 テロの統治」245～278ページ]。この章では、1999年の戦争へとつながるいくつかのテロ攻撃を、プーチンやFSBがセッティングしたとされる疑いについて詳説されている。
36. たとえば、以下を参照：
- “Chechnya and the North Caucasus. And They Call It Peace: Vladimir Putin’s Presidency Began in Chechnya; the Region Is Restive as It Ends,” *The Economist*, February 28, 2008.
37. 引用はGevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), p. 133より [邦訳はpp177～178]。
38. 北コーカサスでのアレクサンドル・グリゴリエフの役割、彼の功績を称える勲章については、以下を参照：Zen’kovich (2006), p. 130. また、北オセチア共和国ベスラン市での学校占拠事件のあと、国家備蓄を利用した医療サポートが行なわれた。詳しくは以下を参照：Sergeyev, *Russkiy kur'er*,

March 20, 2006.

39. Shevtsova (2005), p. 137.

40. Adrian Blomfield, "Russia Ends 10 Year War in Chechnya," *The Telegraph*, April 16, 2009, at

www.telegraph.co.uk/news/worldnews/europe/russia/5165328/Russia-ends-10-year-war-in-Chechnya.html.

41. 引用はGevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), pp. 133–35より。

42. ロシアの民族主義や急進的的革命思想による政治・社会への破滅的な影響に関する詳しい議論については、以下を参照：Lacquer (1993).

43. イスラム教の民族集団と“文化的”あるいは伝統的にかかわりを持つロシア国民の数は、一般的に1,500万～2,000万人といわれる。しかし、ロシア国内のイスラム教に詳しい学者（たとえばサンディエゴ大学のミハイル・アレクセーエフ）によると、ロシア連邦内で実際にイスラム教を信仰する人はもっと少ない1,100万人前後であり、そのほとんどの住民はヴォルガ地域と北コーカサスに集中しているという：

Alekseev, "Overcounting Russia's Muslims: Implications for Security and Society," PONARS Eurasia Policy Memo No. 27, August 2008, at

www.gwu.edu/~ieresgwu/assets/docs/pepm_027.pdf.

44. 以下を参照：Anna Arutunyan and Lidia Okorokova, "Race Riot on Manezhnaya," *Moscow News*, December 13, 2010, at

<http://themoscownews.com/politics/20101213/188276816.html>.

ロシアの政治家評論家のなかには、この一件を人種暴動への不安を意図的に煽る動きだと警鐘を鳴らす者もいた。彼らは、ウラジーミル・プーチンやロシア政府が確固たる指針を示して市民を導かなければ、負のスパイラルに陥るリスクがあると訴えた。2012年3月29日、ロシア人ジャーナリストのオレグ・カシン、ロシアの専門家パーヴェル・バエフ、著者によるブルッキングス研究所での討論からの個人的なメモより。

45. 2011年11月10日、モスクワの通信社（RIAノーボスチ）の本部で開かれたヴァルダイ会議に参加したウラジーミル・ジリノフスキーは、移民排斥と反チェチェンを訴える過激な演説を行なった。2011～12年の大統領選の際のジリノフスキーのポスターには「ロシア人（ロシア民族）のためのロシア」を謳うスローガンが掲げられていた。

46. Vladimir Putin, "Predsedatel' Pravitel'stva Rossiyskoy Federatsii V.V. Putin prinyal uchastiye v rabote syezda Vserossiyskoy politicheskoy partii 'Yedinaya Rossiya'" [Speech to the conference of the United Russia party], November 27, 2011. The link in Russian is at

<http://archive.premier.gov.ru/events/news/17248/>.

<http://archive.premier.gov.ru/eng/events/news/17248/>. (英語版)

47. 〈ナージ〉は、2000年代に創設された一連のクレムリン寄りの青年団のなかで、最大規模を誇る団体である。この団体が設立されたのは、ウクライナでオレンジ革命が勃発した直後の2005年だった。オレンジ革命では、学生運動と学生団体が重要な役割を果たした。たとえば、ウクライナの学生組織〈ボラ〉は、1990年代にセルビアのスロボダン・ミロシェヴィッチ大統領を失脚させる一翼を担った青年団体の先例に倣って活動していた。〈ボラ〉はウクライナ全土に支部や拠点を置き、選挙における不正を暴いて発表した。それが、2004年11月から2005年1月にかけてのウクライナでの大規模デモを引き起こすきっかけとなり、結果として大統領選挙の結果を覆すことになった。プーチンとクレムリンは、ウクライナの〈ボラ〉のような団体の活動が国内で活発化しないように先手を打ち、ナージに加えて〈モロダーヤ・グヴァルディヤ（若き親衛隊）〉や〈スタリ（鋼鉄）〉といった団体を起ち上げた。〈ナージ〉は、組織的な宣伝活動のためにインターネットで大々的な活動を繰り広げ、さらに年に1度、トヴェリ州のセリゲル湖でキャンプを開催。毎年、プーチンや

クレムリンの重要人物がメンバーたちと交流するためにキャンプを訪れている。〈ナージ〉の活動のさらなる詳細については、以下を参照：Lucas (2008), pp. 78–91. また、2011年12月には、モスクワの抗議活動に対抗するため、〈ナージ〉はプーチンを支援する集会やデモを行なった：

Miriam Elder, “Russian Election: Police, Troops and Youth Groups Stifle Anti-Putin Protests,” *The Guardian*, December 6, 2011, at

www.guardian.co.uk/world/2011/dec/06/russian-election-anti-putin-protests,

and Simon Shuster, “The Empire Strikes Back: Putin Sends in the Storm Troopers,” *Time*, December 7, 2011, at

www.time.com/time/world/article/0,8599,2101741,00.html.

48. プーチンがこう語ったのは、〈RIAノーヴォスチ〉の本部でウラジーミル・ジリノフスキーが移民排斥を声高に訴えた直後だった。この討論の順番は、プーチンのより冷静で見識ある立場を強調するために事前に練られたものに違いない。

49. このミハルコフの映画は、2007年のヴェネチア国際映画祭のコンペティション部門に出品され（ミハルコフは特別銀獅子賞〔生涯功労賞〕を受賞）、さらにアカデミー賞の外国語映画賞にノミネートされた。ロシア語の公式ウェブサイト：

www.trite.ru/projects_in.mhtml?PubID=124/.

50. たとえば、以下を参照：

Gregory Fiefer, “The Price of Progress—Life in Kadyrov’s Grozny Permeated by Fear,” RFE/RL, August 11, 2009, at

www.rferl.org/content/The_Price_Of_Progress_Life_In_Kadyrovs_Grozny_Permeated_By_Fear/1797452.html.

ラムザン・カディオロフの詳細なプロフィールについては以下を参照：*New York Times*, updated on October 6, 2011, at

http://topics.nytimes.com/top/reference/timestopics/people/k/ramzan_a_kadyrov/index.html.

51. 帝政時代におけるこの政策の変遷に関する議論については、以下を参照：

Paul Henze, “Circassian Resistance to Russia,” in Marie Bennigsen Broxup (1992). また、この記事のPDFは以下で閲覧可能：

www.circassianworld.com/Circassian_Resistance.pdf.

52. 2012年3月29日、ロシア人ジャーナリストのオレグ・カシンと著者による、ブルッキングス研究所での討論からの個人的なメモより。

53. たとえば、以下を参照：

“Press conference by Russia’s Choice Leaders Yegor Gaidar and Sergei Kovalev,” *Official Kremlin International News Broadcasts*, December 13, 1993.

議会選挙の直後に行なわれたこの記者会見のなかで、ガイダルは次のように発言した。「ロシアにおけるファシズムの脅威は大きく膨れ上がっている。ジリノフスキーの訴えの先にあるものは、戦争、血、貧困、そしてロシアの死である……これまで、人々は騙されてきた。ポピュリスト的なスローガン、実現不可能な約束、安っぽい演技に欺かれてきたのだ」。エリツィン大統領も、議会後の1993年12月22日に市民の前に立った際、急進主義、ファシズム、過激な民族主義をガイダルと同じように批判した：

“Yeltsin Vows to Push Ahead with Reforms as he Keeps an Eye on Right-Wing Leader,”

Vancouver Sun, December 23, 1993. 自分たちの退陣後に何が起こりうるか——そういった恐怖を植えつけるエリツィンとプーチンの戦略の類似性については、Payne (2007)でも指摘されている。

54. 番組内の発言の書き起こし原稿は以下で閲覧可能：

<http://government.ru/docs/17409/>.

55. 以下を参照：

Vladimir Putin, “Rossiya: Natsional’nyy vopros” [Russia: the national question], *Nezavisimaya gazeta*, January 23, 2012, at

www.ng.ru/politics/2012-01-23/1_national.html.

<http://rt.com/politics/official-word/migration-national-question-putin-439/>. (英語版)

56. この記事はワレリー・ゾリキンの考えにも大きな影響を受けている。ゾリキン自身による記事 “Sovremennoye gosudarstvo v epokhu etnosotsial’nogo mnogoobraziya” [The modern state in an era of ethno-social diversity] のなかで、彼は同じような重要な考えを提示している。たとえば、ゾリキンは多民族政策の失敗を指摘し、人々の政府への帰属意識を高めるための法律制定の必要性を訴えた: *Rossiyskaya gazeta*, September 7, 2011, at

www.rg.ru/2011/09/07/zorkin-site.html.

57. たとえば、以下を参照:

Sergei Markov, “The Enlargement of Agencies is Politics: A Fundamental Administrative Reform Will Be Its Logical Continuation,” *Strana.ru*, October 17, 2001. 翻訳版: *Johnson’s Russia List*, October 18, 2001, at

www.russialist.org/5496-13.php.

58. たとえば、以下を参照:

Valery Tishkov, “Understanding Violence for Post-Conflict Reconstruction in Chechnya,” Centre for Applied Studies in International Negotiations (CASIN); Tishkov, “The Rehabilitation of War-Torn Societies Project” (Geneva, January 2001), at

www.chechnyaadvocacy.org/conflict/Tishkov.pdf;

and Tishkov (2004).

59. この点についてはTishkov (1997)できわめて明解に説明されている。何人かのロシア人ブロガーが、プーチンがティシュコフの上記の記事を参照していることに気がついた。さらにブロガーたちは、ティシュコフが2人の同僚と書いた研究論文からプーチンが直接的に引用した部分も発見した。その研究論文は、教育制度内でのロシアの多民族性を強調する大切さについて訴えるものだった。たとえば、以下のアレクサンドル・モロゾフのブログを参照:

<http://amoro1959.livejournal.com/1687369.html>.

60. “Rodina Mat’ Zovet!” in White (1988), p. 123, plate 6.7を参照。

61. Zegers and Druick (2011)では、歴史的人物を使ったソビエト時代のポスターがいくつか例示され、ロシア国家を守るためのその役割について説明されている。たとえば、1942年に制作されたあるポスターには、アレクサンドル・ネフスキー、ドミートリー・ドンスコイ、ミハイル・クトゥーゾフらの肖像画が描かれ、「われわれの偉大なる先人たちの勇敢さを今こそ呼び起こし、この戦争を戦い抜こう」というスローガンが書かれていた: Zegers and Druick (2011), p. 84. 似たようなポスターの1枚では、古くからのゲルマン民族（ドイツ騎士団、プロシア人、ドイツ人）との数々の戦いを想起させる次のような文言が記されている——「いつの時代においても、ロシア人兵士はプロシア人を叩きのめしてきた。ネヴァの戦いでも、ウクライナ独立戦争でも、ロシアが勝利した。イヴァン雷帝、スヴォーロフ大元帥、ブルシーロフ騎兵大将らがゲルマン民族に勝利した。ついに、ドイツの害虫どもを殲滅させる 때가来たのだ」: Zegers and Druick (2011), p. 243.

62. より詳しい説明については以下を参照: Gvosdev (2009). 著書のなかでグヴォスデフは、大統領補佐官ウラジスラフ・スルコフ（つまり、プーチン）が20世紀初めのさまざまなロシア人思想家や亡命作家の考えやテーマを利用していることを指摘した。イリイン、トルベツコイ、グリミョフらによる思想の1990年代における復活については、著者フィオナ・ヒルのハーバード大学・歴史博士号論文（1998）においても論じられている。

63. Petro (1995), pp. 93–95.

64. オタワ大学のポール・ロビンソンは次のように論じる。「ストルイピン同様……イリインもま

た、ロシアが抱える問題の根底には、未熟な“法意識” (*pravosoznaniye*) があると考えていた。これを考慮するとき、民主主義は適切な政府の形態ではなかった。イリインはこう書いた。『国家の先頭には、“1つの意思”が存在しなくてははいけない。ロシアに必要なのは、統合した強い国家権力であり、それを行使するための“独裁的な”力である』。同時に、この権力には明確な制限がなければいけない。たとえば、統治者は大衆の支持を得なければいけない。国家の機関は責任と説明義務を負うべきである。法的原則が維持され、すべての人が法の下に平等でなければいけない。信教、言論、集会の自由が保障されなければいけない。私有財産は何より神聖なものであるべきだ。国家は法的権限のある分野において最高の権威を持つが、私生活や宗教といった法的権限のない分野には一切関知してはいけない——それがイリインの考えだった。『全体主義は邪悪である』と彼は言った」：

Paul Robinson, “Putin’s Philosophy,” *The American Conservative*, March 28, 2012, at www.theamericanconservative.com/articles/putins-philosophy/.

65. たとえば、以下を参照：

Andrei Soldatov and Irina Borogan, “The Mindset of Russia’s Security Services: A Mix of Orthodox Christianity, Trails of Slavic Paganism and a Pride in Being Successors to the Soviet and Byzantine Empires, Both Destroyed by the Western Crusaders,” *Agentura.ru*, December 29, 2010, at www.agentura.ru/english/dossier/mindset/.

この記事のなかでSoldatovとBoroganは、プーチンのイリインへの傾倒について説明しつつ、キリスト教の価値観、ロシアの愛国心、軍将校の責務をどのように組み合わせるべきかを論じるイリイン自身の書物について紹介している。さらに著者らは、イリインの考えとウラジスラフ・スルコフが提唱する主権民主主義のコンセプトとのつながりについても指摘する。また、KGBの後継組織であるFSBが、2000年代にロシア正教会との関係を強化したことも言及。モスクワのFSB本部が建つルビャンカ広場横にある聖ソフィア大聖堂が修復されたのがその一例である。以下も参照：

Vladimir Putin, Annual Address to the Federal Assembly of the Russian Federation, April 25, 2005; Vladimir Putin, Annual Address to the Federal Assembly of the Russian Federation, May 10, 2006; and “Stenograficheskiy otchet o zasedanii Gosudarstvennogo Soveta. ‘O pervoocherednykh merakh po realizatsii gosudarstvennoy sistemy profilaktiki pravonarushenii i obespecheniyu obshchestvennoy bezopasnosti’” [Stenographers report on the session of the State Council. “On priority measures for implementing the state system protecting against violations of the law and ensuring public security], June 29, 2007, at http://archive.kremlin.ru/appears/2007/06/29/1953_type63378_136505.shtml.

66. Steven Lee Myers, “For a New Russia, New Relics,” *New York Times*, October 9, 2005.

イリインのほかにも、ストルイピン、チチュエリン、数多くの改革主義の皇帝や文学者たちが、2010年10月のミハルコフの宣言で言及された：

Mikhalkov, *Pravo i pravda: Manifest prosveshchennogo konservatizma*.

67. Zakharovich (June 3, 2009)を参照。

68. Ivanov, “Russian Social Life and Thought,” in Isham (1995), pp. 23–37, specifically pp. 27–28; and Khakimov (1997).

ロシアの領土の4分の3以上がアジアに広がっているものの、人口のほとんどはヨーロッパ地域に集中している。流刑中のユーラシア主義者の活動や彼らの初期の訴えについては、1921年に発表されたOrlando Figesの“Exodus to the East”を参照：Figes (2002), pp. 423–24. ユーラシア主義思想の復活については、著者フィオナ・ヒルのハーバード大学・歴史博士号論文 (1998) においても論じられている。

69. たとえば、Novikova and Sizemskaya (1993)内にある、ユーラシア主義者のエッセイや彼ら

の哲学に対する批判を参照。また、Laruelle (2008); Torbakov (2003); and Torbakov (2008)も参照。
70. Gleb Bryanski, “Russia’s Putin wants to Build ‘Eurasian Union,’” Reuters, October 3, 2011
を参照。

これは、1990年代までさかのぼる古い考えでもあった。たとえば、1995年の回顧録のなかでKGB
のフィリップ・ボブコフは、ユーラシア連合という考えに触れ、それをCISの概念と結びつけてい
る：Bobkov, 1995, p. 379.

71. Keenan, Szporluk, and Rumer (1997).

72. レフ・グミリョフの著作のなかでもっとも人気が高いのは、*Etnogenez i biosfera Zemli* [民
族生成論と地球の生物圏] (1989) といった民俗学的研究に関する作品である。ロシアを代表する
民族研究家ヴァレリイ・ティシュコフ——ロシアの国家的問題について記事を書くとき、プーチン
が参考にした人物——は、グミリョフの理論について論評し、彼の作品の影響力を評価した。1997
年、ティシュコフはそれらの洞察をまとめ、ロシアの民族やナショナリズムに関する画期的な本を
出版した：Tishkov (1997).

73. ウラジーミル・ナボコフの著作と2000年代のプーチン率いるロシアへの影響に関するより詳し
い議論については、以下を参照：Khrushcheva (2008).

74. Nabokov (2004), p. 51. 『プニン』は1957年に出版社〈ダブルデイ〉によってアメリカで初め
て出版された〔引用部は『プニン』大橋吉之輔訳、文遊社、2012年、115ページより〕。

75. ヴァルダイ会議の参加者については以下を参照：

<http://valdaiclub.com/authors/>

76. 以下のURLを参照：

<http://archive.premier.gov.ru/eng/events/news/17409/>

www.moskva-putinu.ru/.

77. 2010年9月6日、ソチのサナトリウムで開かれたヴァルダイ会議における、ウラジーミル・プー
チンとの会合での著者のメモより。

78. 2012年4月11日、下院でのプーチンの演説。

79. 引用はWaldron (1998), pp. 47–48より。

第6章 アウトサイダー

1. プーチンの妻リュドミラとプーチンの秘書マリーナ・エンタリツェワが当時の様子について以下
で詳述している：

Gevorgyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), pp. 113–18. [邦訳は152～157ページ]

2. 〈オーゼロ〉の全メンバーをリストアップした、立ち上げ時のファックス記録へのリンクが
*Antikompromat*に掲載されている。このウェブサイトは、ロシア人ジャーナリスト、ウラジーミル・
プリブイロフスキーが運営しており、ファックスへのリンクはプーチンの経歴を紹介するセクシ
ョンにある：

www.antikompromat.org/putin/putinbio.html.

資料へのリンク：

www.antikompromat.org/putin/ozero.html.

〈オーゼロ〉別荘組合の創設メンバーとしてリストアップされているのは以下の8人——ウラジー
ミル・プーチン、ウラジーミル・ヤクーニン、ウラジーミル・スミルノフ、アンドレイ・フルセン
コ、セルゲイ・フルセンコ、ユーリ・コヴァルチュク、ニコライ・シャマロフ、ヴィクトル・ミヤ
ーチン。別の記事では、グループのメンバーのリストが掲載されているだけでなく、2006年以降
の彼らのキャリアや財産の変遷についても論じられている：

Viktor Yushkin, “Lyudi kak teni” [People like shadows], *Postimees* (Estonia), September 20,
2007, at

<http://rus.postimees.ee/200907/glavnaja/mnenie/22618>.

ある資料によると、別荘組合の創設はウラジーミル・ヤクーニンの発案だったという。「ヤクーニンと彼のビジネスパートナーたちがそのエリアにあったプーチン所有の別荘を訪問したあと、別荘組合の話が出た」：

Max Delany, “An Inside Track to President Putin’s Kremlin,” *St. Petersburg Times*, October 2, 2007, at

www.sptimes.ru/index.php?action_id=2&story_id=23175.

彼らの別荘があるプリオゼルスク地域は、プーチンの重要な側近ヴィクトル・ズブコフがソビエト時代に農場長および共産党の役人としてキャリアを築いた場所である。

3. Lilia Shevtsova, 引用は以下より：

Martin Sieff, “Scandal Reveals Russia’s Power Struggle,” *United Press International*, August 31, 1999 (accessed through Nexis.com).

歴史家ピーター・ウォルドロンは、ストルイピンについて自著で次のように論じている。ストルイピンのアウトサイダーとしての立場、政治経験の少なさ、ロシア政府内で最初の要職だった内務大臣就任に対する熱意の低さは、彼を任命した人々にとってセールスポイントの1つだったと考えられる。「政府内の彼の同僚たちは、サンクトペテルブルクの官僚世界のなかでストルイピンは間違いなく打ち負かされると考えたのだ」（Waldron, 1998, p. 48）。1990年代、多くの人がプーチンについて同じような誤解をした。

4. ユーリ・アンドロポフ時代のKGBの活動については、Fedor (2011)を参照。また、Galeotti (1997)の第2章には、アンドロポフと彼のソ連における政治的影響力に関する分析が示されている。1960年代のソ連共産党中央委員会でアンドロポフのために働いた多くの人々が、1980年代には要職を担う職員となり、ミハイル・ゴルバチョフの改革を推進した。

5. この時期に関する詳しい議論、およびホーネッカーの東ドイツとゴルバチョフのソ連のあいだの亀裂については、以下を参照：Glaeser (2011); 以下も参照 Doder and Branson (1990), p. 230.

6. Doder and Branson (1990), pp. 344–45.

7. たとえば、Gessen (2012), pp. 62–64を参照。

8. ルーチ作戦についてドイツ語で書かれたラルフ・ゲオルグ・ライトとアンドリアス・ボンテの1993年の著書では、東ドイツの指導者だったエーリッヒ・ホーネッカーに対抗するための極秘計画がドレスデンを中心に進められていたこと、共産党のドレスデン地区リーダーだったハンス・モドロウが反対活動の主要人物だったことが説明されている。著者によると、ルーチ作戦は1985年9月から89年11月まで続いたという。それは、プーチンのドレスデン駐在とほぼ重なる期間である。ルーチ作戦を取り仕切ったのはモスクワのKGB上層部で、当時の第一総局長ウラジーミル・クリュチコフがとりわけ重要な役割を果たした。クリュチコフはのちにKGB議長となり、91年のゴルバチョフに対するクーデターに加わった。しかし1980年代後半、クリュチコフはミハイル・ゴルバチョフの重要な協力者だった（とはいえ、ゴルバチョフを陰で操作しようとしていたことは明らかだった）。ルーチ作戦が実際に存在し、ドレスデンがその活動の中心だったとすれば、プーチンが5年のあいだにまったく作戦にかかわらなかったと考えるほうが難しい。それに、ドレスデンに派遣されたKGBのスタッフはわずか5、6人だった。もしプーチンがルーチ作戦の一員だったとすれば、彼が政府内外の東ドイツ人に接触し、協力者に仕立て上げていたことは間違いない。その過程では、脅迫と説得という一般的な方法が使われていたことだろう。しかしプーチンとしては、『プーチン、自らを語る』のなかでルーチ作戦へのかかわりを否定している。彼は作戦が存在したこと自体はそれとなく認めたものの、「[スパイ活動ではなく] 東ドイツの政治指導者たちに対する働きかけということだ」と語った：

Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), pp. 65–66. [邦訳は95ページ]

9. たとえば、以下を参照：

Yevgenia Albats, “Who is Vladimir Putin? Why Was He Chosen as Yeltsin’s Heir?,” in “Who is Putin? Excerpts from *Frontline’s* Interviews,” *Frontline: Return of the Czar*, PBS, at www.pbs.org/wgbh/pages/frontline/shows/yeltsin/putin/putin.html.

アルリバツは、「プーチンは頻繁に西ドイツに渡航していた」と主張する。しかしプーチン本人は、ドレスデン駐在中に西ドイツへ行ったことはいちどもないと否定している : Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), p. 62. [邦訳は91～92ページ]

10. 『プーチン、自らを語る』のなかで、プーチンはこう語った。「[ドレスデンでの任務]は政治情報にかかわるものだった。つまり、政治家や潜在的な反対勢力の計画についての情報を獲得するのが仕事だった……われわれが中心的な敵と考えていたのはNATOだった」(Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), p. 62. [邦訳は91ページ])。さらに、プーチンは次のように証言した。「実際、各政党、政党内の傾向、その指導者についての情報も探した……つまり私の仕事は、情報源の獲得と情報の調達、さらに情報の評価と分析を並行して行なうものだった。完全なるルーティーン・ワークというわけさ」(同上, pp. 62–63 [邦訳は92ページ])。ケース・オフィサーのペルソナに関する第8章でも論じるとおり、プーチンが「ルーティーン」「退屈な仕事」と言うとき、それはきわめて重要な仕事を意味することが多い。

11. Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), p. 61. [邦訳は89～90ページ]

12. 同上, p. 60. [邦訳は89ページ]

13. 同上, p. 70. [邦訳は101ページ]

14. 同上, pp. 71–72. [邦訳は103ページ]

15. 同上, pp. 72–73. [邦訳は104ページ] ここでプーチンがいう「水域」(*vodorazdely*)は特定の水域を示すものであり、ベルリンの水路を念頭に置いた発言だと考えられる。ベルリンの壁とともに、エルベ川(正しくはシュプレー川)も東西ドイツを隔てる国境の一部として利用されていた。

16. 同上, p. 77. [邦訳は111ページ]

17. 同上, p. 77 [邦訳は111ページ]

18. 同上, p. 80.

19. 同上, p. 77. [邦訳は111ページ]

20. Aron (2012)を参照。

21. Josephine Woll, “Glasnost: A Cultural Kaleidoscope,” in Balzer (1991), pp. 105–17も参照。

22. Aron (2012), pp. 38–39.

23. 同上, pp. 39–40.

24. 同上, pp. 53–57. これらの映画に加えてほかの例が詳しく解説されている。

25. Serge Schmemmann, “2 Germanys’ Political Divide Is Being Blurred by Glasnost,” *New York Times*, December 18, 1988 (accessed through Nexis.com).を参照。

26. Stiehler (2001)を参照。

27. 引用はAron (2012), p. 43より。

28. グラスノスチに関するエッセイスト、イーゴリ・クリャムキンの発言。引用はAron (2012), p. 43より。

29. Aron (2012), pp. 299–302を参照。

30. Aron (2012), pp. 49–50の議論を参照。

31. ロシア人音楽評論家アルテミー・トロイツキーは、この時代の大衆文化の席卷について自身の著書で詳説している :

Back in the USSR: The True Story of Rock in Russia (1988)、*Tusovka: Who’s Who in the New Soviet Rock Culture* (1990).

トロイツキーは2000年代にウラジーミル・プーチンに対する厳しい批判者となり、2011～12年の

抗議デモ活動にも積極的に参加：

Owen Matthews, “Dumbing Russia Down,” *The Daily Beast*, March 22, 2008, at

www.thedailybeast.com/newsweek/2008/03/22/dumbing-russia-down.html;

and Jeffrey Tayler, “Could This Be the End for Putin’s Russia,” Bloomberg, December 7, 2011,

at

www.bloomberg.com/news/2011-12-07/could-this-be-the-end-for-putin-s-russia-jeffrey-tayler.html.

32. Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), p. 64, “Volodya khorosho rasskazivayet anekdoty” [Volodya tells jokes well]. [邦訳は94ページ]

33. 同上, p. 85. [邦訳は120ページ]

34. 2012年3月29日のブルッキングス研究所でのプレゼンテーションで、ロシア人ジャーナリストのオレグ・カシンはこの点を特に強調した。また、2012年4月25日にブルッキングス研究所で行なわれた会議の席で、カーネギー国際平和基金モスクワセンターのアナリスト、マリア・リップマンも同様の意見を述べた。

35. プーチンが提唱したドストロイカの考えは、ゴルバチョフ時代のペレストロイカのコンセプトと対照的なものだった。ドストロイカは、建設を終わらせること、あるいは進行中の特定のプロジェクトを完了することを意味する。一方、再構築や再編成を指すペレストロイカは、新しい何かに移行するという意味合いを持つ考えだった。ロシアの政治改革を求める声が高まった2011～12年、プーチンはあえてドストロイカを強調した。それは、ドミートリー・メドヴェージェフが大統領だった2008年以降に広まった新たなペレストロイカの考えに対する明らかな拒絶であり、ドストロイカこそがペレストロイカに代わる正しい政策であることを訴えるためのものだった。

36. たとえば、ドイツ語のドキュメンタリーにおけるプーチンの描かれ方を参照してほしい：

Ich, Putin (I, Putin), of February 2012 at

www.ardmediathek.de/ard/servlet/content/3517136?documentId=9651826.

このドキュメンタリーについて教えてくれたマンフレッド・フータラーに感謝したい。この作品は最初にドイツで放送され、2012年5月にはロシアのNTVでも放送された。

37. 第4章冒頭を参照。

38. ヴィクトル・ボリセンコの発言：Blotskiy (2002), p. 76.

39. Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), p. 21.

プーチンの柔道クラブのチームメイトのなかには、サンクトペテルブルクに本社を置く巨大エネルギー・サービス企業〈ストロイガズモンタージュ〉(SMG)の経営者アルカディ・ローテンベルクなどがおり、2000年代にロシアでもっとも裕福な実業家として台頭した者も少なくない。たとえば、以下を参照：

Gleb Bryanski, “Putin’s Judo Partner Jumps in Russia’s Rich List,” Reuters, February 13, 2011, at

www.reuters.com/article/2011/02/14/russia-richidUSLDE71C02X20110214

and Simon Shuster, “Vladimir Putin’s Billionaire Boys Judo Club,” *Time*, March 1, 2011, at

www.time.com/time/world/article/0,8599,2055962,00.html.

プーチン同様、アルカディ・ローテンベルクやその弟で、大成功を収めた実業家ボリス・ローテンベルクもまた、柔道の練習を通して学んだ規律と競争意識が、政治やビジネスで成功するための大切な原動力になったと語った。

40. タバコを吸わずに練習に打ち込んだというプーチンの証言については、以下を参照：

Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), p. 21. [邦訳は33ページ]

41. 1970年代、プーチンと同時期にレニングラード大学に通った人々へのインタビュー取材より。話を聞いた人々の一部は、当時のレニングラード大学法学部が劇的な変化の途上にあったと証言し

た。そのころ、著名な教授陣——ほとんどがリベラルなユダヤ人——がレニングラード共産党指導部による直々の指示によって解雇され、より保守的な教授陣が優遇されていたという。インタビューに答えた1人は、次のように強調した。「学部の雰囲気が変わるにつれて、プーチンはそれまで学部を支配していた人々に対するアウトサイダーになった。また、その時点では、より彼に似た人々が学部を支配することようなことはなかった」：2012年7月3日、レニングラード大学の卒業生へのインタビューより。

42. 2010年2月16日にブルッキングス研究所で行なわれた、ロシアの専門家パーヴェル・バエフのプレゼンテーションより。

43. Gessen (2012), pp. 43–70. ゲッセンによると、プーチンはインタビューのなかで、自ら進んで自身のことを「ワル」と呼ぶことがあるという。

44. 番組の会話の書き起こし原稿は以下を参照：

<http://government.ru/docs/17409/>

45. プーチンの各階級への態度の違いについては、オーウェン・マシューによる以下の記事を参照：
www.thedailybeast.com/newsweek/2012/05/27/meet-igor-the-tank-engineer.html
(<http://www.newsweek.com/meet-igor-tank-engineer-64953>)

また、以下も参照：

Alexander Bratersky and Natalya Krainova, “Putin Offers Senior Post to Tank Worker Who Scorned Protesters,” *Moscow Times*, May 21, 2012, at
www.themoscowtimes.com/news/article/putin-offers-senior-post-to-tank-worker-who-scorned-protesters/458826.html#ixzz1yZOgLbi9.
(<http://old.themoscowtimes.com/sitemap/free/2012/5/article/putin-offers-senior-post-to-tank-worker-who-scorned-protesters/458826.html>)

46. 2012年4月25日、ブルッキングス研究所でのマリア・リップマンのプレゼンテーションより。また、別の専門家は次のように述べた。「支配的で高圧的、時に粗雑なボスというのは……ソビエトやロシアの典型的なボス像である……私が“平均的なロシア人”と呼ぶような多くの人々は、そのような強引なタイプのボスを称賛し、西側では無礼ととらえられるような行動を認める傾向がある……プーチンによるこういった行動は、ロシアでは昔からきわめて人気が高い」：2012年7月、ソ連とロシアに長期にわたって勤務したアメリカ人上級外交官と著者との文書によるやり取りより。

47. たとえば、以下を参照：

Miriam Elder, “Vladimir Putin Takes Oleg Deripaska to Task,” *The Telegraph*, June 4, 2009, at
www.telegraph.co.uk/news/worldnews/europe/russia/5446293/Vladimir-Putin-takes-Oleg-Deripaska-to-task.html ; Zakharovich (June 9, 2009).

48. たとえば、以下を参照：“Putin Plays the Role of the Good Tsar,” *Moscow Times*, editorial, April 28, 2004, at
www.themoscowtimes.com/opinion/article/putin-plays-the-role-of-good-tsar/231296.html ;

Miriam Elder, “Putin Relying on Support outside Moscow to Win Back Presidency,” *The Guardian*, March 2, 2012, at
www.guardian.co.uk/world/2012/mar/02/putin-support-outside-moscow-for-presidency.

49. Dmitry Babich, 引用は以下より：

Anna Arutunyan, “The Romanov Legacy in Russia,” in the *Rossiyskaya gazeta* and *Telegraph* online English-language supplement, *Russia Now*, July 6, 2010, at
www.telegraph.co.uk/sponsored/russianow/features/7875545/The-Romanovs-and-Russia.html.

50. “Blagotvoritel’ Vladimir Putin” [The philanthropist Vladimir Putin], *Vedomosti*, editorial, April 11, 2012, at
www.vedomosti.ru/opinion/news/1626178/gerojblagotvoritel.

51. 同上。

52. このエピソードは、あるロシア人の同僚から著者らが聞いたもの。その同僚は、エピソード内に登場する政治家本人から直接この話を聞いたという（同僚は実際の政治家の名前も教えてくれた）。このエピソードについて個人的に裏を取ったわけではないものの、情報源が信用に足るものだと私たちは信じている。また、この政治家の苦しい状況についてはすでによく知られた話である。

53. レニングラード大学の卒業生へのインタビューより。2011年5月、ワシントンDCにて。

54. この映画の簡単な解説については、IMDbのウェブサイトを参照：

www.imdb.com/title/tt0060584/.

55. ペルミの制作者グループのこの作品はユーチューブからは削除されたものの、以下のサイトで閲覧可能：

http://trinixy.ru/2008/03/03/dmitriji_medvedev_kak_vse_nachinalos_138_mb.html.

56. 以下を参照：

“Vladimir Putin Threatened to Hang Georgia Leader ‘by the Balls,’” *The Telegraph*, November 3, 2008, at

www.telegraph.co.uk/news/worldnews/europe/russia/3454154/Vladimir-Putin-threatened-to-hang-Georgia-leader-by-the-balls.html.

57. このジョークのオリジナル・バージョンでは、ペトカはコーカサス出身ではなく、単に無知な人物として描かれている。しかしその後、このジョークはグルジア人を指し示すために使われることが多くなった。ソビエトの住人にとって、チャパエフの英雄としての魅力の大部分は、文字も読めない無学な農民が才能あふれる世慣れた戦術家になるという経歴にあった。一方、チャパエフの副官であるペトカはもっと単純な人間だった（ペトカも実在の人物を基にしたキャラクター）。ドミトリー・フルマノフによる同名の小説を基にした1934年の映画『チャパエフ』は、ソ連で大ヒットを記録。その後の1941年には、チャパエフが主人公の短篇プロパガンダ映画が制作される。ナチスによる侵攻の数週間うちに制作・放映されたこの映画のなかで、チャパエフは「ドイツ人を打ち倒せ」とソ連の民衆に訴え、「チャパエフはいつもあなたたちとともにいる」と観客に語りかけた：

Chapayev and “*Chapayev s nami*” (the agitprop sequel) at

www.imdb.com.

チャパエフの英語版イラスト付きのジョーク集は以下で閲覧可能：

www.anecdotoff.com/category/funniest-jokes/funniest-chapayev-jokes

また、ロシアの代表的なジョークを解説した以下のサイト内でも、チャパエフのジョークについて説明されている：www.lonweb.org/links/russian/lang/036.htm

ロシア人の同僚から話を聞いたところ、チャパエフ＝ペトカのジョークは1980年代前半のソ連で爆発的な人気となり、誰もが「最低でも10個は言えた」という。

58. 私たち著者も、ジョークの意味を理解できなかった。晩餐会のあとにすぐさま意味を教えてくださいました政治学者ニコライ・ズロービンに感謝したい。

59. プーチンの政敵ゲンナジー・ジュガーノフは、ソ連時代のジョークの熱狂的なファンとして有名で、彼の名前を冠したジョーク集が何冊か出版されている。たとえば、*100 anekdotov ot Zyuganova* [ジュガーノフによる100の奇談] (2007) などがある。

60. 以下を参照：

Gleb Bryanski, “Putin: on the Pulse or out of Touch with Russia,” Reuters, December 15, 2011, at

www.reuters.com/article/2001/12/15/us-russia-putin-showman-idUSTRE7BE1PG20111215.

61. 2012年4月11日、下院でのプーチンの演説：

“Predesdatel’ Pravitel’sтва Rossiyskoy Federatsii V.V. vystupil v Gosudarstvennoy Dume s

otchyotom o deyatel'nosti Pravitel'stva Rossiiskoy Federatsii za 2011 god" [Chairman of the Government of the Russian Federation V.V. Putin appeared before the State Duma with the report on the activity of the Government of the Russian Federation for 2011], April 11, 2012, at <http://government.ru/docs/18671/>.

<http://government.ru/eng/docs/18671/>. (英語版)

ソビエトの農業システムだけでなく、モスクワの特権的なステイタスを風刺するこのソビエト時代の冗談を、レニングラード出身のプーチンが言ったということは注目に値する。このジョークの舞台となる時期にソ連にいた元アメリカ人上級外交官は私たちに次のように語った。「1980年代初めから半ばまでに、“ソビエトのシステムは機能していない” とほぼ全員が気づいていた。ロシア外務省の友人の1人は、プライベートの場で（ソ連共産党中央委員会のなかでさえも）当時流行していた乾杯の音頭を覚えてくれた——*K uspekhu nashego beznadezhnogo dela!* [絶望的な試みへの成功に乾杯]。彼らはアウトサイダーなどではなく、みな皮肉屋になったのだ」：2012年7月30日、アメリカ人上級外交官と著者との文書によるやり取りより。

62. 2012年4月11日、下院でのプーチンの演説。

63. 同上。

第7章 自由経済主義者

1. この時期のサンクトペテルブルクの詳細に関する優れた解説と分析については、Volkov (2002) を参照。1990年代のサンクトペテルブルクとロシアのシステムにおける経済協力関係は、それぞれの関係者間の完全なる「信頼の欠如」によって特徴づけられていたと述べている。ソビエト式システムの崩壊とともに、高次レベルで信頼関係を保っていた公式制度の数々は破綻した。新しい法的枠組みが導入されることもなく、法の支配も経営倫理の規定も何も存在しなかった。多くの点において、これは今日のロシアの状況でもある。法的な統制がまったくないこのシステムでは、取引相手を心から信頼することなどできない。たとえ送金したとしても、個人的なコネや非公式の契約を機能させる方法を持ち合わせていなければ、商品やサービスが実際に提供されるかどうかの保証はない。

2. 2012年4月11日、下院でのプーチンの演説：

“Predsedatel' Pravitel'stva Rossiiskoy Federatsii V.V. vystupil v Gosudarstvennoy Dume s otchyotom o deyatel'nosti Pravitel'stva Rossiiskoy Federatsii za 2011 god" [Chairman of the Government of the Russian Federation V.V. Putin appeared before the State Duma with the report on the activity of the Government of the Russian Federation for 2011], April 11, 2012, at <http://government.ru/docs/18671/>.

<http://government.ru/eng/docs/18671/>. (英語版)

3. International Monetary Fund, “Russian Federation Completes Early Repayment of Entire Outstanding Obligations to the IMF,” Press Release No. 05/19, January 31, 2005, at www.imf.org/external/np/sec/pr/2005/pr0519.htm.

4. 著者による計算。以下の資料のデータを基にした：

International Monetary Fund, *World Economic Outlook Database*, April 2012.

5. 第5章の議論を参照。

6. ロシア経済の石油価格への依存についてはClifford GaddyやBarry Ickesの数々の記事を参照。

7. 2012年4月11日、下院でのプーチンの演説。

8. 以下を参照：Daniel Mitchell, “Russia’s Flat Tax Miracle,” March 24, 2003, at

www.heritage.org/research/commentary/2003/03/russias-flat-tax-miracle;

and Daniel Mitchell, “Flat Tax Is the Way of the Future,” March 20, 2006, at

www.heritage.org/research/commentary/2006/03/flat-tax-is-the-way-of-the-future.

9. 以下を参照：Anders Aslund, “The President’s Turn Away from the Market,” *Moscow Times*, November 8, 2006, at

www.iie.com/publications/opeds/oped.cfm?ResearchID=684.

10. David Ignatius, “Humbled Masters at Davos,” *Washington Post*, February 1, 2009, at

www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2009/01/30/AR2009013002726.html.

11. プーチンが「ローンズ・フォー・シェアーズ」を取り消さなかったことは、一般的に低い評価を受けた。これは、「プーチンのみかじめ料」についてのクリフォード・ガディ (Clifford Gaddy) とバリー・イッキーズ (Barry Ickes) の議論の中心となる事実である。

12. Vladimir Putin, “Predsedatel’ Pravitel’sтва Rossiyskoy Federatsii V.V. Putin vstretil’sya s chlenami byuro pravleniya Rossiyskogo soyuza promyshlennikov i predprinimateley”

[Chairman of the Government of the Russian Federation V.V. Putin met with members of the executive committee of the Russian Union of Industrialists and Entrepreneurs], April 21, 2011, at

<http://government.ru/docs/14934/>.

<http://government.ru/eng/docs/14934/>. (英語版)

13. Josef Stalin, “Political Report of the Central Committee,” December 18, 1925を参照 (この英語版の文書はインターネット上で簡単に閲覧可能)。

14. 以下を参照：Clifford Gaddy and William Gale, “Demythologizing the Russian Flat Tax,” *Tax Notes International* 43 (March 2005), pp. 983–88, at

www.brookings.edu/~media/research/files/articles/2005/3/14russia%20gaddy/20050314gaddygale.pdf.

(<https://www.brookings.edu/wp-content/uploads/2016/06/20050314gaddygale.pdf>)

15. 1970年代のレニングラードで暮らしたアメリカ人留学生が次のように証言した。「船員や外国人観光客が多くの商品を街に持ち込んでいたため、闇経済は1970年代のレニングラードでとりわけ大きく発展していた。KGB (ボリショイ・ドム) の取り締まりはかなり厳しかったが、街の至るところに出没する非公式の市場をすべて閉鎖することはできなかった。物々交換が主な取引方法で、誰もができるかぎり多くの商品を手に入れようとした。KGBはレニングラード大学を特に注意深く監視していたが、主なターゲットになったのは、私たち西洋人ではなくアフリカ人のほうだった。アフリカ人のほうが、取引や売買にかかわることが多かったからだ。私たちの寮に、(ビートルズやローリングストーンズなどの) 西側のレコードの売買に精力的に携わるイギリス人留学生が1人いた。KGBは学期が終わる直前まで彼を野放しにしておいて、それから地方紙で彼の罪を暴露し、国外追放にした。KGBがずっとそのイギリス人留学生を逮捕しなかったのは、KGBの職員たちも、西側の音楽が街に入ることで恩恵を受けていたからに違いない——私たちはそう理論を立てた。こういった状況がプーチンにどんな影響を与えたかはわからない。しかし、彼がこのような環境について詳しく知っていたことは間違いない」：2012年7月30日、1970年代にレニングラード大学に通ったアメリカ人交換留学生と著者の文書によるやり取りより。

16. たとえば、マーシャ・ゲッセンは次のように論じる。1970年代初め、プーチンの両親はめったにない幸運に恵まれ、自家用車を手に入れた。両親はそれを息子のウラジーミルに与えたが、これは驚くほど贅沢なプレゼントだった。「[当時の] ソ連では千人あたりの車の数は、やっと六十台に達したばかりだった (合衆国は七百八十一台)。車は、おおざっぱに言えば別荘並みの価格である」。ゲッセンは、このプレゼントが大学時代に贅沢品を買い求めるプーチンの傾向につながったと指摘する。「遠く離れた建築現場で働き、一夏を過ごした」プーチンは贅沢を楽しんだ。たとえば、大学に入学して最初の夏休みのあと、若きウラジーミル・プーチンは「二人の級友と極北の地からソビエトの南部、グルジアの黒海沿いのガグラへの旅に直行した。そこで彼は、稼いだ金を数日間ですぐ使果たした。翌年、建築現場の労働を終えたあと、レニングラードに戻り、かせいだ金を

自分の外套と、母親に砂糖をまぶしたケーキを買うのに使った」：Gessen (2012), pp. 55–56. [邦訳は72ページ]

17. 以下を参照：Angus Maddison, “Historical Statistics of the World Economy: 1–2008 AD,” at www.ggd.net/maddison/Historical_Statistics/horizontal-file_02-2010.xls.

18. Angus Maddison, “Statistics on World Population, GDP and Per Capita GDP, 1–2008 AD,” available at www.ggd.net/MADDISON/oriindex.htm.

19. 著者の計算に基づく。アメリカの石油生産量に関するデータはU.S. Energy Information Administration (EIA)の資料より。ソビエトの石油生産量に関するデータはGoskomstat SSSR, *Narodnoye khozyaystvo SSSR*の資料より。

20. マクロレベルでのロシア経済は好調だったが、ミクロレベルでの状況はそれほど単純ではなかった（レニングラードはほかのソビエトの都市と比べればまだ良かった）。プーチンの大学時代の同僚は次のように証言する。「70年代にレニングラード大学に通っていたころ、モスクワを別として、レニングラードにおける配給の状況は概してほかの街よりも良好だった。にもかかわらず、1972年4月中旬にはキャベツとニンジンが農民市場から姿を消した。そこで私たちは、カタバミをサラダにして食べた。とはいえ、ジャガイモ、パン、グローツ [えん麦を粗く砕いた粒] はきちんと配給されていたので、私たちはラッキーなほうだった。1971年当時、レニングラードの多くの住人の頭のなかには、大戦中の包囲戦の記憶がまだ鮮明に残っていた。プロパガンダのための公のイベントやメディア内だけでなく、プライベートな場でも、人々は自由に当時の思い出を語った。包囲戦のさなか、どこにいたのか、どう生き延びたのか……。70年代のレニングラードの暮らしはそれほど悪いものでもなかった……。しかし、幸運にも何か商品を見つけたときに、その場で買った商品を持ち運べるよう、全員が緊急用の袋 (*ovoska*) を持ち歩いていた。また、ほかのソ連の街に比べて、レニングラードには外国製品も多く流通していた。北欧からボートやバスに乗って多くの観光客が小旅行にやってくるのは、安い酒、あるいは商業船の船員たちがこっそり持ち込んだ商品を購入した。これがプーチンの若いころの環境だった——窮乏にひどく苦しむほどではなかったが、決して安泰とはいえなかった。十分な食べ物を得られない者もいたし、学生への給付金は少なかったもので、ひどく苦しい生活を強いられる者もいた」：2012年7月30日、1970年代にレニングラード大学に通ったアメリカ人交換留学生と著者の文書によるやり取りより。

21. 市場経済に対するプーチンの理解を形作るうえでKGBが果たした役割について議論するまえに、KGBと市場に関するある神話に“信憑性がないこと”を指摘しておきたい。その神話とは次のようなものだ——KGB職員は機密情報にアクセスする権限を持ち、西側社会を観察するという特別な立場にいるため、彼らは自由市場経済の「優位性」を直接目で確かめることができる。この説に従えば、自由経済にじかに触れた経験を持つため、KGBの職員たちは、ほかの多くのロシア人のよりも先に市場経済の支持者になったということになる。ロシア人オリガルヒの1人、アレクサンドル・レベデフも2007年12月のインタビューでこの神話の正しさについて強調した。レベデフもプーチンと同じ時代にKGBに務め、1980年代末にプーチンがドレスデンにいたころ、レベデフはロンドンに派遣されていた。1990～2000年代にかけて、レベデフは銀行家兼実業家へと転身し、国内外に幅広く投資を行ない、見かけのうえでは進歩的・慈善的な目的のための活動を支援してきた。その一環として、レベデフはロシアの『ノーヴァヤ・ガゼータ』紙、イギリスの『イブニング・スタンダード』紙と『インディペンデント』紙を買収。『ニューヨーク・タイムズ』紙のインタビューのなかで、レベデフはこう強調した。「同じ世代のソビエトのスパイのなかには、1980年代の西側とソビエトの経済発展の大きな格差を目の当たりにし、熱狂的な自由経済支持者や改革論者になった者もいる」：

Andrew Kramer, “Former Russian Spies Are Now Prominent in Business,” *New York Times*, December 18, 2007, at

www.nytimes.com/2007/12/18/business/worldbusiness/18kgb.html?_r=1.

もしレベデフの主張が正しいとすれば、西側の国に派遣されたすべてのKGB職員は欧米寄り、自ら起業し、自由経済方策の支持者となり、さらに将来的には政治改革の擁護者となる傾向が強いことになる。しかしここ数十年のあいだ、西側を間近で観察してきたKGBの職員たちに、自由経済やその他の改革の支持者になる傾向があるとはいえない。レベデフの発言は、かつてKGBのエージェントだったという自身のイメージを磨き上げ、実業界への転身に対する論理的根拠を与えるためのものであることは明白である。アレクサンドル・レベデフやウラジーミル・プーチンのようなソビエト時代に生まれ育ったほとんどの人々にとって、市場経済への理解は断片的なものでしかない。プーチンの場合、KGBの訓練や仕事からすべての知識を得たわけではなかった。プーチン自身、自らの考えを形作った多種多様な経験について頻繁に言及している。それは、若いころの経験、東ドイツやサンクトペテルブルクでの経験、1990年代末のモスクワでの経験など多岐にわたるものだった。

22. ドナルド・レイフィールド (Donald Rayfield) は著書 *Stalin and His Hangmen* のなかで、ジェルジンスキーを「経済君主」と表現する。経済の世界における彼の正式な役職は、国家経済最高会議議長というものだった。同時に、ジェルジンスキーはチェカーとその後継組織である国家保安総局 (OGPU) の長官を務めた : Rayfield (2004), pp. 97–103.

23. ロシア人経済学者ヴァレリー・ラザレフは、グラグ (*Glavnoye upravleniye ispravitel'no-trudovoykh lagerey i koloniy* = 矯正労働収容所総管理本部) を「刑務施設に見せかけた強制労働のシステム」と表現した。「グラグは何百もの組織、何百万人分もの労働力からなる巨大な“企業”のようなものだった」 : Valery Lazarev, “Conclusions,” in Gregory and Lazarev (2003), p. 190.

24. Hill and Gaddy (2003), p. 86を参照。基となる情報は以下より :

Smirnov, Sigachev, and Shkapov (1998), p. 72, note 212内のIvanova (1997), p. 136,

25. たとえば、以下のBeriaの議論を参照 : Rayfield (2004), pp. 455–69.

26. 「剣と盾」はKGBの紋章に象られたシンボルである : Rayfield (2004), p. 23. : 「KGBもまたチェカーのシンボルである剣と盾を採用した。つまり、革命を守る盾、敵を倒す剣である」

27. 落ち込んだのは成長率で、石油生産量ではない。つまり、石油生産量は増えつづけたが、そのスピードがかつてないほどに遅くなったということである。

28. Gustafson (1991).

29. U.S. Energy Information Agency, *Annual Energy Review 2010*, Table 5.1b, “Petroleum Overview, 1949–2010,” at

www.eia.gov.

30. Leslie H. Gelb, “Who Won the Cold War?,” *New York Times*, August 20, 1992, accessed through Nexis.com.

31. 1970年代初めに学生としてレニングラードに渡り、その10年後に帰国したアメリカ人が、個人的なつき合いを通して感じたこの期間の変化について語った。「70年代初めにレニングラード大学に通っていたころには、システムが機能するかもしれないと心から信じるソビエト市民がまだいた。第二次世界大戦後、途中で紆余曲折はあったものの、ソビエトの社会・経済状況は概して安定的に向上していった。しかし、私が帰国することになった1980年代初めまでに、状況はそれまでと明らかに変わっていた」 : 2012年7月30日、1970年代にレニングラード大学に通ったアメリカ人交換留学生と著者の文書によるやり取りより。

32. 2010年5月18日、ロシア科学アカデミーでのプーチンの演説 :

“Predsedatel' Pravitel'stva Rossiyskoy Federatsii V.V. Putin vystupil na Obshchem sobranii Rossiyskoy akademii nauk” [Chairman of the Government of the Russian Federation V.V. Putin gave a speech at the Assembly of the Russian Academy of Sciences], May 18, 2010, at

<http://government.ru/docs/10609/>.

<http://government.ru/eng/docs/10609/>. (英語版)

ドレスデン駐在中に技術機密を盗む任務に就いていた事実をプーチン自身が公の場で初めて言及したのが、この場面だったかもしれない。上記のロシア政府ウェブサイトに掲載された英語版の原稿には、発言の冒頭しか掲載されておらず、締めコメントは省略されている。一方、ロシア語版では発言のすべてが閲覧可能。研究を進めるなかで、ロシア政府のウェブサイトについて、私たち著者はあることに気がついた——プーチンが物議を醸すような話や“下品な”コメントをした場合、ロシア語版の原稿はそのまま掲載されるが、英語版の原稿は“きれいに”修正されることが多い。この演説について教えてくれたリチャード・バーガーとヴェロニカ・クプリヤノワ＝アシナに感謝したい。彼らは、ロシア語版と英語版の違いについても指摘してくれた。

33. プーチンはよく、KGBの職員になることが子どものころからの夢だったと話す。また、高校生のときにレニングラードのKGB本部を訪れ、雇ってほしいと頼んだというエピソードもたびたび引き合いに出す。その際にプーチンに対応したKGB職員が、まずは大学に進学し、法律の学位を取ることを勧めたという : Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), p. 25. [邦訳は38ページ]

34. ゴルバチョフ時代が始まったばかりの1985年4月、チェブリコフは正式に政治局員に昇格した。対照的に、ソ連の国防相だったセルゲイ・ソコロフは最後まで「政治局員候補」のままだった。これは、当時のソビエトのシステムのなかでKGBがより重要視されていた証拠だろう。

35. “Zhivoye tvorchestvo naroda. Doklad M.S. Gorbacheva. Vsesoyuznaya nauchnoprakticheskaya konferentsiya” [The living accomplishment of the people. Report by M.S. Gorbachev. All-Soviet scientific-practical conference], *Izvestiya*, December 11, 1984.

36. 東ドイツの経済史に関するもっとも優れた解説は以下を参照 : Steiner (2007).

37. 世界の石油価格は1981年1～2月にピークを迎え、その後1986年半ばまで5年のあいだ下落しつづけた。その後も13年間は低迷が続き、1999年にやっと回復しはじめた。

38. Steiner (2007), p. 227.

39. 1990年代のエリツィン政権下でプーチンが目撃した状況、あるいは2012年に彼自身が直面した状況ときわめて似ている。この点については第10章で論じる。

40. Rahr (2008), pp. 75–79.

41. 同上、 pp. 73–74.

42. 同上。プーチンの正式な地位は「国際関係担当の副学長ユーリ・モルチャノフの補佐官」。

43. この時期のどこの時点で、プーチンはKGBのフルタイムの職員から「現役予備役」になったといわれている。1991年8月にKGBを正式に辞めるまで、彼はおそらくこの立場にとどまっていたと考えられる。この時期の出来事の詳しい進展や日付は伝記資料によって異なり、はっきりとしない。

44. プーチンが大統領になった直後の2000年に行なわれたインタビューで、ロシア人アナリストたちは、1990年代のサンクトペテルブルクでのプーチンの仕事内容について本人に尋ねた。その際、プーチンとKGBとのつながりは周知の事実であり、サブチャーク本人もそのつながりが続いていたことにはっきり気づいていたことが明らかになった。たとえば、ロシア人ジャーナリストのエフゲニア・アリバツはこう説明する。「新たに民选的に選ばれた市長のもとにプーチンが配属されたのは、市長を見守ってアドバイスを与えるためだった——当時のサブチャーク周辺で働いていた人々にとって、それはあまりに明らかだったに違いない……」 :

Yevgenia Albats, “Who is Vladimir Putin? Why Was He Chosen as Yeltsin’s Heir?,” in “Who is Putin? Excerpts from *Frontline’s* Interviews,” *Frontline*, “Return of the Czar,” PBS, at www.pbs.org/wgbh/pages/frontline/shows/yeltsin/putin/putin.html.

45. Gaddy (1996), pp. 27 and 155.

46. Charap (2004); and Sakwa (2009), p. 140を参照。サミュエル・チャラップ (Samuel Charap)

はこう説明する。「サンクトペテルブルク対外関係委員会議長および副市長としてのプーチンの日々の仕事は、多種多様な幅広い責任をとるものだった——海外投資の誘致、経済発展の促進、海外政府高官による訪問のための準備、サンクトペテルブルクにある連邦政府組織との調整」。また、当時のプーチン側近の1人は、インタビューでこう主張した。「事実上、サンクトペテルブルクはロシアの縮小版モデルと……プーチンのここでの仕事は、一連の管理だった。関係者の量と幅広さ、さまざまな種類の決定を下す必要性、その意思決定に求められるスピードには凄まじいものがある」。一方、リチャード・サクワ (Richard Sakwa) は次のように強調する。この時期にサンクトペテルブルクで活動していた会社は「市長執務室と密接な関係を築かなければいけなかった。とりわけ、(1991年6月から対外関係委員会議長を務めた) プーチンとイーゴリ・セーチンとの関係は重要だった」。

47. プーチンの発言は以下より : Blotskiy (2002), p. 327.

48. Khodorkovskiy and Nevzlin (1992). この本について教えてくれたセーン・グスタフソンに感謝したい。

49. グレブ・パヴロフスキーのインタビューより : *The Guardian*, January 24, 2012.

50. Russian State Statistics Serviceのデータに基づく著者の計算。

51. 同上。

第8章 ケース・オフィサー

1. Gessen (2012), p. 140. [邦訳は174ページ]

2. [本文内では割愛したが、原文では「サンクトペテルブルク」を示す単語として「*Banditskiy Peterburg*」が使われている] *Banditskiy Peterburg* (『ならずもの街ペテルブルグ』) は、2000年5月に初めて放送されたロシアを代表する超人気テレビドラマ・シリーズ。このドラマは、1990年代のロシアのすべてを表現しているとまでいわれる名作である。このシリーズに関する基本情報は以下で検索してほしい :

www.imdb.com.

また、第1シリーズ「Baron (男爵)」に関する情報、およびドラマに対する視聴者のロコミは以下を参照 :

www.imdb.com/title/tt0245602/

3. Gessen (2012), pp. 122–25. [邦訳は148～154ページ] 2000年、プーチンが初めて大統領に選出された際、マリーナ・サーリエは調査報告書と証拠書類を公表した。のちに彼女は一線を退き、プスコフ地方の田舎町で隠居生活を送った。ゲッセンは*The Man without a Face* (『そいつを黙らせろ』) の上記該当ページにおいて、1992年の最初の報告書、サーリエの2000年のファックス資料の両方に言及している。また、資料は298ページの原注内に掲載されている [邦訳版にはなし]。2011～12年、議会および大統領選挙に対するデモが起きると、サーリエは活動を再開し、サンクトペテルブルクの反政府グループの主要メンバーになった。しかし2012年3月、彼女は突然の心臓発作で死亡。享年77だった :

“Prominent Putin Critic Dies at 77,” RFE/RL Russian Service, March 21, 2012, at

www.rferl.org/content/salye_putin_critic_dies/24523142.html.

4. 2010年に発表された(裏づけのない)報告書には、関係資料の原本は1997年から99年のあいだに「消えた」と書かれている。これは、プーチンが大統領府監督総局 (GKU) の局長ポストに就き、その後にFSB長官になった時期と重なる。さらに、(1994年にレニングラード市議会の公文書が移管された) サンクトペテルブルク市議会がプーチンに近い人々によって運営されるようになった時期でもある : Kravtsov, Novoselov, and Mironov (2010).

5. サーリエの調査結果はGessen (2012), p. 121より。

6. 1990年代に広まった物々交換の現象とその動機については、以下を参照 : Clifford Gaddy and

Barry Ickes in *Russia's Virtual Economy* (2002).

7. プーチンの手紙は、サーリエの報告書の付録3に添付されている。1992年2月1日にアーヴェンはプーチンに返信し、1992年3月25日にはロシア経済省がプーチン率いる対外関係委員会に輸出許可を出す権限を与えた。これより前に、プーチンとその側近たちは多数の許可をすでに出していた：Sal'ye (2000).

8. Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), pp. 90–91 [邦訳は126～127ページ]。さらに、Gessen (2012), p. 122 [邦訳は152ページ] を参照。

9. Rahr (2008), pp. 88–89を参照。

10. 以下を参照：

Matt Bivens, "Waiting for Vladimir Putin," *Moscow Times*, March 4, 2000, accessed through Nexis.com.

この長尺記事のなかで、ビヴェンズ (Bivens) は食糧スキャンダルだけでなく、1990年代のサンクトペテルブルクで起きたプーチンに関連するさまざまな出来事について詳説している。以下も参照：Oleg Lurie, "Food for St. Petersburg," *Novaya gazeta*, No. 10, March 2000, p. 5, accessed through Nexis.com in English; and David Filipov, "Putin's Record Suggests Alliance with Insiders Deals as City Officials Raise Reformer Doubts," *Boston Globe*, March 24, 2000, accessed through Nexis.com.

11. 2014年11月に発表された『フォーブス』誌の世界の大富豪ランキングで、アーヴェンは264位。ロシアのオリガルヒのなかでは22位だった：

www.forbes.com/profile/pyotr-aven/

12. 以下を参照：

Viktor Yushkin, *Lyudi kak teni* [People like shadows], *Postimees* (Estonia), September 20, 2007, at

<http://rus.postimees.ee/200907/glavnaja/mnenie/22618.php>.

13. Rahr (2000), pp. 94–95.

14. 「他人を信頼しすぎる癖」はロシア語で「*doverchivost*」。ロシア首相府のウェブサイトの英語版のインタビュー原稿では、「credulity (信じやすい傾向)」と翻訳されている：

<http://government.ru/eng/docs/3192/>.

<http://government.ru/docs/3192/> (ロシア語)

「*Doverchivost*」は「*doveriyay* (*doveriyat'* [信頼する] の命令形)」と同じルーツを持つ単語で、後者の単語を使った非常に有名なフレーズがある——「*Doveriyay, no proveryay!*」(英語では「Trust, but verify!」、日本語では「信頼せよ、されど検証せよ!」などと訳される)。これがロシアの有名なことわざだと知ったアメリカ大統領ロナルド・レーガンは、ソビエト指導者との会合でこのフレーズをよく使った。この言い回しに言及する新聞記事やその他の記述では、ほぼ必ずといっていいほど、これがレーニンのお気に入りのことわざの1つだったと紹介される。しかし、これは都市伝説のようだ。出版されたレーニンの演説や記述には、このフレーズは1度も登場しない。

15. Rahr (2000), p. 99.

16. 同上, p. 102. 1995～96年の下院および大統領選挙に関する議論は以下を参照：pp. 21–24.

17. Sobchak (1999)を参照。

18. Rahr (2000), p. 104.

19. 同上, pp. 105–06. ヤコブレフは2000年に市長に再選。その後、ワレンチナ・マトヴィエンコが後任の市長に選ばれたあと、ヤコブレフは2003年からベスランの学校占拠事件が起きるまでの短期間、南部連邦管区大統領全権代表に就任。さらに2004年から2007年にかけて、ヤコブレフは副首相と地域発展相を務めた。ネットで確認できる各サイトのプロフィールによると、ヤコブレフは2007年に政界を引退したと報告されている。

20 . Rahr (2000), p. 106.

21 . 同上、pp. 106–07.

22 . Rahr (2008), p. 89.

23 . Rahr (2000), p. 95.

24 . 以下を参照 :

“Meeting with Members of the Valdai International Discussion Club,” Sochi, Russia, September 14, 2007, at

http://archive.kremlin.ru/eng/speeches/2007/09/14/1801_type82917type84779_144106.shtml.

http://archive.kremlin.ru/appears/2007/09/14/2105_type63376type63381type82634_144011.shtml. (ロシア語)

25 . 以下を参照 :

Viktoriya Voloshina, “Piterskaya shkola razvedki” [The St. Petersburg school of intelligence], *Izvestiya*, November 2, 2001, at

<http://izvestia.ru/news/254165>.

ズブコフのもっとも重要な「弟子」が、彼の義理の息子で、2007～12年に国防相を務めたアナトリー・セルジュコフだった。2007年の就任時、セルジュコフには安全保障や軍事に関するバックグラウンドがまったくなかった。彼はもともと大きな家具会社の社長で、その後に義父の跡を継いでサンクトペテルブルクの税務機関に入った。さらにモスクワに移って連邦税務庁長官を務め、国防相にまでのぼり詰める。金融およびマネジメント・スキルに長けたセルジュコフに国防相として最初に与えられたタスクは、汚職を抑制することだった。そこで彼は、軍事予算を見直した。同時に軍事改革を進め、軍勢力による抵抗を回避した。以下を参照 :

Mark Galeotti, “Reform of the Russian Military and Security Apparatus: An Investigator’s Perspective,” in Blank (2012).

26 . 2007年9月14日、ソチで行なわれたヴァルダイ会議の会合で、プーチンは連邦金融監視局

(*Rosfinmonitoring*) の役割について踏み込んだ発言をした。「結局のところ、これは分析機関だ。金融・政府機関に関する、きわめて大量の情報を集める機関である……この機関を作ることを決めたとき、ロシア国内のビジネス界では繰り返しその危険性について取りざたされた。現代のロシアにおいて、1つの機関が集中的に機密情報を保持することは、ビジネスに悪影響を与えると危惧したんだ。しかし、そんなことは起こらなかった……それどころか、金融監視局は実に効果的に機能した。集められた情報によって、数千人に対する刑事訴訟の手続きが進められ、そのうち521人に有罪判決が下された。これは、同時期にヨーロッパの主要国で同様の疑いがかけられた人数、実際に有罪判決が下された人数にほぼ匹敵するものだ。同じ時期、アメリカでは2倍の人数が有罪判決を受けた。一方、ヨーロッパの国々で有罪判決を受けた平均人数は、500人強だった」 :

http://archive.kremlin.ru/eng/speeches/2007/09/14/1801_type82917type84779_144106.shtml.

27 . Putin, “Conversation with Heads of Local Bureaus of Leading U.S. Media Outlets,” June 18, 2001,

http://archive.kremlin.ru/eng/speeches/2001/06/18/0000_type82915type84779_143577.shtml (英語)

http://archive.kremlin.ru/appears/2001/06/18/0002_type63376type63380_28569.shtml. (ロシア語)

28 . Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), pp. 40–41. [邦訳は60ページ] ウォフカ

(Vovka)、ワロージャ (Volodya)、さらにウォワ (Vova) はすべて「ウラジーミル」の愛称。

29 . Murawiec and Gaddy (2002)

30 . 以下を参照 :

“Stenograficheskiy otchet o vstreche s molodymi sotrudnikami pravookhranitel’nykh organov”

[Stenographers report on meeting with young officials from the law enforcement organs],
November 10, 2003, at

<http://archive.kremlin.ru/text/appears/2003/11/55331.shtml>.

プーチンの側近であるウラジスラフ・スルコフが同じ考えを表明したことがあるが、これは特筆に値する事実である。通例、「プーチンらしい考え」をより美しい言葉で表現するのがスルコフ流だ。ロシア人調査報道ジャーナリストのエレーナ・トレグボヴァとの会話のなかで、スルコフはこう誇らしげに語った。「私はいかなる形の権力乱用にも暴力にも断固として反対だ——もちろん、美的な観点から、という意味でね」。そこでトレグボヴァは「抑圧的な施策には反対ということか」と尋ねた。もちろん、とスルコフは答えた。「そんなのは前時代的だ！ そんなのは、頭の足りない怠け者が考える方法だ。誰かを無理やり逮捕して、何かを強制するって？ 質的なプロセスは、どんなものであれ必然的に複雑になる。長く苦しい合意へのプロセスは、独裁政治よりもずっと複雑だ。しかし、ずっと美しいものさ！」：Tregubova (2003), p. 342.

31. 詳しくは第6章の「アンドロポフのKGB」の項を参照。

32. Bobkov (1995).

33. 同上、pp. 204–07.

34. 同上、p. 257.

35. 同上、pp. 259–60.

36. 同上、pp. 267–68. メドヴェージェフは自らの著書のなかで、このエピソードが事実であることを認めた：Medvedev (2006), pp. 221–22.

37. Bobkov (1995), p. 268.

38. 二重スパイにかかわるケース・オフィサーに求められる特別なスキルやメソッドを理解するための情報源としては、第二次大戦時にイギリスのスパイだったジョン・マスターマン (John Masterman) の著書 *The Double Cross System* がもっとも優れているに違いない。戦時中、マスターマンはイギリスのMI5のために二重スパイを操り、連合国側の作戦についてドイツの諜報組織や最高司令部を騙した。マスターマンの基礎的なコンセプトは次のようなものだった——自分の敵となる人々をどうコントロールし、操るか？ 選択肢は、相手を叩きのめすか、あるいは相手を利用するか。戦争では、後者がとりわけ効果的である。マスターマンの本は当初、1945年の時点でシステムがどのように機能していたのかを記録・報告するための私的文書として書かれたものだった。その後の1972年、*The Double Cross System in the War of 1939 to 1945* としてイェール大学出版局から出版された。(邦題『二重スパイ化作戦：ヒトラーをだました男たち』〔武富紀雄訳／河出書房新社〕)

39. 「ルーチ作戦」については本書内で前述した解説や第6章の原注8を参照。

40. Grigoriy Volchek, “Sluzhba v KGB – plyus dlya politika” [KGB Service—A plus for a politician], *Zvezda* (Perm), June 15, 2000,

www.nevod.ru/local/zvezda/archive.html.

41. 同上。

42. 同上。

43. 前述のとおり、この時期の詳細については、情報源や伝記資料によって内容が異なる部分があり、何が正しい情報なのかは不明である。たとえば、プーチンが通常のKGBエージェントから現役予備役へ変わったのは正確にはいつだったのか？ サブチャークの市政運営グループに加わって副市長になったあと、KGB内でのプーチンの正確な立場は？ いつまでその立場にとどまっていたのか？

44. Vladimir Putin, “From an Interview with the Canadian CBC and CTV Channels, the Globe and Mail Newspaper and the Russian RTR Television,” December 14, 2000, at

http://archive.kremlin.ru/eng/speeches/2000/12/14/0001_type82916_135565.shtml.

プーチンはロシア国家のトップに立つあいだ、アメリカの元国務長官ヘンリー・キッシンジャーに頻繁に助言を求めた。さらにプーチンは、「まともな人間がみな情報機関出身」というこの台詞を何度となく繰り返し語った。『プーチン、自らを語る』のなかでも、プーチンはこの逸話について触れている。しかしながら、ヘンリー・キッシンジャーの情報機関でのキャリアは、プーチンとは大きく異なるものだった。第二次世界大戦中、アメリカ陸軍に入隊したキッシンジャーは、ドイツ語のネイティブ・スピーカーとして重宝された。プーチンがロシアの歴史上の人物や世界の指導者に個人的に言及するときと同じように、彼がキッシンジャーとの関係を強調するのは、自らの経歴、キャリア、地位を強化・正当化するため作戦である。2012年6月、サンクトペテルブルク経済フォーラムに参加するためにキッシンジャーがロシアを訪れた際には、プーチン大統領との個別の会談が開かれた。プーチンはその席で、2人の関係がいかにか古いものであるかを再び強調した。大統領府のウェブサイトに掲載された会談内容の抜粋のなかで、プーチンはキッシンジャーにこう念押しした。「われわれの関係が始まったのは1990年代半ば、私がサンクトペテルブルクの副市長として働いているときだ。あなたは、ロシアとアメリカの委員会のトップとしてここに来たんだ……今日まで関係が続いていることを、私は本当に嬉しく思うよ」：

“Vladimir Putin met with former US Secretary of State Henry Kissinger,” June 21, 2012, at <http://eng.special.kremlin.ru/news/4060>.

ここでプーチンが言及した「委員会」というのは、ワシントンDCの戦略国際問題研究所（CSIS）の後援で1992～93年に設立され、アナトリー・サブチャークとヘンリー・キッシンジャーが共同で議長を務めた委員会のこと。この委員会が設立された目的は、サンクトペテルブルク市のために外国から投資を募り、使われなくなった軍需工場を工業用の工場に変え、さまざまな製造プロセスを改革することだった：

Scott Shane, “Cold Warrior Kissinger Sells Old Nemesis Russia,” *Baltimore Sun*, June 24, 1993, at

http://articles.baltimoresun.com/1993-06-24/news/1993175015_1_petersburg-cold-warrior-russian.

しかしながら、第12章で説明するとおり、この委員会に関係する仕事のなかで、プーチンとキッシンジャーにどれほど直接的なやり取りがあったのかは謎である。

45. この視聴者参加型のテレビ番組のロシア語の名前は「*pryamaya liniya*」で、英語に直訳すると「direct line」となる。しかし、プーチンのPRチームでは「Hot Line」という英語名が使われている。

46. ヴァルダイ会議でプーチンとの会合が始まる前、〈RIAノーヴォスチ〉のスタッフはよくこの点を参加者に対してしつこく強調した——大切なのはたくさん質問してプーチンに食ってかかること、と彼らは説明した。BBCの元モスクワ特派員アンガス・ロックスバラ（Angus Roxburgh）もまた、著書内のヴァルダイ会議についてのセクションで、プーチンの質問好きについて言及している：Roxburgh (2012), p. 195.

47. Vladimir Putin, *Hot Line*, December 24, 2001. “Stenogramma ‘Pryamoy linii’ Prezidenta Rossiyskoy Federatsii V.V. Putina” [Transcript from “Direct line” with the President of the Russian Federation V.V. Putin], December 24, 2001, at http://archive.kremlin.ru/appears/2001/12/24/0001_type82634type146434_28759.shtml.

48. Medvedev (2006), p. 135を参照。

49. ロシアのメディア関係者やPR専門家への著者によるインタビュー。2011年11月7～11日、モスクワのヴァルダイ会議にて。

50. プーチンがピカリョヴォに到着したときの様子、あるいはデリパスカとの面談に関する記事および実際の映像は以下などを参照：

www.cbsnews.com/8301-503543_162-5071988-503543.html

www.reuters.com/article/2009/06/04/russia-putin-idUSL445098320090604

www.youtube.com/watch?v=0MntxIPL8xo&feature=related.51

アルファ銀行のノヴォシビルスク支店でのプーチンとピョートル・アーヴェンの話し合いは2008年10月22日に行なわれた。会議の内容はロシア首相府のウェブサイトで確認可能：

www.government.ru/docs/2210/.

〈統一ロシア〉の活動家たちの会合は10月23日に行なわれた：

www.government.ru/docs/2211/.

52. この映像は2010年7月30日にアップロードされた。タイトルの“Kak narod poslal Putin na ××”は「人々はプーチンに×××に行けと言った」の意味：

www.youtube.com/watch?v=8f5wXsB-Yp8

53. 同上。

54. Gessen (2012), pp. 164–75.

55. Kolesnikov (2005).

56. Kolesnikov (2005)からの引用：Gessen (2012), p. 170.

57. Kolesnikov (2005), pp. 38–39; Gessen (2012), p. 170でも引用されている。

58. Gessen (2012), p. 171.

59. Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), pp. 69–72. さらに、Blotskiy (2002), pp. 259–66を参照。

60. Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), p. 69. [邦訳は100ページ]

61. 同上, p. 71. [邦訳は103ページ]

62. 同上。

63. Blotskiy (2002), p. 263.

64. 同上, p. 264. エピソードのこの部分では、プーチンは卓越したドイツ語スキルを強調し、自身の評価を上げたいようだ。Blotskiy (2002)内にロシア語で書かれた会話は次のように進む：(群集)「おまえは誰だ？」→(プーチン)「通訳だ」→(群集)「通訳がそんなにドイツ語がうまいはずがない」。そのあと、プーチンは群集に向かってこう説明した——目の前の建物は、東ドイツとの国家間合意で認められた、治外法権が適用されるソ連軍の施設であり(そのため、建物の外に停まる車はすべて東ドイツのナンバー・プレートだった)、シュタージとも東ドイツ軍ともいっさい関係ない。

65. Gaddy and Ickes (2009)を参照。

66. Gaddy and Ickes (2011a)を参照。

67. プーチンが資産管理部門の仕事に就くことになった理由は、彼のモスクワ異動に潜む数々の謎の一つである。一つ間違いないのは、プーチンがサンクトペテルブルク時代にすでにクレムリンの資産管理部門と関係を持っていたということだ。1994～97年にサンクトペテルブルクのアメリカ領事館総領事を務めたジョン・エヴァンスによると、あるとき大統領府監督総局(GKU)がプーチンに面会し、ある微妙な問題の解決の手助けを要請したという。クレムリンがサンクトペテルブルク市に求めたのは、アメリカ人やその他の外国人用住居として使われていた建物を、ロシア大統領が使用できるように用途を変更してほしいということだった。その当時、エリツィンの娘が、サンクトペテルブルクを訪問する際に使う別荘を必要としていた。すでに住人はいたものの、その外国人用住居は別荘として理想的だった。厄介な要素をはらんだこの問題を見事に解決したことによって、プーチンの評判がGKU内で上がり、将来的な異動につながった：著者によるジョン・エヴァンスへのインタビュー取材より(2014年6月26日、ワシントンDC)。

68. 同上。

69. Andrey Kolesnikov, “Aleksey Kudrin zaveshchal svoje kreslo Vladimiru Putinu” [Alexei Kudrin bequeaths his chair to Vladimir Putin], *Segodnya*, March 28, 1997, accessed through

Eastview. 「menacing (威嚇的)」とここで訳されたロシア語の単語は *groznaya* で、英語では「fear (恐怖)」「awe-inspiring (畏敬の念を起こさせる)」「threatening (脅迫的)」「terrible (恐ろしい)」などと訳されることが多い。悪名高いロシア皇帝・イヴァン4世の異称「イヴァン雷帝 (Ivan the Terrible)」でも使われる単語。

70. “Soveshchaniya: Za poryadok vzyalis’ vseryez” [Meetings: taking order seriously], *Rossiyskiye vesti*, May 21, 1997 (accessed through Eastview).

71. Gaddy and Ickes (2011a).

72. 以下を参照：

Michael Gordon, “Russia’s Former Head of Privatization Faces Bribery Charge,” *New York Times*, October 2, 1997, accessed on ProQuest.

ロシア輸出入銀行の頭取はウラジーミル・ポターニンだった。ポターニンは1996年8月から1997年3月までエリツィン政権下で第一副首相を務めたオリガルヒで、チュバイスとも懇意であることが知られていた。

73. 政府を追放されたあと、アナトリー・チュバイスはロシアの巨大電力会社〈統一エネルギーシステム (RAO/UES)〉の会長に就任し、エリツィン大統領やクレムリンとの密接な関係を保った。記録によると、チュバイスは、1999年にエリツィンがプーチンを後継者に指名した際に特に反対はしなかったという。とはいえ、この選択が吉と出るかどうかについては懐疑的で、こんな懸念を表明した。それまで舞台裏で働いてきたプーチンのような無名の人間を、国を代表する政治家に変える——1999年から2000年にかけて、そんなことをしている時間はない。ウラジーミル・プーチンが大統領になることに対して、チュバイスが一定の不安を抱いていたことは間違いないだろう。たとえば、以下のボリス・エリツィンの回顧録からの抜粋を参照：

“*Prezidentskiy marafon*” [The presidential marathon], *Ogonyok*, September 29, 2000; and “Chubays Denies Intrigue, Expresses Support for the President,” *Komsomolskaya pravda*, October 20, 2000.

しかしながら、プーチンが大統領や首相を歴任するあいだ、国主導の重要な分野において、チュバイスは大切な役割を果たしつつきた。〈統一エネルギーシステム〉の会長を10年間務めたのち、2012年にアナトリー・チュバイスはロシア・ナノテクノロジー社 (ロスナノテク) の社長に就任した。

74. オリガルヒたちが不安定な状況に追いやられたのは、エリツィン政権との1996年の「ローンズ・フォー・シェアーズ」合意に至るまでの怪しいプロセスのあいだ、およびそれ以前の彼らの財産に対する合法性が疑われていたからである（「インサイダー」に強制的に株を売却させる、という特に意地汚い方法を使うことも多かった）。この問題に目をつぶったとしても、彼らの合法的な金融情報が公になっただけでも、企業が致命的な打撃を受ける可能性があった。Gaddy and Ickes (2011a)を参照。

75. 同上。

76. Vladimir Putin, “Vstupitel’noye slovo na vstreche s doverennymi litsami” [Opening remarks at a meeting of high-level campaign workers], February 28, 2000, at http://archive.kremlin.ru/appears/2000/02/28/0000_type63374type63376_122120.shtml. (英語版) http://archive.kremlin.ru/eng/text/speeches/2000/02/28/0000_type82912type84779_123954.shtml.

実際のロシア語での引用：*ravnoudalennoye polozheniye vsekh sub'yektov rynka ot vlasti* (市場内のすべての参加者が権力から等距離にある)。この宣言には、「将来的に実業家やオリガルヒが政府の正式な要職に就くことはない」「1996年以降のウラジーミル・ポターニンやボリス・ベレゾフスキーのようには行かない」という意味合いも含まれていた。しかしながら、必ずしもその逆を意味するものではなかった。つまり、国家にとって重要な利害関係がある企業の取締役会から、政府の役人が排除されるわけではなかった（「政府役人の企業経営への参加」は、2000年代のロシア

のビジネス界の目立った特徴である)。

77. ここでいう「没収 (disappropriation)」という言葉にはきわめて明確な意味がある。この言葉は、すでに誰かに割り当てられていた何かを取り上げ、多くの場合には別の誰かに再び割り当てるということを意味する。与えたものは取り上げることもできるという「没収」の考えは、プーチンのシステム内の核となるコンセプトを強調するものである——オルガルヒが所有する財産は、完全なる私有財産ではない。彼らはクレムリンとの取引によって財産を得た。そのため、クレムリン (あるいは国家) の代わりにその資産の管財人になったにすぎないのだ。これは、帝政ロシア時代の皇帝と貴族のあいだの取り決めの核となるものでもあった。貴族たちは独裁者への奉仕と忠誠の対価として、広大な土地の使用許可と農奴を手に入れることができた。この取り決めは——1917年のロシア革命が起きる以前、つまり共有財産に重きを置いた共産主義体制が導入される以前から——私有財産という考えの広まりを抑制するものだった。詳しい議論については、Pipes (1999)を参照。

78. この会合の様子は、プーチンのロシア大統領就任までの道のりと就任後の経緯を特集した4部編成の英BBCのドキュメンタリーでも詳しく紹介された (『*Putin, Russia and the West*』ノーマ・パーシー監督、2012年1月にBBC2で放送)。このドキュメンタリー番組のなかで、会合の直後にオリガルヒのミハイル・ホドルコフスキーがこう発言する場面がある——「これで、政府当局 (*vlast*) がわれわれから何を欲しがっているのかがわかったよ」。ホドルコフスキーの発言シーンは、第1部の12分20秒に登場。

79. Gaddy and Ickes (2009). スルコフの発言はTregubova (2003), pp. 349–50より。

第9章 システム

1. グレブ・パヴロフスキーのインタビューより: *The Guardian*, January 24, 2012. インタビュー内で言及はされていないものの、「抑制的なシステム (*zapretitel'naya sistema*)」というのが、イギリスの政治・道徳哲学者で法律学者のジェレミー・ベンサム (1748 - 1832) が提唱した概念であることは注目に値する。ベンサムは、国家が刑法、商法、その他の法律を制定する際の一連の原則の概要を作り上げた人物である。1814~15年、ベンサムはロシア皇帝アレクサンドル1世に対し、ロシア帝国の法制改革と完全なる法律の成文化への支援を申し出た。しかし、皇帝はその支援を受け入れなかった。この件は Rosen (2004)に詳しい。

2. たとえば、前掲の『ガーディアン』紙のインタビューのなかで、グレブ・パヴロフスキーはこの決定が偶発的なものだったことを強調し、プーチンとドミートリー・メドヴェージェフが2012年に立場を入れ替えることを当初から決めていた、という2011年9月のプーチン自身の発言に異議を唱えた。「プーチンが大統領職に復帰することについて、彼とメドヴェージェフが何年も前に合意していたなど、完全なる都市伝説でしかない。もちろん、このことについて何百回も話し合ったに違いない。それが政治というものだ。何が正しいのか、答えは誰にもわからなかった……もちろん、[うまく行かなかつたら] どんなことになるのか、2人は議論を重ねたのだろう……だとしても、正式な合意が以前からあったはずなどない」。パヴロフスキーは、メドヴェージェフとプーチンの交代 (「キャスリング (*rokirovka*)」) は間違いだったと述べ、2011年4月の時点ではその可能性さえも完全に否定していた——時を同じくして、彼は「ホワイトハウス [首相府] による直接の命令、つまりプーチンの個人的な命令によって」クレムリンの顧問を解任された。

3. 本書の執筆のために著者が個人的にインタビューした、欧米諸国の政府高官の見解。

4. グレブ・パヴロフスキーは『ガーディアン』紙のインタビューでこの憶測についてはっきり言及した。「タンデム体制には大きな緊張感がはらんでいた……ホワイトハウス [首相府] には、メドヴェージェフが突如として政府を解体するのではないかという恐れが常にあった。そうなれば、まったく異なる状況が生まれることになる。この恐怖は、2011年の春に頂点に達した」。以下も参照:

Ellen Barry, “Key Question Is Left Open as Medvedev Faces Media,” *New York Times*, May 18, 2011, at

www.nytimes.com/2011/05/19/world/europe/19russia.html?partner=rss&emc=rss

; and Nikolai Zlobin, “Russia’s leaders Dmitry Medvedev and Vladimir Putin should back each other,” (*Vedomosti*で最初に発表され、以下に英語翻訳版が掲載された :

The Telegraph, November 2, 2010, at

www.telegraph.co.uk/sponsored/russianow/opinion/8105352/Russias-leaders-Dmitry-Medvedev-and-Vladimir-Putin-should-back-each-other.html.

5. メドヴェージェフとクレムリンの支援によって *Institut sovremennogo razvitiya* (INSOR) (現代発展研究所) や似たようなシンクタンクがロシア国内で設立され、国家・制度改革のための新しいアイデアを募り、経済危機やその他の重要な政治課題への対処法を探るための場が設けられた。INSORの代表者イーゴリ・ユルゲンスは、評価の高いロシア人実業家で、幅広い国際的な人脈ネットワークを誇り、分析機関の設立に関する豊かな経験を持っていた。研究所のメンバーには、大統領府のスタッフとして働いた経験を持つ人々も選ばれた。INSORの公式ウェブサイトは以下のとおり : www.insor-russia.ru/en. イーゴリ・ユルゲンスはロシアの政治改革の必要性を積極的に主張してきた。たとえば、以下の『コメルサント』紙の2011年9月21日のオンライン・インタビューなどを参照 :

www.kommersant.ru/doc/1778346

; and Sergei Loiko, “In Russia, Medvedev’s Key Advisor to Leave Post: Russian Activist Igor Yurgens Talks about the Future of the Council on Human Rights and the Return to Office of President Vladimir Putin,” *Los Angeles Times*, June 28, 2012, at

www.latimes.com/news/nationworld/world/la-fg-russia-qa-20120629,0,3197541.story.

6. 以下を参照 :

Luke Harding, “Russian President Sacks Moscow Mayor: Dmitry Medvedev Orders Out Veteran Yuri Luzhkov Citing ‘Loss of Confidence,’ Bringing 18-Year Domination to an End,” *The Guardian*, September 28, 2010, at

www.guardian.co.uk/world/2010/sep/28/russian-president-sacks-moscow-mayor.

グレブ・パヴロフスキーはこの件について、次のような見解を示した。「メドヴェージェフはルシコフ退任にこだわり、それを見事にやっつけた。プーチンはそれが嫌だった。というのも、メドヴェージェフの行動はとても力強いジェスチャーだったからだ」 : グレブ・パヴロフスキーのインタビューより : *The Guardian*, January 24, 2012.

7. グレブ・パヴロフスキーのインタビューより : *The Guardian*, January 24, 2012. 実際にプーチン自身も、2007年9月14日にソチの大統領の別荘で開かれたヴァルダイ会議の席で、あるいは2007~08年の数々のインタビューや会話のなかで同じ発言を繰り返した。検討すべき国家的な課題について考慮すれば、「すべてが1人の人間の手に委ねられる状況を作ってはいけない」とプーチンは訴え、タンデム体制の意図について率直に語った。

8. 同上。

9. 本書の準備段階における、大統領の元側近たちへの個人的な取材より。

10. ロシアのシステムが「スイス時計」のように動くべきだという比喻を使ったのは、2007年9月14日のソチのヴァルダイ会議の会合でのこと。その後に行なわれたいくつかのセッションのなかでも、彼は同じ表現を同じ文脈で繰り返した。2007~11年のヴァルダイ会議における著者の個人的なメモより。たとえば、以下も参照 :

“Personifitsirovat’ ‘Plan Putin’ nepravil’no, no pri vykhode iz krizisa mnogoye delayetsya v ruchnom upravleniy—Putin” [Personifying “Putin’s Plan” is not correct, but before exiting from the crisis much will have to be done in manual control—Putin], ITAR-TASS, October 18, 2007;

また、プーチンは次のようにも発言した。「建設分野に関していえば、ここ数年は良い方向に向かっている。たとえば、住宅建設は年間6,000万平方メートルを超えた。これは良い数字だ。しかし、これは主に日々の“手動運転”による成果でしかない。残念ながら、建設分野を自動で管理するための効果的なモデルはまだ見つかっていない」（2010年3月15日、建設分野における監視、管理、認可方針、政府サービスの向上に向けた会議：www.government.ru/eng/docs/9744/）。

11. このコンセプトは1997年の教書演説でも説明され、法律の秩序を守り、ロシア連邦内のあらゆるレベルにおける法的活動の矛盾や無駄を減らすことが大切だと強調されている。すでに討論したように、1993年のロシア憲法はプーチンの「法治国家 (*pravovoye gosudarstvo*)」の考え方の下敷きとなるものである。

12. Burnham and Trochev (Summer 2007)を参照。

13. 後章で説明するように、2012年6月にプーチンは、企業の訴訟プロセスを手助けする仕事に特化した役人を任命した：Alexander Bratersky, “Newsmaker: Small Business Lobbyist Titov Named Business Ombudsman,” *Moscow Times*, June 21, 2012, at www.themoscowtimes.com/mobile/article/460818.html.

(<https://themoscowtimes.com/news/newsmaker-small-business-lobbyist-titov-named-ombudsman-15639>)

さらにロシア政府は市民に対して、政治的な職権乱用に関わる案件を欧州人権裁判所に提訴することを許可した：

William Pomeranz, “Russia and the European Court of Human Rights: Implications for U.S. Policy,” Kennan Institute seminar summary, May 3, 2011, at www.wilsoncenter.org/publication/russia-and-the-european-court-human-rights-implications-for-us-policy.

14. 以下の会議の議事録を参照：

“The Russian Constitution at Fifteen: Assessments and Current Challenges to Russia’s Legal Development,” Kennan Institute, March 19, 2009, at www.wilsoncenter.org/sites/default/files/KI_090623_Occ%20Paper%20304.pdf.

15. たとえば、以下を参照：

Dmitri Trenin, “Putin’s Russia Is Embracing Czarism: Trud Interviews Dmitri Trenin,” *Trud*, November 14, 2006, at www.carnegieendowment.org/2006/11/16/putin-s-russia-is-embracing-czarism-trud-interviews-dmitri-trenin/9pg.

(<http://carnegie.ru/publications/?fa=18861>)

16. たとえば、以下の記事を参照：

Yevgeniya Albats and Anatoliy Yermolin, “Korporatsiya ‘Rossiya’: Putin s druz’yami podelili stranu” [“Russia,” Inc.: Putin and his friends have divided up the country], *Novoe Vremya/The New Times*, No. 36, October 31, 2011.

この記事の核となるのは、プーチンと関係がある企業の数多の「利害」の膨大なリストであり、そのすべてが背景ごとに色分けされている——「シロヴィキ」「非シロヴィキのサンクトペテルブルク関係者」「オーゼロ別荘組合のメンバー」「子供」「親戚」「友人」「側近」。記事のなかで、アリバツ (Albats) とイェルモリン (Yermolin) は〈株式会社ロシア〉という名前の出所が、私たち著者の1人であるという誤った指摘をしている。実際には、この言葉自体は古くから一般的に使われていた。重要なのは、〈株式会社ロシア〉というコンセプトの本当の意味を見極めることである。

17. アメリカのGE幹部への個人的なインタビューより (2010~12年)。

18. “Strategic Planning: Building up Reserves,” pp. 81–85を参照。

19. “From Dresden to Business Developer in St. Petersburg,” pp. 147–49を参照。
20. “Strategic Planning: Building up Reserves,” pp. 81–85を参照。
21. King and Cleland (1978), p. 11.
22. 著者との個人的な会話のなかで、ロシアのオリガルヒ2人が自分たちの役割を似たような言葉で説明した。「われわれの仕事は、自分たちのビジネスをそばで見守って最適化することであり、政治〔戦略的計画〕には手を出さないことだ」（ワシントンDC、2008年春）
23. King and Cleland (1978), p. 11.
24. 2011年11月のヴァルダイ会議において、プーチンは次のように繰り返し答えた——すべてとはいわないまでも、ドミトリー・メドヴェージェフの政策のほとんどは、私自身〔プーチン〕で考えたものか、一緒に密に相談して考えたものである：著者の個人的なメモより。
25. ガディーとイッキーズはロシア経済を「逆さま漏斗」型の経済だと説明する。石油・天然ガス部門という細い管の部分で価値が生み出され、残りの産業が存在する広い円錐部に流れ込むのだ、と：Gaddy and Ickes (2011b).
26. これまで、中小企業によるこの分野への参入が政府によって奨励されたことはほとんどない。その証拠として、ロシアの石油・天然ガス部門で業務を行なう会社数は160社程度しかない。一方、アメリカでは同部門に22,000以上の会社が存在する。
27. “The Oligarchs’ Dilemma: Mr. Putin’s Solution,” pp. 186–89を参照。
28. “The Food Scandal Revisited,” pp. 154–60を参照。
29. 第8章の「食糧スキャンダルの再燃」の項を参照。
30. プーチンの論文の第3章のタイトルは「ロシア連邦北西部の輸送技術・港湾コンプレックス形成のためのコンセプト」。フィンランド人経済学者のペッカ・ステラ (Pekka Sutela) は、この問題を「プーチンの物流主権への懸念」と表現する：Sutela (2012), p. 35.
31. 1992年12月3日にボリス・エリツィンが発行した大統領令：
“O merakh po vozrozhdeniyu torgogo flota Rossii” [On measures to resurrect Russia’s commercial fleet], Decree No. 1513.
この大統領令は、港湾設備や港への鉄道アクセスを含めた、ロシアの海運業の物理的・制度的なインフラを再整備する計画を政府に求めるものだった。エリツィンのこの大統領令を遂行するために多くの委員会が設置され、サンクトペテルブルクの市長執務室のスタッフもそのメンバーに選ばれた。当時、国際ビジネス開発を担当する副市長だったウラジーミル・プーチンが参加者の1人だったとしてもおかしくはない。
32. プーチンの大統領就任中のパイプライン計画としては、とりわけ重要な案件が2つあった。1つは、ロシアのバルト海沿岸からドイツにつながる天然ガスのパイプライン「ノルド・ストリーム」で、2011～12年に稼働を開始。2つ目は、ロシアの黒海沿岸から南東ヨーロッパまでをつなぐ前者と似たようなパイプライン「サウス・ストリーム」計画で、こちらはまだ着工に至っていない。ノルド・ストリームに関する詳しい情報については、事業主体である合弁会社の公式ウェブサイトを参照：
www.nord-stream.com/press-info/library/
サウス・ストリームの公式ウェブサイト：
<http://south-stream.info/index.php?id=2&L=1>.
(<http://www.south-stream-transport.com/>)
プーチン政権におけるパイプラインやほかのエネルギー部門の優先事項に関するさらに詳しい情報と分析は、ジャーナリストのステイーヴ・レヴィンのオンライン・ブログを参照：
www.stevelevine.info
33. 〈株式会社ロシア〉を構成する戦略的企業に対して、プーチンはどのようにコントロールを確立したのか——それは、この本の範疇を超える問題であり、本書の本文中と原注での記述は表面的

な解説にすぎない。あえてここで付け加えるとすれば、多くの場合において、真のコントロールを確立するために、プーチン側には多大な労力と時間が必要だったということだ。ターゲットとなる会社にはそれぞれ異なる特色があり、それぞれ特別な作戦が必要だった。なかでも、〈ガスプロム〉を支配下に戻す作戦がもっとも重要であり、同時にもっとも難しく繊細だった。プーチンのシステム内の〈ガスプロム〉の役割は唯一無二ものだった。なぜなら〈ガスプロム〉は、ロシア最大のレント収入の稼ぎ頭であり、もっとも重要なレント分配者であるという2つのステータスを併せ持っていたからだ。プーチンにしてみれば、言うまでもなく、〈ガスプロム〉は個人的な支配下に置かなければいけない企業だった。しかし、単に正面から戦いを挑むわけにはいかなかった。そのような安易な作戦では、〈ガスプロム〉を管理下に置き、腹心の部下たちを内部に送り込むことなどできるわけもなかった。そんなことをすれば、権力争いが勃発し、もっとも重要な役割——資源レント収入を分配し、多くの国民と巨大な産業をサポートする役割——が機能しなくなってしまうかもしれない。プーチンは大統領になってから2年以上をかけ、当時の社長だったレム・ヴァヒレフを追い出し、自分の息のかかった仲間であるアレクセイ・ミレルを新たな社長に据えることに成功した。この作戦に関するとりわけ興味深いエピソードについては、以下が詳しい：Panyushkin, Zygar, and Reznik (2008).

34. もちろん、プーチンCEO／大統領のもとには、ほかの国有部門で貴重な役割を担う別の信頼できる補佐役もいる。ズブコフとセーチンが特に目立つのは、2人がプーチンのキャリアを通じて長いあいだ常に一緒に密接な関係にあり、重要な節目で彼らが特別な役割を果たしたからだろう。

35. イーゴリ・セーチンの詳細な人物像や経歴については、以下を参照：

Irina Reznik and Irina Mokrousova, “Igor’ Sechin, pervyy vozle Vladimira Putina” [Igor Sechin, first alongside Vladimir Putin], *Vedomosti*, March 19, 2012, at www.vedomosti.ru/library/news/1541119/pervyi_vozle_putina.

紹介文の冒頭には、次のように書いてある。「セーチンの知人たちは、彼にさまざまな愛称を付けている——プーチンの秘書、側近、副官、兵士……なかにはもっと侮辱的なものもある。だとしても、知人の全員は次のように同意する。セーチンの役割の主なコンセプトは、自己を豊かにすることでも、個人の力を誇示する状況を作ることでもない。彼が求めるのは、自身の上司 [プーチン] の意志と願いを実行に移すことだ。それこそが、社会の利益になるとセーチンは考えているのだ」。また、別の記事も注目に値する：

Oksana Gavshina, Maksim Tovkaylo, and Yekaterina Derbilova, “Chto ozhidayet ‘Rosneft’ pod rukovodstvom Sechina?” [What awaits “Rosneft” under Sechin’s leadership?], *Vedomosti*, May 23, 2012, at

www.vedomosti.ru/companies/news/1774296/sechin_soberet_neft

この記事のなかで、情報提供者の1人がこう発言する。「ロスネフチのCEOであるにもかかわらず、セーチンはなんでもプーチンに相談する。セーチンは人ではなく“機能”だ。何かをやれと言われたら、彼はそれを実行する」。プーチンの側近グループのほかの大勢と同じように、イーゴリ・セーチンは数々の主要人物と近い関係にあった。セーチンの娘は、ウラジーミル・ウスチノフの息子と結婚した。検事総長や司法大臣を歴任したウスチノフは、2000年代に石油会社〈ユコス〉代表のミハイル・ホドルコフスキーを逮捕まで持ち込んだ人物だった。〈ユコス〉の解体後、その資産を引き継いだのは〈ロスネフチ〉だった。今では、〈ユコス〉のこの遺産が〈ロスネフチ〉の主要な事業部門の大部分を占めていると述べている。イーゴリ・セーチンの経歴については、以下の *Moscow Times* のページも詳しい：

www.themoscowtimes.com/mt_profile/igor_sechin/433774.html.

また、Coll (2012)も参照。

36. 『ヴェドモスチ』紙によると、このプロジェクトはキリシの石油精製工場の輸出部門 (Kirishineftekhimeksport、あるいは通称キネックス (Kineks)) によって計画されたものだった。

た (See Reznik and Mokrousova, March 19, 2012)。1991～92年の石油・食糧取引においてプーチンが輸出を許可したのが、このキリシ石油精製所の石油だった。おそらく、輸出部門であるキネックスが商取引を担っていたに違いない。1990年代にキネックスの幹部の1人だったがのが、ゲンナジー・ティムチェンコだ。ティムチェンコは2014年3月まで、世界最大の石油商社の1つである〈グンボル〉の共同経営者だった。〈グンボル〉は主としてスイスに本拠を置いているが、〈ロスネフチ〉の生産した石油の一定量の売買・輸出にかかわるなど、ロシアとも深い利害関係を持っている。ティムチェンコのプロフィールについては、フォーブスの大富豪リストを参照：

www.forbes.com/profile/gennady-timchenko/

フィンランドとロシアの二重国籍を持つティムチェンコは、1990年代初め、サンクトペテルブルク在住中にプーチンと知り合ったといわれている。ティムチェンコはさらに、ロシア最大の独立系天然ガス生産会社の1つ〈ノヴァテク〉の株を所有するなど、ロシアのビジネス界と密接な関係を持っている。彼はまた、プーチンが若いころに所属したサンクトペテルブルクの柔道クラブの支援者でもある：

Andrew Kramer and David Herszenhorn, “Midas Touch in St. Petersburg: Friends of Putin Glow Brightly,” *New York Times*, March 1, 2012, at

www.nytimes.com/2012/03/02/world/europe/ties-to-vladimir-putin-generate-fabulous-wealth-for-a-select-few-in-russia.html.

2008～09年にティムチェンコは、彼と〈グンボル〉、さらに彼とプーチンの密接な関係について報じた『エコノミスト』誌を訴えた：

“Grease My Palm,” *The Economist*, November 29, 2008, and “Gennady Timchenko and Gunvor International BV,” *The Economist*, July 30, 2009, at

www.economist.com/node/14140737.

2012年5月、プーチンの3期目の大統領就任と同じころ、『エコノミスト』誌はグンボルとその石油取引の慣行について再び長尺記事を掲載：

“Gunvor: Riddles, Mysteries and Enigmas,” *The Economist*, May 5, 2012, at

www.economist.com/node/21554185.

2012年7月、伝えられるところによると、ティムチェンコは自身の持ち株会社で、多種多様な資産を保持・管理する〈ヴォルガ・リソース〉の一部の本社機能をスイスからモスクワへと移したという：

“Timchenko Moves Headquarters to Moscow,” *Moscow Times*, July 20, 2012, at

www.themoscowtimes.com/business/article/timchenko-moves-headquarters-to-moscow/462357.html.

37. Zubkov (2000).

38. ニコライ・トカレフは鉱業と地質学を大学で学び、この分野でキャリアを積んできた。多くの情報源によると、彼は元KGB職員で、1980年代にプーチンと一緒に東ドイツに駐在していたという。しかし、〈トランスネフチ〉のウェブサイトに掲載されているトカレフのプロフィールには、KGBでのキャリアについては書かれていない。代わりに、1996～99年に大統領府の資産管理部門で働いていたことが書かれている。これは、ウラジーミル・プーチンが1996～97年に最初にモスクワに異動になったときに務めた部門と同じだ。1999年8月、トカレフは〈トランスネフチ〉の国際業務・プロジェクト担当の副社長に任命される。2000年9月、彼は〈トランスネフチ〉を離れて石油会社〈ザルベジネフチ (Zarubezhneft)〉の社長となる。その後の2007年9月11日、トカレフは〈トランスネフチ〉の社長に指名される。1999年に〈トランスネフチ〉に入社したときの最初の役職がセキュリティ部門のトップだったため、KGB出身である可能性は大きい。

39. 国内用と輸出用を含めたロシアの精製済み石油製品の70%程度は、鉄道で輸送される：Troika, *Russia Oil and Gas Atlas*, January 2012, p. 39.

40. ヤクーニンについては第4章の「好都合な歴史を探して」、第8章の「プーチンのモスクワ異動」の項でもすでに説明した。加えて、以下も参照：Douglas Busvine and Stephen Grey, “Special Report: Russian Railways’ family connections,” Reuters, July 25, 2012, at www.reuters.com/article/2012/07/25/us-russia-railways-idUSBRE86O06U20120725.

41. ヤクーニンもまた、KGB職員として務めた経験を持つと考えられるプーチンの側近の1人である。彼の経歴に関するいくつかの状況証拠が、KGB職員だったことを強く指し示している。たとえば、彼は弾道ミサイルの専門家として教育を受け、ヨッフエ物理技術研究所の対外関係部長を2年務め、1980年代にはソ連国連代表部員としてニューヨークに5年間駐在した。プーチン周辺のほかの多くの人々と同じように、ヤクーニンもKGBとのつながりを公の場で肯定したことも否定したこともない：

Max Delany, “An Inside Track to President Putin’s Kremlin,” *St. Petersburg Times*, October 2, 2007, at www.sptimes.ru/index.php?action_id=2&story_id=23175.

42. ヤクーニンのロシア鉄道の社長就任までの流れと、トカレフの〈トランスネフチ〉の社長就任までの流れが似ているのは実に興味深い。2人とも、当初は前社長のもとで副社長になり、しばらくその役職で仕事を続けた。これは道理にかなったプロセスである。どちらも将来的に指揮することになる産業についての専門知識がなかったため、副社長の役職に就くことで、仕事のイロハを覚えることができた。同時に、「人間に対処する」KGBの専門家として培った（とされる）専門知識を考慮した場合、副社長という地位は、組織内の「人間」について観察・監視し、情報を集める絶好の機会を彼らに与えてくれたはずだ。

43. プーチンの側近たちのほかの人々と同じように、ウラジーミル・ヤクーニンもまた、サンクトペテルブルクの実業と関係がある。プーチン率いるクレムリンの仲間入りをした2000年、彼はまず港の輸送を担当する交通省の次官に就任した：

Delany, “An Inside Track to President Putin’s Kremlin,” *St. Petersburg Times*, October 2, 2007.

44. 〈統一造船会社〉のウェブサイト：

www.oaoosk.ru

45. レント収入の共有についての詳しい解説は以下を参照：Gaddy and Ickes (2011)。さらに注目すべきは、クレムリンがオリガルヒに対して、一次産品や製造部門だけでなく、ハイテク産業や新たな小売部門へと事業を拡大することを推奨してきたことだ。結果としてここ10年のあいだに数々の新しいメディアが生まれ、新たなロシア人億万長者（あるいは従来のオリガルヒよりもさらに裕福な億万長者）のグループが出現することになった。詳しくは、『フォーブス』の億万長者リストを参照：

www.forbes.com/billionaires/list

たとえば、〈ガスプロム〉の投資部門を管理するアリシエル・ウスマノフは、ロシアの新聞社〈コムセルサント〉を買収し、鉄鋼と電気通信分野で大量の株を保有。さらには、アメリカのフェイスブック、オンライン小売業〈グルーポン〉、ソーシャルゲーム会社〈ジנגア〉の大株主でもある。ウスマノフの総資産は180億ドルにのぼり、2014年11月発表の『フォーブス』の世界億万長者ランキングで40位に入った。また、ウラジーミル・ポターニンは1990年代の「ローンズ・フォー・シェアーズ」を通して冶金分野の大量の株を手に入れると、のちにロシア最大のメディア・グループ〈プロメディア〉のオーナーになった。彼の総資産は137億ドルで『フォーブス』のランキングでは86位。アリシエル・ウスマノフのビジネスパートナーであるユーリ・ミルナーは現在、主にソーシャル・ネットワークとテクノロジー企業に投資を集中させており、〈フェイスブック〉〈グルーポン〉〈ジングア〉、ロシアの〈Mail.ru〉、中国のオンライン小売業者など、数多くの企業の株を所有している。2014年11月発表の『フォーブス』の億万長者ランキングによれば、ミルナーの総資産は18億ドルで世界1,010位。

46. ウラジーミル・プーチン——「私は生まれてこの方ずっと軍の役人 [chinovnik] であり、民間の役人でもあった……自分で本当に役人だと感じているかって？ もちろんだ。なぜなら、たとえそれが高いレベルの話だとしても、国のために奉仕していることになるからだ。そして、奉仕には特定の義務がとれない、役人はその義務を果たさなくてはいけない……その意味では、われわれはみな役人なのだ」：ウラジーミル・プーチン、テレビ番組のインタビューより：

“Geroy dnya so Svetlanoy Sorokinoy na NTV” [Hero of the day with Svetlana Sorokina on NTV], November 24, 1999, at

<http://tvoygolos.narod.ru/elita/elitatext/1999.11.24.htm>.

47. プーチンは、首相という役職の重要性を強化することを公の場ではっきりと強調してきた。たとえば2007年9月14日にソチで開催されたヴァルダイ会議の席で、彼は初めて首相に移行することを示唆し、その地位の重要性について語った。また、2008～09年、実際に首相になってからの数々の発言においても、その地位の大切さを訴えた：ヴァルダイ代会議での個人的なメモより。

48. この通訳を介したテレビ・インタビューにおいて、プーチンは率直に次のように語った。クレムリンに引き入れるかどうかは、主として個人的な関係に基づくものであり、引き入れるメンバーのなかにはKGBの元同僚も含まれている。「実際、自分のKGBの同僚の数人をクレムリンに誘った。そういった人たちは、私のスタッフとして働いている。彼らとは何年も一緒に働いてきたし、信頼もしている。それが、彼らを引き入れる主な理由だ……イデオロギーとは何の関係もない。単に、彼らの能力の高さと個人的な関係によるものだ」：

“Vladimir Putin Arises from Murky Background of KGB to Become Acting President of Russia,” *Nightline* (Friday Night Special), ABC News, March 24, 2000, accessed through Nexis.com.

49. イーゴリ・セーチンはソビエト軍の通訳としてアフリカに2度派遣された。その際、おそらく軍の諜報機関であるGRUのもとで働いていたに違いない。大学でロマンス語を専攻中の1982年から2年のあいだ、彼はモザンビークに派遣された。1985年、フランス語とポルトガル語の教員免許を取得してレニングラード大学を卒業すると、彼は再び通訳として赤軍に入り、一時アンゴラに派遣される。セーチンはKGBに属したことはなかったが、よくスパイになることを妄想していたという。だからこそ、彼が「シロヴィキ」であるという噂が流れても、セーチンはそれを放置し、時に自ら拡散しようとしたのだろう。どうやら、「シロヴィキ」はしばしば「KGB」と同義語として使われることもあるらしい：Reznik and Mokrousova, March 19, 2012.

大統領府の元側近への個人的な会話でも、セーチンの「シロヴィキとしての経歴」がよく強調された。元側近たちはよく内輪ネタのジョークでこう話していたという——セーチンはクレムリンにいるあいだのどこかの時点で、プーチンに「名誉大佐」の称号を与えられた。セーチンのGRUとのつながり、そこから発展したセーチンのスパイ説は、セーチンに関する記事でも大きく扱われている。たとえば、以下を参照：

Andrew Kramer, “In Bid for BP’s Stake of Venture, a Former Spy Becomes the Focus,” *New York Times*, July 25, 2012, at

www.nytimes.com/2012/07/25/business/global/rosneft-opens-talks-on-buying-bps-stake-in-oil-joint-venture.html.

50. プーチンはセーチンについて次のように語ったことがある。「私は彼のプロ意識と洞察力の高さをとても評価している。彼は物事の展開を終わりまで見通すことができる。いったん仕事に取りかかったら、必ず最後までやり遂げる男だ」：Gavshina, Tovkaylo, and Derbilova, May 23, 2012.

51. ここでいう「オンブズマン」は、もともとスカンジナビアで使われていた意味、つまり国家と外部の集団や利害関係者のあいだを取り持つ「代理人」や「信頼できる媒介者」という意味である。よって、現代で使われるような、特定の問題に取り組むために公の場で行動する独立した仲裁者や監視機関という意味ではない。

52. イーゴリ・シュワロフはまた、ロシアの世界貿易機関 (WTO) の加盟に向けた一連の活動の

連絡窓口としても活躍した（2012年に加盟が実現）。

53. 著者との個人的な会話のなかで、大統領府の元側近の1人は、ドミートリー・メドヴェージェフの大統領としての役目を「要人たちとお茶を一緒に飲まなければいけない人物」と表現した。2012年5月、ベルリンでのプライベートな会合の席では、ヨーロッパ各国で指導者への政治顧問を務める多くの人々が次のような見解を示した——2008～12年、首相となったウラジーミル・プーチンは、ほかの国家元首との会談を故意に避けていた。そのため、ドミートリー・メドヴェージェフが代わりにを務めるか、会合自体が開かれないこともあったという。

54. 本書の執筆段階においてロシア人の専門家や役人へのインタビューした際、決まってこの話題が出てきた。グレブ・パヴロフスキーもまた、『ガーディアン』の長尺インタビューのなかでこの点について触れ、クレムリン顧問として自らの役割にも言及した。

55. たとえば、以下の議論を参照：

Brian Whitmore, “The Unraveling: The Tandem’s Slow Death,” *The Power Vertical* (blog), RFE/RL, April 2, 2012, at

www.rferl.org/content/how_the_tandem_disintegrated/24535389.html

; and Charles Clover and Catherine Belton, “Inside the Kremlin,” *Financial Times Weekend Magazine*, May 5/6, 2012, pp. 26–31.

56. ソビエト時代、共産党は政策に関する一定の問題について、あらゆる階層にいる党员たちに積極的かつ頻繁に討論することを促した。しかし、いったん上層部が決定を下したあとは、その決定に完全に従うことを求めた。

57. 『ワシントン・ポスト』紙の元モスクワ支局長のピーター・ベイカー（Peter Baker）とスーザン・グラッサー（Susan Glasser）が以下においてこの件について論じている：“After Beslan,” the epilogue to their 2005 book, *Kremlin Rising*, on pp. 371–82.

58. 2005年、アメリカの公共放送サービス（PBS）の *Wide Angle* シリーズの1つとして、2004年9月の学校占拠事件についての幅広い分析資料に基づく秀逸なドキュメンタリーが制作された。詳しくは以下を参照：

www.pbs.org/wnet/wideangle/episodes/beslan-seige-of-school-1/introduction/246/

この占拠事件は、第1回ヴァルダイ会議の開催と同時期に発生。モスクワ郊外の大統領の別荘における会議では、4時間にわたって事件やその影響に関してプーチンと会議参加者のあいだで堂々巡りの議論が続いた。この会議では、事件にともなって発生したさまざまな出来事に対応するロシア政府官僚と参加者が直接やり取りする場も設けられた。

59. セルゲイ・ショイグはプーチン政権の主要な運営管理者の1人で、非常事態大臣を務めたあと、2012年5月にさらなる要職であるモスクワ州知事に就いた。後述するように、2012年末にショイグは国防相に就任。

60. 皮肉にも、2011年末から12年にかけてプーチンは、2004年とは正反対の政策——地方の役人に責任感をきちんと持ってもらうために、役人選挙を復活させて垂直権力構造を調整する——を正当化するためにこの定番の逸話を使った。以前のヴァルダイ会議でこの無責任な役人のエピソードを使ったことを忘れたのか、2011年11月11日、地方レベルでの直接選挙を復活させる計画についての質問に答える際、プーチンはまた同じエピソードを話した：著者の個人的なメモより。

61. 2012年6月に開かれたサンクトペテルブルク経済フォーラムでのプーチンの演説の主なテーマは「政府の有効性の大切さ」だった。演説のすべての内容を以下のサイトで読むことができる。

<http://eng.kremlin.ru/news/4056>（英語版）

<http://kremlin.ru/transcripts/15709>（ロシア語版）

<http://2012.forumspb.com/#>（動画）

62. アレクセイ・クドリノが長期にわたって財務相を務め、かつ優秀な仕事振りで高い評価を得つづけたのは、おそらくプーチンのシステムの最上部における個人的な関係と専門的な資質が融合し

たもつともわかりやすい例だろう。政府および大統領府内では、若い改革志向のテクノクラート（技術官僚）を幅広く迎え入れ、運営上の（意思決定権を持たない）主要な地位を与えるという試みが行なわれてきた。2009年2月、メドヴェージェフ大統領が政府のテクノクラート化の推進を宣言すると、クレムリンは将来有望な管理者候補「*zlotaya sotnya*（ゾロタヤ・ソトニャ／金の卵100人）」を発表した。このリストには、連邦政府から36人、地方自治体から23人、一般企業から31人、科学・教育・非営利団体から10人が管理者候補として選ばれた。クレムリンは、将来的な政府の要職への候補者を選ぶ際にこのリストを活用することを宣言。現政府内のテクノクラートや金の卵100人には以下のような人々が含まれている。ロシア中央銀行総裁のエリヴィラ・ナビウリナ——彼女はモスクワ大学経済学部を卒業し、のちに経済開発大臣を務めた。副首相のアルカディー・ドヴォルコーヴィチ——彼はモスクワ大学とモスクワの新経済スクールを卒業し、さらにアメリカのデューク大学でも経済を学んだ。ロシア中央銀行の第一副総裁クセニア・ユダエワ——彼女はロシア貯蓄銀行（スベルバンク）の元主任エコノミストで、のちに政府の主要な経済タスクフォースの責任者となった。その後、大統領府のエキスパート部門のトップに就任し、G20のシェルパも務めた。かつて、ユダエワはマサチューセッツ工科大学で経済の博士号を取得したのち、カーネギー国際平和基金モスクワセンターのシニア・アナリストをしばらく務めていた。クレムリンが発表した「*Kadrovyy rezerv*（幹部候補）」へのリンク：

<http://archive.kremlin.ru/articles/kadry.shtml>.

2000年代に政府に招かれた優秀なテクノクラートと、主としてプーチンに近い関係だからという理由で権力中枢の要職に就く側近たち——この2つの集団の差については、ロシアの統治や経済発展に関する討論のなかで繰り返し問題視されてきた。たとえば2012年7月、ワシントンDCで著者らが行なった国際金融機関幹部へのインタビューのなかでも、この問題がたびたび提起された。

63. 2012年5月の社説のなかで、『ヴェドモスチ』紙はこのパラレルワールドという機能の複雑さと、ロシアの国家機構のなかに存在する幻の人々 (*lyudiprizraki*) について言及している。幻の人々とは、無名で、一般の社会で正直に一生懸命働き、アイデアを出し、報告書を書く人々である。そんな彼らは、本当の決定を下すのは自分以外の別の人間だと知っているのだ：

“Tsar’klyuchnik” [Tsar-steward], *Vedomosti*, May 21, 2012.

64. プーチンの新たな「取り巻きオリガルヒ」については数多くの記事が発表されている。たとえば、以下を参照：

Andrew E. Kramer and David M. Herszenhorn, “Midas Touch in St. Petersburg: Friends of Putin Glow Brightly,” *New York Times*, March 1, 2012, at

www.nytimes.com/2012/03/02/world/europe/ties-to-vladimir-putin-generate-fabulous-wealth-for-a-select-few-in-russia.html

; and Catherine Belton and Charles Clover, “Putin’s People,” *Financial Times*, May 30, 2012, at www.ft.com/cms/s/0/8d0ed5ce-aa64-11e1-899d-00144feabdc0.html#axzz26w16zruc.

65. 若いころにレニングラードの柔道チームでプーチンとチームメイトだったアルカディ・ローテンベルクは、2012年7月号の『フォーブス』ロシア版で驚くほど率直にインタビューに応え、同じ点を強調した。1990年代以降、ローテンベルクは銀行や建設、加えてプーチンが重要視するエネルギーのパイプラインと輸送部門を専門とする実業家として財をなした。インタビューのなかで、『フォーブス』の記者はこう非難した——ローテンベルクは特権的な地位を利用し、プーチンとの密接な関係にあるという理由だけで儲かる事業を受注している。するとローテンベルクは異議を唱え、その分野で仕事をまっとうし、優れた成果を出すのは並大抵のことではないと主張した。「どれも責任重大で難しい大型プロジェクトであり、きわめてタイトなスケジュールで遂行しなければいけない。こういったことをこの国でできる人はほとんどいない……友人たちとは違い、私は失敗することが許されない……ウラジーミル・ウラジーミロヴィチ [プーチン] は私を守ってはくれない。もし私がビジネスではなく、何か別のことにうつつを抜かしていたら、プーチンは『彼にちよっか

いを出すな。彼はいいやつだ!』などとは言ってくれない。もし悪いことをして生計を立てることのできる人がいるとするなら、それは私には許容しがたいことだ」。言い換えれば、「取り巻きオリガルヒ」のシステムの機能についてのローテンブルクとプーチンの考えでは、仕事がうまく完了するかぎり、友達に儲かる契約を優先的にまわすのは「腐敗」ではないということになる。彼らにとっての「腐敗」とは、仕事（プーチンが求める特定の仕事）をやり遂げることをなおざりにして、自分たちの地位、特権、コネを個人の利益のために悪用することなのである。ウラジーミル・プーチンにしてみれば、友人である取り巻きオリガルヒに仕事を与えるのは、このきわめて決定的なポイントに関する共通の理解があるからである。ローテンブルクもインタビューで「もし私が与えられた特権を悪用すれば、プーチンは私を守ってはくれないだろう」と明言した：

Aleksandr Levinskiy, “Yesli by menya ne piarili kak druga Putina, tak i biznes byl by pokhuzhe” [If I had not been hyped as a friend of Putin’s, my business would have fared a bit worse],

Forbes Russia, July 23, 2012, at

www.forbes.ru/sobytiya/lyudi/84415-esli-menya-ne-piarili-kak-druga-putinatak-i-biznes-byi-po-huzhe.

記事のサブタイトルは、「スポーツマンで協力的なチームメンバーだったアルカディ・ローテンブルクが、どのようにして国家や国営企業のための巨大請負企業の社長になったのか」

66. 『プーチン、自らを語る』 pp. 181–83 [邦訳は246~248ページ] のなかでプーチンは、大統領に初就任した当時の信頼できる近しい人物としてドミートリー・メドヴェージェフ、アレクセイ・クドリン、イーゴリ・セーチンのほかに、さらに2人の名前を挙げた。1人目は当時の国防相で、KGBのレニングラード局に勤務した経験を持つセルゲイ・イワノフ。2人目は、1999年にプーチンの跡を継いでKGB/FSBの長官に就任したニコライ・パトルシェフ。全員がレニングラード/サンクトペテルブルクに関係する人々である：Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000).

67. 引用は以下より：Simon Shuster, “Vladimir Putin’s Billionaire Boys Judo Club,” *Time*, March 1, 2011.

68. プーチンはたびたびミハイル・ホドルコフスキーについて言及し、彼が2000年にオリガルヒと最初に交わした約束を破り、政権批判を始めたと非難した。ホドルコフスキーの側近の一部は、それが2003年の脱税容疑での逮捕につながったと見ている：Gessen (2012), pp. 242–43; and Coll (2012), pp. 264–66, p. 271, and p. 275. また、2012年6月にはアナトリー・サブチャークの娘クセーニア・サブチャークも逮捕された（詳しくは第10章の「外柔内剛」の項を参照）。この逮捕は、彼女が反体制運動に参加してウラジーミル・プーチンを「裏切った」ことへの報復措置だったと多くの専門家は見ている。たとえば、以下を参照：

Brian Whitmore, “Ksenia and Vladimir,” *The Power Vertical* (blog), RFE/RL, June 18, 2012, at www.rferl.org/content/ksenia-anatolevna-and-vladimir-vladimirovich/24618330.html.

69. たとえば、以下を参照：

Catherine Belton, “Analysis: A Realm Fit for a Tsar,” *Financial Times*, November 30, 2011, at www.ft.com/intl/cms/s/0/69d1db86-1aa6-11e1-ae14-00144feabdc0.html#axzz26w16zruc

; and “Putin’s Watch Collection Dwarfs His Declared Income,” *Moscow Times*, June 8, 2012. この記事と関連ビデオ映像は以下で閲覧可能：

www.themoscowtimes.com/news/article/putins-watch-collection-dwarfs-his-declared-income/460061.html.

この件は、Masha Gessen(2012)の“Insatiable Greed,” pp. 227–60 [邦訳の「十章 あくなき強欲」(279~319ページ)] の主題。また、ロシア国内の野党のメンバーたちもこの点に注目し、数々の報告書を発表してきた。たとえば、以下などがある：

Boris Nemtsov and Leonid Martiniuk, “Zhizn’ raba na galerakh: dvortsy, yakhty, avtomobili, samolyoty and drugiye aksessuary” [Life of a galley slave: palaces, yachts, automobiles,

airplanes and other accessories], August 2012, on Boris Nemtsov's website at www.nemtsov.ru/?id=718577.

70. 1996年にプーチンが初めてモスクワに異動になったとき、彼はクレムリンの大統領府資産管理部門の仕事に就いた。これは、政府のシステム内の人々の特権や特典を集中的に管理する機関で、政府官僚への別荘や公用車の割り当て、民間および政府所有の飛行機の貸し出し、大統領府用の医療施設使用の優先権などを監督している。最初にクレムリンのこの部門で働いたことによって、プーチンは「誰が何にアクセスできるのか」という図式をしっかりと頭のなかに入れることができたのかもしれない。

71. ヴィクトル・ズブコフの発言は以下より：

Yelena Vladimirova, "Gryaznyye den'gi" [Dirty money], *Trud*, September 14, 2002, at www.trud.ru/issue/article.php?id=200209141640203.

72. ガспロムに関して書かれたPanyushkin, Zygar, and Reznik (2008)では、ヤクブ・ゴルドフスキーの一件に言及されている。ゴルドフスキーは1990年代の「ローンズ・フォー・シェアーズ」を通して石油化学最大手〈シブール (SIBUR)〉の株式を取得し、経営者の1人となった。2001年、〈ガспロム〉が〈シブール〉を買収すると、その後にゴルドフスキーは逮捕される。本の記述によると、彼は持ち株を清算する取引を提案されたが、それを拒否したという。なぜ好条件で手を引かなかったのかをのちに尋ねられると、ゴルドフスキーはこう答えた。自分と子供たちのために築いた会社を手放すことも、〈ガспロム〉に売ることもしたくなかった、と。2011年12月、ゴルドフスキーは——おそらく新しい取引のもとに——モスクワに本社を置く巨大コングロマリット

〈AFKシステム (Sistema)〉傘下の新組織〈ユナイテッド・ペトロケミカル・カンパニー〉の重要な経営陣の1人として復活を遂げる。〈システム〉の会長でオリガルヒのウラジーミル・イエフトゥシェンコフは、ロシア随一の大富豪である。ユーリ・ルシコフがモスクワ市長を長く務めたあいだ、イエフトゥシェンコフはルシコフ本人とその妻で実業家のエレナ・バトゥリナにもっとも密接な側近の1人として活躍。2012年4月、イエフトゥシェンコフは市長を解任されたルシコフに対し、〈ユナイテッド・ペトロケミカル・カンパニー〉幹部の仕事をおファーした。そのときに彼は、「ロシア政府の上層部は反対していない」と強調してルシコフを安心させたという。この一件にまつわる複雑な詳細についてはすべて以下で説明されている：

"Luzhkov voshel v sovet direktorov Obedinennoy neftekhimicheskoy kompanii" [Luzhkov enters the board of directors of the United petrochemical company], *Vedomosti*, June 26, 2012, at

www.vedomosti.ru/companies/news/2179270/luzhkov_vojdet_v_sovet_direktorov_obedinennoj.

また、〈シブール〉のウェブサイトによると、同社はプーチン周辺の側近と良好な関係を取り戻したようだ。現在では、ゲンナジー・ティムチェンコと彼のビジネスパートナーであるレオニード・ミケルソンが一部の株を所有しているという（2人は〈ノヴァテク〉も共同所有）：

<http://sibur.com/about/controls/directors/>.

〈システム〉のイエフトゥシェンコフは、（表向きには）石油会社〈バスネフチ〉との所有権争いの末に、2014年にトラブルに巻き込まれた。以下の記事、あるいはその後の数多くのメディアによる報道を参照：

Courtney Weaver, "Russian Oligarch Yevtushenkov Placed under House Arrest," *Financial Times*, September 17, 2014.

73. このシステムの枠組みと仕組みについては以下が詳しい：

Ledeneva (2006); Lucas (2008); and Monaghan (2012), pp. 1–16.

またマーク・ガリオッティ (Mark Galeotti) は、ロシアの政治的ツールとしての腐敗の根深い伝統について以下で分析している：

"Who's the Boss: Us or the Law? The Corrupt Art of Governing Russia," in Lovell, Ledeneva,

and Rogatchev (2000).

74. キャスリングとはチェスで2つのコマを同時に動かすことのできる唯一の手で、キングとルークの位置取りを交換するもの。

75. 実際にその場でプーチンの話を聞いた大統領府の元側近たちから、著者らが聞いたエピソード。プーチンは2007年と08年のヴァルダイ会議でも似たようなことを話した。

76. 視聴者参加型番組の書き起こし原稿は以下で閲覧可能：

<http://government.ru/docs/17409/>

77. ジャーナリスト、エレナ・トレグボワによる2000年のインタビューのなかで、ウラジスラフ・スルコフが述べたもの：第8章の「オリガルヒたちのジレンマ：プーチンの出した解決策」の項を参照。

78. Tregubova (2003), p. 147. プーチンのナズドラチェンコに対する処遇の分析は以下より：
Gaddy and Ickes (2011a).

79. Albats and Yermolin (2011)を参照。アリバツとイェルモリンは、ロシアの政界やビジネス界の新顔の多くは権力中枢でおなじみの人間の子供か姻戚であるため、初めからプーチンと知り合いか、すでに何らかのつながりを持った人々だと主張する。

80. 2012年5月にプーチンは、G-8の会合に参加するために計画されていたアメリカへの訪問をキャンセル。その理由は、新しい内閣のメンバーを個人的に選ぶための種々の決定事項に専念するためというものだった：

Josh Rogin, "Putin Not Coming to the U.S. for G-8," *Foreign Policy*, May 9, 2012, at http://thecable.foreignpolicy.com/posts/2012/05/09/putin_not_coming_to_us_for_g_8.

81. 以下を参照：

Fiona Hill, "Dinner with Putin: Musings on the Politics of Modernization in Russia," *Brookings Foreign Policy Trip Reports*, No. 18, October 2010, at www.brookings.edu/research/2010/10_russia-putin-hill.aspx.

(www.brookings.edu/research/dinner-with-putin-musings-on-the-politics-of-modernization-in-russia/)

82. 2009年、ラムザン・カディロフはロシアの新聞に次のように語ったという。「私はウラジーミル・プーチンの完全なる部下である。決してプーチンを裏切ったり、失望させたりはしない。全能の神にかけて、彼のために20回死んでもいいと誓おう」：Yaffa (2012)より。

83. グレブ・パヴロフスキーのインタビューより：The *Guardian*, January 24, 2012.

84. Roxburgh (2012). モスクワでのロックスバラの役割についてはpp. xi–xiiiを参照。また、本書の執筆のためのリサーチの一環として、ロックスバラやケッチャム社のペスコフの同僚たちにもインタビュー取材した。

85. Roxburgh (2012), pp. 183–91. また、ロックスバラはpp. 193–95において、ドミトリー・ペスコフが取り仕切るヴァルダイ会議が2004年に開催に至った経緯についても言及している。開催の目的は、外国人ジャーナリストや専門家からの要求が高かった、プーチン自身やそのほかのロシア政府高官に直接話を聞く機会を提供することだった。クレムリンが外国人専門家グループの各個人に与えるのは、プーチンに直接質問し、答えを直接プーチンから得る機会だ。そこでペスコフのチームが外国人ジャーナリストと専門家に望むのは、その答えと全体的な経験から得た好意的な印象を、記事や放送のなかで世界の幅広い人々に伝達することである。2007年には、プーチン自身がこう率直に語った。「西側諸国に根強く存在するステレオタイプを打破するために、君たちが学んだことを読者や視聴者に伝えてくれると嬉しいかぎりだ」：このプーチンの発言はRoxburgh (2012), p. 195より引用。

86. 以下を参照：“Obama Tells Russia’s Medvedev More Flexibility after Election,” Reuters, March 26, 2012, at

www.reuters.com/article/us-nuclear-summit-obama-medvedev-idUSBRE82P0J120120326

87. 「[情報を] ウラジーミルに伝えておく」という文言はとりわけ話題となり、この一件は西側メディアの各メディアでおもしろおかしく報道された。たとえば、以下を参照：

Jon Stewart, “The Borscht Whisperer” episode on *The Daily Show* on Comedy Central, March 28, 2012, at

www.thedailyshow.com/watch/wed-march-28-2012/march-28-2012---pt--3.

88. Josh Gerstein, “Barack Obama meets with Vladimir Putin,” *Politico*, July 7, 2009, at

www.politico.com/news/stories/0709/24621.html.

プーチンとオバマが会ったのは、2012年6月にメキシコのロスカボスで開かれたG20のあいだの短い時間だけだった。プーチンはその直前の5月、アメリカで開催されたG-8サミットで予定されていたオバマとの会談をキャンセルしていた。

89. 2012年5月にベルリンにて、私たち著者は、ヨーロッパ各国の首脳の上席顧問に対してこの一件に関するインタビュー取材を行なった。また2009～12年のあいだにも、欧米の役人たちと似たような議論を交わした。2012年5月にプーチンが大統領職に戻ったとき、世界のリーダーたちは再び関係をイチから築き直さなくてはならないと感じていた。多くのリーダーたちが、プーチンが初めて大統領になった2000年のときよりも、今回のほうがプーチンの本質や感情が見えてこないと感じていたという。ジョシュア・ヤッフア (Joshua Yaffa) は、『フォーリン・アフェアーズ』誌に掲載された2012年のマーシャ・ゲッセンとアンガス・ロックスバラの著書への批評のなかで、プーチンのことを「ミステリアスな人物」「決して知ることのできない男」と表現した：Yaffa (2012).

90. 2010年2月16日、ブルッキングス研究所で行なわれた、ロシアの専門家パーヴェル・バエフのプレゼンテーションより。

91. 欧米各国の役人との2012年のインタビューより。彼らが「伝達役」として挙げたのは、以下のような人々だった——安全保障会議書記ニコライ・パトルシェフ、大統領補佐官セルゲイ・プリホチコ、副首相で大統領府長官セルゲイ・イワノフ、副首相兼内閣官房長官ウラジスラフ・スルコフ。

92. たとえば、2012年6月に開催されたサンクトペテルブルク経済フォーラムでは、プーチンはロシア国内外の石油会社の幹部と個別に会談し、その事実が大々的に報道された。この会談については大統領府のウェブサイト参照：

<http://news.kremlin.ru/news/15716>.

『フォーブス』誌のクリストファー・ヘルマンは次のように主張する。「世界最大の石油会社トップ25社のランキングを精査し、石油メジャー各社に誰が最大の影響力と支配力を誇示しているかを考えたとき、1つ事実がはっきり浮かび上がってくる。誰より大きな権限を持ち、業界を牛耳り、より多くの取引を成立させているのは、石油産業のトップたちではなく、ロシア大統領ウラジーミル・プーチンその人である」：

“The World’s 25 Biggest Oil Companies,” *Forbes* [online], July 16, 2012, at

www.forbes.com/sites/christopherhelman/2012/07/16/the-worlds-25-biggest-oil-companies/.

93. 以下を参照：

“Alcoa Inc: obrashcheniya k investitsionnomu ombudsmenu Shuvalovu pomogli reshit’ problemy kompanii” [Alcoa Inc: turning to the investment ombudsman Shuvalov helped to resolve problems for the company], *Vedomosti*, June 23, 2012, at

www.vedomosti.ru/politics/news/2091862/alcoa_inc obraschalsya_s_prosbami_k_investicionnomu#ixzz1yzw5GMM8.

94. 同上。2012年6月のサンクトペテルブルク経済フォーラムでは、〈全ロシア公共組織デロヴァーヤ・ロシア〉の元代表だったボリス・チトフもまた、プーチン大統領によって正式なビジネス・オンブズマンに指名された。チトフの役割は、法律関連の問題が発生して訴訟になった際に、会社や事業主たちを支援するというものだった。その当時、プーチンはこの裁判関連の問題が大きくな

りつつあると認識していた。チトフを任命するプーチンの演説の文言はクレムリンのウェブサイト
で閲覧可能：

<http://news.kremlin.ru/news/15709>.

95. マティアス・ヴァルニヒは東ドイツの秘密警察の元職員で、プーチンがドレスデンに駐在中
の1980年代、2人は初めて出会ったという一部情報もある。ヴァルニヒは個人的にこれを否定した。
しかし、1990年代に彼がサンクトペテルブルクのドレスナー銀行に勤務し、プーチンが対外関係委
員会議長だったときに2人が懇意になり、友情を深めたことは否定しなかった：2009年6月、ワシ
ントンDCでのマティアス・ヴァルニヒへのインタビュー取材より。以下も参照：

Dirk Banse and others, “Circles of Power: Putin’s Secret Friendship with Ex-Stasi Officer,” *The
Guardian*, August 13, 2014, at

www.theguardian.com/world/2014/aug/13/russia-putin-german-right-hand-man-matthias-war-nig.

96. 2012年、欧米エネルギー企業の幹部数人へのインタビュー取材より。2012年8月、『フォーブ
ス』ロシア版は、ヴァルニヒとプーチンの関係とロシアのエネルギー部門における彼の役割を分析
した長尺記事を掲載した：

Aleksandr Levinskiy, Irina Malkova, and Valeriy Igumenov, “Kak Matthias Warnig stal samym
nadezhnym ‘ekonomistom’ Putina” [How Matthias Warnig became the most reliable ‘economist’
for Putin], *Forbes.ru*, August 28, 2012, at

www.forbes.ru/sobytiya/vlast/103069-kak-chekist-iz-gdr-stal-samym-nadezhnym-ekonomistom-putina-rassledovanie-forbe.

97. 伝達システム内のイーゴリ・セーチンの立場は——クレムリンの廊下から繰り返し聞こえてく
る（時に疑わしい）逸話が強調するように——イーゴリ・シュワロフの立場をはるかに上回るもの
である。セーチンとシュワロフのファーストネームと父称はまったく同じ「イーゴリ・イワノヴィ
ッチ」で、ビジネスの場で言及・呼称するときにこの組み合わせが使われる。さまざまな対話者か
ら、私たち著者は次のような逸話を聞いた。プーチンが側近の1人にイーゴリ・イワノヴィッチに
話があるから呼んでくるように伝える。側近が「どっちのイーゴリ・イワノヴィッチですか (*Kakoy
Igor’ Ivanovich?*) 」と尋ねると、プーチンは「本物のほうだ! (*Nastoyashchiy!*) 」と答える。こ
の瞬間、側近だけでなく全員がすぐに、シュワロフではなくイーゴリ・イワノヴィッチ・セーチ
ンのことだと理解する。

98. Kirill Mel’nikov, “Igor’ Sechin nashel al’ternativu pravitel’stvu. On sozdayet obstvennyy
Neftyanoy klub” [Igor Sechin has found an alternative to the government. He’s creating his own
“oil club”], *Vedomosti*, June 8, 2012, at

www.vedomosti.ru/companies/news/1833019/sechin_na_prieme ,

www.vedomosti.ru/newspaper/article/282241/sechin_na_prieme.

99. 以下を参照：

Clifford Gaddy, “Pudrin Lives,” Brookings Institution, September 11, 2011, at

www.brookings.edu/research/opinions/2011/09/30-russia-gaddy.

100. 2011年12月～2012年4月、クドリンは、一連のインタビューやよりプライベートな討論のな
かでこの可能性について示唆した：

Ekho Moskovy, December 13, 2011, at

www.echo.msk.ru/programs/dozor/838597-echo/

；（また、2012年4月19日のワシントンDCで行なわれた、クドリンのプレゼンテーションにおける
著者のメモより）

101. Douglas Busvine, “Russia’s Kudrin Stays in Mix with New Task Force,” Reuters, April 5,
2012, at

www.reuters.com/article/2012/04/05/russia-kudrin-idUSL6E8F515C20120405.

2012年3～4月のブルッキングス研究所でのプレゼンテーションにおいて、マーシャ・ゲッセン、マリア・リップマン、オレグ・カシンの3人全員が、アレクセイ・クドリンのロシア国内の抗議・反対活動への積極的な対応について言及した。

第Ⅱ部 作員、始動

第10章 ステークホルダーたちの反乱

1. 以下のトップ記事も参照：

“Putin’s Russia. Call Back Yesterday,” *The Economist*, March 3–9, 2012, at www.economist.com/node/21548949.

2. 〈統一ロシア〉の党大会の席でドミートリー・メドヴェージェフが初めてプーチンの復帰を発表すると、拍手喝采が沸き起こった：

Ellen Barry, “Putin Once More Moves to Assume Top Job in Russia,” *New York Times*, September 24, 2011, at

www.nytimes.com/2011/09/25/world/europe/medvedev-says-putin-will-seek-russian-presidency-in-2012.html?pagewanted=all.

2011年9～10月の世論調査では、この発表に関して国民が大きな関心を示す傾向は見られなかった。しかし、それまでの数値と比較すると、プーチンの支持率は下落。2011年9月のプーチン復帰宣言直後、ロシアを代表する世論調査機関〈レヴァダ・センター〉が発表した調査結果を参照：

“Vladimir Putin i ego tretiy srok” [Vladimir Putin and his third term], October 7, 2011, Levada Center, at

www.levada.ru/07-10-2011/vladimir-putin-i-ego-tretii-srok

〈レヴァダ・センター〉は、プーチンとメドヴェージェフの支持率の統計を取りつづけている：

www.levada.ru/indeksy

3. Michael Idov, “The New Decembrists,” *The New Yorker*, January 22, 2012. 記事のタイトルは1825年にロシアで起きた「デカブリストの乱」をもじったもの。

4. ロシア人ジャーナリストのオレグ・カシンは、2012年3月29日のブルッキングス研究所での会合の席で似たような発言をした。ドミートリー・メドヴェージェフがロシアを変革する姿勢を見せたとき、多くの人々がそれを信じた、とカシンは指摘した。メドヴェージェフがウラジーミル・プーチンの側近かつ親友であることは誰もが承知していたが、それでも彼はロシア政治の新世代の代表者だと見られていた。特に、KGBやその他の諜報機関とのしがらみがないことが大きく評価された。2011年9月にプーチンの大統領復帰が発表されたとき、カシンは残念そうにこう語った。「これで、私たちはプーチンから逃げられないことがはっきりした。変化など何も起きない……私は、大人になってからの人生をずっとプーチンの力の下で生きることになる。彼が権力の座に就いたとき、私は19歳だった。今は32歳。彼が退任するとき、私は44歳だ」：著者の個人的なメモより。政治アナリストのミハイル・ドミトリエフも、より上の世代の気持ちを代弁して似たような発言をした。「45歳以上の人々は、自らの勤労生活は同じ男の支配下のもとで終える運命にある、と頭の中かで考えているに違いない」：

Mikhail Dmitriyev, “Voshli v stadiyu samorazrusheniya [We have entered a stage of self-destruction], *Vedomosti*, October 20, 2011, at

www.vedomosti.ru/opinion/news/1397603/kradenoe_solnce#ixzz1bInfOSEM.

5. 〈レヴァダ・センター〉による世論調査の結果はすべて公式ウェブサイトより：

www.levada.ru/

6. 2011年5月にこの市民団体が設立された経緯については、第4章の議論を参照。

7. Will Englund, “Putin Booed by Russian Fight Fans, in Rare Public Show of Disapproval,” *Washington Post*, November 21, 2011, at

www.washingtonpost.com/world/putin-booed-by-russian-fight-fans-in-rare-public-show-of-disapproval/2011/11/21/gIQAxUOrhN_story.html

; Ellen Barry, “In Russia, Evidence of Misstep by Putin,” *New York Times*, November 27, 2011, at

www.nytimes.com/2011/11/28/world/europe/vladimir-putin-of-russia-begins-presidential-bid.html.

著者は、この時期にクレムリンと協力関係にあったPR会社〈ケッチャム〉のスタッフたちに個人的にインタビュー取材を行なった。彼らは、大統領選挙は常に厳しい戦いだと言った。いかなる政治的背景があろうとも、候補者を三選に導くのは概して難しいことだ、と。

8. ある新聞記事によると、2012年の大統領選挙でプーチン陣営は、2008年のドミトリー・メドヴェージェフ陣営と比べて、1票あたり約10倍の選挙費用を使ったという。その費用のほとんどは、メディア戦略、選挙ポスター、そのほかの宣伝材料のために使われた：

Yevgeniya Korytina and Tatyana Kosobokova, “Putinu golosa rossiyan oboshlis’ v 10 raz dorozhe, chem Medvedevu” [Russians’ votes cost Putin ten times more than Medvedev], *RBK Daily*, No. 43, March 12, 2012, at

www.rbcdaily.ru/2012/03/12/focus/562949983220042.

9. プーチンの対抗馬だった4人のうち3人——共産党党首ゲンナジー・ジュガーノフ、〈自由民主党〉党首ウラジーミル・ジリノフスキー、〈公正ロシア〉のセルゲイ・ミロノフ——は、ロシアの政治シーンではお馴染みの面々であり、大統領選への出馬はもはや“お約束”だった。今回の新顔はオリガルヒのミハイル・プロホロフだった。正式な得票率は次のとおり：プーチンが63.60%、ジュガーノフが17.18%、プロホロフが7.98%、ジリノフスキーが6.22%、ミロノフが3.85%：

Tsentral’naya izbiratel’naya komissiya Rossiyskoy Federatsii [Central Election Commission of the Russian Federation], “Dannye o predvaritel’nikh itogakh golosovaniya vybory Prezidenta Rossiyskoy Federatsii” [Information on the preliminary voting results from the election for president of the Russian Federation], at

www.vybory.izbirkom.ru.

10. 都市部の得票率は、中央選挙委員会の以下のウェブサイトに記載された区域ごとの結果から著者が計算したもの：www.vybory.izbirkom.ru。ロシア国内の25の大都市のうち9都市において、プーチンの得票率は53%を下回った——モスクワ、ウラジーミル、オムスク、イルクーツク、ヴォロネジ、ノヴォシビルスク、ヤロスラヴリ、ウリヤノフスク、バルナウル。

11. メドヴェージェフは、2012年4月26日の大統領としての実質的な辞任演説のなかで、抗議デモ参加者に共感するかのような発言をした。「ただ思い浮かんだままに政策を実行するような1人の人間ではなく、複数の人間で国の運命と政治プロセスを決めるべきである」：

Marc Bennetts, “One Man Rule Bad for Russia—Medvedev (Wrap),” *RIA Novosti*, April 26, 2012, at

<http://en.rian.ru/russia/20120426/173070543.html>.

12. 2012年4月、ワシントンDCでのアレクセイ・クドリンのプレゼンテーションより。また、2012年5月にロンドンで行なわれた、クレムリンの経済タスクフォースのメンバー、およびクレムリンと関係が深い有名なシンクタンクの代表者と著者らの議論より。

13. 以下を参照：

Natalya Galimova, “Vladimir Ryzhkov: ‘Posle vyborov budet massovoe begstvo lyudey. Sakharova i Bolotnaya uyedyt’” [Vladimir Ryzhkov: ‘People will flee en masse after the elections. Those from Sakharov and Bolotnaya will leave’], *Moskovskiy komsomolets*, February 29, 2012, at

www.mk.ru/politics/interview/2012/02/29/676987-vladimir-ryzhkov-posle-vyiborov-budet-massovoe-begstvo-lyudey-saharova-i-bolotnaya-uedut.html.

サハロフ (Sakharov) とボロトナヤ (Bolotnaya) は抗議デモが行われたモスクワの地域名。

14. 同上。

15. 〈レヴァダ・センター〉は、抗議デモ参加者の年齢、学歴、職歴、政治観についての分析の概要を発表した：

www.levada.ru/13-02-2012/opros-na-mitinge-4-fevralya.

2011年12月と2012年2月の抗議活動参加者の構成のさらに詳しい分析については、以下を参照：

Boris Dubin, “Yakimanka i Bolotnaya 2.0: Teper’ my znayem kto vse eti lyudi!” [Yakimanka and Bolotnaya 2.0: Now we know who all these people are!], *Novaya gazeta*, February 10, 2012, at

www.novayagazeta.ru/society/50949.html.

ヤキマンカ (Yakimanka) とボロトナヤ (Bolotnaya) はもっとも大規模な抗議活動が起きたモスクワ内の地域名。

16. 以下を参照：

“Putin Warns ‘Mistakes’ Could Bring Back ‘90s Woes,” RFE/RL, October 17, 2011, at

www.rferl.org/content/putin_mistakes_could_bring_back_1990s_woes/24362626.html.

2012年の大統領選のためのキャンペーンの一環としてプーチンが発表した9つの記事のなかには、1990年代、2000年代初頭、ソ連崩壊、ソビエト時代末期への言及が52回も登場。外交政策に関する最後の記事のみ、過去への言及がない。一方、最初の記事には14回も過去と現在を対比する表現が出てくる。

17. 以下を参照：

Guy Faulconbridge and Gleb Bryanski, “Putin Invokes History’s Lions for Return to the Kremlin,” Reuters, November 1, 2011, at

www.reuters.com/article/2011/11/01/ussrussia-putin-heroes-idUSTRE7A024W20111101.

18. たとえば、ロシア人ジャーナリスト、ミハイル・フィッシュマン (Mikhail Fishman) の記事を参照：

“Prokisshaya” [Turning sour], *Vedomosti*, June 29, 2012, accessed through Eastview.

この記事のなかでフィッシュマンは、プーチンのストルイピンへの度重なる言及を厳しく非難。「ストルイピンは英雄的な改革者ではなく、単に有名な名前、歴史の教科書に出てくるひげ面の男ではない……伝統はビール宣伝には有効だとしても、政治のためのツールにはならない。ロシアでもっとも優れた君主制主義者は今も昔もニキータ・ミハルコフである……なぜなら、彼が作るのは映画であり、政治番組ではないと誰もが理解しているからだ……ロシアの帝政には豊かな歴史があると看做しても、未来に有益なものは1つもない」

19. プーチンとドストロイカについてのこれまでの議論は、第4章と6章を参照。興味深いことに、2012年の選挙活動用の記事のなかでプーチンはいちどもこの言葉を使わなかった。

20. Andrew Osborne, “Vladimir Putin Accuses Hillary Clinton of Inciting Protests,” *Daily Telegraph*, December 8, 2011.

デモ活動の様子を写した写真は、ロシアのブログサイトlivejournal.ruの以下のページで閲覧可能：
<http://toma-gramma.livejournal.com/783603.html>

21. 「率直に言って、彼らが胸に付けているものをテレビで観たとき、見てはいけぬものを見た

ような気がしたんだ。こう言うのも何だが、エイズ撲滅のためのコンドームを象ったおかしなシンボルが何かかな、と。わざわざ封を開けて胸に付けたのかと不思議に思っていたが、よくよく見てみると、コンドームじゃないことがわかった」：

“A Conversation with Vladimir Putin: Continuation,” December 15, 2011, at

<http://archive.premier.gov.ru/eng/events/news/17409/>.

<http://archive.premier.gov.ru/events/news/17409/>. (ロシア語版)

22. 以下を参照：

“Predsedatel' Pravitel'stva Rossiyskoy Federatsii V.V. Putin vystupil v Gosudarstvennoy Dume s otchyotom o deyatelnosti Pravitel'stva Rossiyskoy Federatsii za 2011 god” [Chairman of the Government of the Russian Federation V.V. Putin presented a report to the State Duma on the activity of the Government of the Russian Federation for the year 2011], April 11, 2012, at

<http://archive.premier.gov.ru/events/news/18671/>

23. クレムリンの補佐官ウラジスラフ・スルコフは、抗議参加者にマイノリティのレッテルを張ることはより慎重で、『イズヴェスチヤ』紙との2011年12月のインタビューでも自身の考えをはっきりと語った。インタビューのなかで、当時ロシア大統領府第一副長官だったスルコフは、今やロシアは変わり、その政治の手法も変わったと強調した。「われわれはすでに未来にいる。そして、未来は必ずしも平和な場所とはいえない…… [デモ参加者]はこの社会のもっとも優れた人々かもしれない。もっと正確に言えば、もっとも生産的な人々かもしれない。そんな彼らには、敬意を払う必要がある……反対デモに参加した人々をマイノリティだと切り捨てることは簡単だ。しかしながら、マイノリティの力を甘く見てはいけない……明日のリーダーは、このマイノリティから生まれるかもしれないのだから」：

Elena Shishkunova, “Vladislav Surkov: Sistema uzhe izmenilas” [Vladislav Surkov: The system has already changed], *Izvestiya*, December 22, 2011, at

<http://izvestia.ru/news/510564>.

結局、ウラジスラフ・スルコフは2012年のプーチン復帰前に大統領府の職を解任された（グレブ・パヴロフスキーはさまざまなインタビューのなかで、スルコフが前述のような気持ちを表明したために解任された、と見解を示した）。しかし、スルコフが大統領府に戻るのはいささか先の話ではなかった。2011年12月～13年5月に政府の副首相を務めたのち、2013年9月にスルコフは再び大統領府に戻り、アブハジア、南オセチア、ウクライナ問題を担当する補佐官に就任した。

24. 以下を参照：

Vladimir Putin, “Stroitel'stvo spravedlivosti. Sotsial'naya politika dlya Rossii” [The construction of justice. Social policy for Russia], *Komsomolskaya pravda*, February 13, 2012, at

<http://kp.ru/daily/3759/2807793/>.

25. Florida (2002), p. 249.

26. 2012年7月、ロシアの黒海地域で未曾有の大洪水が発生。地方自治体は迫りくる大災害に対して十分な警告を出すこともできず、救助活動も後手後手に回り、再び住民たちのあいだで怒りが沸き起こった。すぐさまプーチンはもっとも甚大な被害を受けたクルイムスクに飛び、数人の地方役人をその場で首にした。しかし住民にとっては、プーチンのチームによる努力は、2010年夏の大規模な山火事のとくと同じように陳腐なものでしかなかった。クルスクの潜水艦沈没事故やベスランの学校占拠事件後も繰り返される自然災害と危機、そしてその対応——これは、国民を保護するためのロシア国家の能力の低さを露呈するものだった。さらに、プーチンの垂直権力構造においては、最上部“以外”の場所で起きるあらゆる事柄について、迅速かつ決定的な対応をすることができないことはあまりに明らかだった。何か対処する必要があるれば、プーチンがそこについて対処しなければ、問題は決して解決しないのだ：

Ellen Barry, “After Russian Floods, Grief, Rage and Deep Mistrust,” *New York Times*, July 10,

2012, at

www.nytimes.com/2012/07/11/world/europe/after-russian-floods-grief-rage-and-deep-mistrust.html.

27. 2012年1月末のデイヴィッド・ハーストとトム・パーフィットによるインタビューのなかで、パヴロフスキーは1993年の出来事や「[ロシア] ホワイトハウス襲撃事件」にも言及した。「当時、クレムリン内の人々には絶対的な確信があった……クレムリンのトップが変われば、あるいは民衆からの強力な圧力によって新たなリーダーが登場すれば、こちら側は全滅することになる……見事なまでに弱気の態度だ。誰かがチャンスを与えられれば——民衆でなくても、たとえば知事やほかの派閥が機会を与えられれば——彼らは物理的にクレムリンという組織全体を破壊しようとする。あるいは、こちらが反撃に出て相手を破壊しなければいけない。そう誰もが考えていた」

28. グレブ・パヴロフスキーのインタビューより： *The Guardian*, January 24, 2012.

29. グレブ・パヴロフスキーのインタビューより：

“Bol’she net cheloveka, kotoryy skazal by emu: ‘Ne nado, Vladimir Vladimirovich’” [There’s no one left who could tell him: “Vladimir Vladimirovich, don’t!”], *Novoye Vremya/The New Times*, September 10, 2012, at

<http://newtimes.ru/articles/print/56884/>.

30. エゴール・ガイダルは公私の場を問わずこのエピソードを繰り返し語った。以下のネット記事がその一例：

Valeriy Zavarotnyy in “Kamikadze,” *Ezhednevnyy zhurnal*, June 12, 2012, at

www.ej.ru/?a=note&id=11847.

31. Fiona Hill and Clifford G. Gaddy, “Putin’s Next Move in Russia: Observations from the 8th Annual Valdai International Discussion Club,” Brookings Institution, December 12, 2011, at www.brookings.edu/research/interviews/2011/12/12-putin-gaddy-hill.

32. Ellen Barry, “Resolute Putin Faces a Russia That’s Changed,” *New York Times*, February 23, 2012, at

www.nytimes.com/2012/02/24/world/europe/a-resolute-putin-faces-a-changing-russia.html.

そのときのヴァルダイ会議では、プーチンの皇帝らしい行動が随所に見られた。たとえば、(いつものように) プーチンはヴァルダイ会議の参加者との晩餐会に予定より数時間遅れて到着した。著者が2010～12年にインタビューしてきたジャーナリスト、石油企業の幹部、欧米の政府高官、上席役人らが口を揃えるように、プーチンの遅刻は日常茶飯事のことだった。2012年7月、クリミアのヤルタで開かれたウクライナのヴィクトル・ヤヌコーヴィチ大統領との会談にプーチンが遅れて現われると、この遅刻問題がマスコミで大々的に取り上げられることになった。ロシア人ジャーナリストのアンドレイ・コレスニコフ (Andrei Kolesnikov) は次のように述べた。「プーチンの常習的な遅刻は、別の意味にも取れるかもしれない。つまり、それこそが他者への態度を示す彼の性格や方法なのかもしれない……しかし今や、彼の上には神しか存在しない。彼がナンバー1であり、好きなだけ遅れることが許されているのだ」：

Fred Weir, “Got an Appointment with Vladimir Putin? Better Bring a Book,” *Global News* (blog), *Christian Science Monitor*, July 18, 2012, at

www.csmonitor.com/World/Global-News/2012/0718/Got-an-appointment-with-Vladimir-Putin-Better-bring-a-book.

33. Bobkov (1995), p. 40.

34. 同上, p. 284.

35. ボブコフは次のように明言した。「規制すればするほど、インテリゲンチヤは敏感に反応するようになる。そして最後には、間違いなく誰かが法律を破ることになる」：同上, pp. 259–60.

36. 同上, pp. 355–61.

37. 同上、p. 213 and p. 257.

38. “Putin welcomes the young to speak out their position,” ITAR-TASS, December 15, 2011, at <http://en.itar-tass.com/archive/666509>

(accessed through Nexis.com in English); “Spokesman says Putin is true liberal, welcomes “healthy” opposition pressure,” BBC Monitoring Former Soviet Union—Political, March 26, 2012 (accessed through Nexis.com in English); and “Putin’s chief of staff denies that new law on demos restrictive,” Russia and CIS General Newswire, June 22, 2012 (accessed through Nexis.com in English).

39. フォン・ベンケンドルフ将軍に関するこれまでの議論は第8章を参照。

40. 以下を参照：Douglas Busvine, “Russia’s Kudrin Stays in the Mix with New Task Force,” Reuters, April 5, 2012, at www.reuters.com/article/russia-kudrin-idUSL6E8F515C20120405.

以下のアレクセイ・クドリンの公式ウェブサイトも参照：<http://akudrin.ru/news/>.

41. たとえば、2012年5月5日付けのクドリンと〈市民イニシアティブ委員会〉関係者との公開書簡を参照：

“Shansy na dialog mezhdru obshchestvom i vlast’yu snizilis” [The chances of dialogue between society and the authorities have been reduced], at

<http://akudrin.ru/news/shansy-na-dialog-mezhdru-obshchestvom-i-vlastyu-snizilis.html>.

42. 2012年6～7月に行なった欧米の政府高官へのインタビュー取材によると、アレクセイ・クドリン本人が、彼自身と市民イニシアティブ委員会の立場を「仲介役」的なものと説明したという。

43. 2012年3月5日のブルッキングス研究所でのプレゼンテーションにおいて、ジャーナリストで作家のマーシャ・ゲッセン（ロシアの抗議運動の代表的なメンバー）が、アレクセイ・クドリンの新たな役割について次のように述べた。「[元財務大臣の]クドリンはすべての方面で輝かしい評価を受けてきた。20年もウラジーミル・プーチンの側近を務めた人物が、なぜそのような評価を得ることができるのだろうか？ プーチン率いる政府が腐敗の塊だと誰もが知っているにもかかわらず、なぜクドリンの評価は落ちないのか？ だとしても、優れた伝達者・交渉者になれるかどうかは、彼自身がこれから証明しなくてはいけない……しかしロシア人は評判を気にするので、クドリンの高い評判、とりわけ国際的な高い評判は大きな武器になるだろう」。この時点で抗議運動の重要なメンバーとなっていたオレグ・カシンもまた、2012年3月29日のブルッキングス研究所でのプレゼンテーションで次のように語った。「これまで暗い部屋でクレムリンの金を数えつづけてきた」クドリンが、このような公の場での政治的役割を果たすのは時期尚早だろう。

44. たとえば、ロシア人アナリストのマリア・リップマンも、ロシア政府高官との話し合いの中身を基に、同じ考えを表明した：2012年4月25日、ブルッキングス研究所でのプレゼンテーション。

45. たとえば、以下を参照：

John Lloyd, “Master of Nostalgia: Vladimir Putin Has Played Expertly to Russia’s Emotions during His Years at the Centre of Power—but at What Cost?,” *Financial Times*, January 28/29, 2012, at

www.ft.com/intl/cms/s/2/7f623772-467d-11e1-85e2-00144feabdc0.html#axzz26w16zruc

; “Russia’s ‘Revolutionary’ Situation,” RFE/RL, June 12, 2012, at

www.rferl.org/articleprintview/24612283.html

; and David Hearst, “Will Putinism See the End of Putin,” *The Guardian*, February 27, 2012, at www.guardian.co.uk/world/2012/feb/27/vladimir-putin-profile-putinism/print.

プーチンに関する『ガーディアン』の記事のためのインタビューに応えたミハイル・ドミトリエフは、自らが調査に使うフォーカス・グループを通して精査した結果として、2006年以降、プーチンの政治ブランドは急速に衰えつつあると述べた。また、デイヴィッド・ハーストによるインタビュ

一のなかで、ロシアの調査報道記者アンドレイ・ソルダトフは、保安機関の若い世代の職員たちが抱く感情について次のように述べた。若い職員たちは自分たちが出世コースから取り残されていると感じ、「プーチンと個人的に知り合いで、個人的に役職を任命される」年上のFSB職員たちの集団を疎ましく思っているのだという。そのため、このような負の感情を持つ若い職員たちは、ロシア世論の重要な変化に関する情報を、年上の上司たちと共有しようとしなないという。

46. Lloyd, “Master of Nostalgia,” *Financial Times*, January 28/29, 2012.

47. キリル1世の発言はロシア正教会のウェブサイトを確認できる（ロシア語）：

www.patriarchia.ru/db/text/1932241.html.

48. 詳しくは以下を参照：Keenan (1986).

49. 以下を参照：

“Vozmozhnyye rezul’taty prezidentskikh i parlamentskikh vyborov” [Possible results of presidential and parliamentary elections], Levada Center, September 5, 2013, at www.levada.ru/05-09-2013/vozmozhnye-rezultaty-prezidentskikh-i-parlamentskikh-vyborov.

50. Sberbank Investment Research, “Russia Economic Monthly. February 2014—Creative Chaos,” at

www.sberbank-cib.ru/eng/research/research.wbp.

51. ほかに、2003年のグルジアでのバラ革命、2005年のキルギスタンでのチューリップ革命がある。

52. 以下を参照：Steven Lee Myers, “Putin Reforms Greeted by Street Protests,” *New York Times*, January 16, 2005, at

www.nytimes.com/2005/01/16/international/europe/16moscow.html?_r=0.

いわゆる「反・現金支給化デモ」は、ロシアの市民に深く根づく政府不信への表われであるともいえる。このとき、政府は年金受給者への現物支給を取りやめ、代わりに現金での支給を約束した。しかし、長期にわたって年金の支払いが滞り、未払い金への補償がまったくなかった1990年代の経験から、ロシアの年金受給者は本当に現金が支払われるかどうか懐疑的だったのである。現物支給廃止に対する否定的な反応のもう1つの理由は、退役軍人を含めた年金受給者たちにそれまで与えられていた特別な権利が取り上げられることになるからだった。たとえば、それまで年金受給者たちは公共交通機関に無料で乗車することができたし、博物館や劇場への入場料も免除されていた。しかし現金支給になれば、老人たちはほかの全員と同じように列に並び、金を支払わなくてははいけない。それは、彼らが当然だと考える最低限の尊厳に対する侮辱だった。

53. “Russia Says ‘Hooligans’ Attacked Tajik Train,” RFE/RL’s Tajik Service, October 30, 2013, at

www.rferl.org/content/tajik-train-attack-25153112.html.

54. 以下を参照：“Rossiyane o migratsii i mezhnatsional’noy napryazhennosti” [Russians on migration and intra-ethnic tensions], Levada Center, November 5, 2013, at

www.levada.ru/05-11-2013/rossiyane-o-migratsii-i-mezhnatsionalnoi-napryazhennosti.

55. アレクセイ・ナワリヌイのブログ：

<http://navalny.livejournal.com/>

56. 以下の議論を参照：

Fiona Hill and Hannah Thoburn, “The Populist Threat to Putin’s Power,” Brookings Institution’s Up Front Blog, November 15, 2013, at

www.brookings.edu/research/opinions/2013/11/15-populist-threat-putin-power-hill-thoburn.

57. Zachary A. Goldfarb, “S&P downgrades U.S. credit rating for first time,” *Washington Post*, August 6, 2011, at

www.washingtonpost.com/business/economy/sandp-considering-first-downgrade-of-us-credit-ra

[ting/2011/08/05/gIAqKeIxI_story.html](http://www.nytimes.com/2011/08/05/gIAqKeIxI_story.html).

この記事はこう始まる。「金曜夜、〈スタンダード&プアーズ〉はアメリカの信用格付けを史上初めて引き下げることを発表。同社はアメリカの政治システムを厳しく批判し、世界一の経済超大国に象徴的な一撃を加えた」

58. “IMF Survey: Global Financial System Risks Escalate,” September 21, 2011, at

www.imf.org/external/pubs/ft/survey/so/2011/new092111a.htm.

59. 株式市場のデータは以下のYahoo Financeで確認可能：

<http://finance.yahoo.com/stock-center/>

60. 以下を参照：

“Rossiyane o svoey zhiznennoy situatsii” [Russians on their living situation], Levada Center, October 14, 2013, at

www.levada.ru/14-10-2013/rossiyane-o-svoei-zhiznennoi-situatsii

; and Ellen Barry, “The Russia Left Behind,” *New York Times*, October 13, 2013, at

www.nytimes.com/newsgraphics/2013/10/13/russia/

61. 第5章を参照。

62. 2012年の大統領選挙のために発表した基本的な経済政策のなかで、プーチンはGDP成長率についての具体的な目標を掲げなかった（以前であれば必ず発表する数値だった）。代わりに彼は、今日のグローバル経済には「リスク」と「脅威」が伴うことを強調した。「このような状況下においては、われわれは自国経済の維持可能で漸進的な発展を確実なものとし、危機の困難から市民をできるだけ守らなければいけない」：

Vladimir Putin, “O nashikh ekonomicheskikh zadachakh” [On our economic tasks], January 30, 2012, at

<http://archive.premier.gov.ru/events/news/17888/0>.

<http://archive.premier.gov.ru/eng/events/news/17888/>. (英語版)

63. 以下を参照：

“Sovmestnaya press-konferentsiya s Prezidentom Kazakhstana Nursultanom Nazarbayevym po itogam rossiysko-kazakhstanskikh peregovorov” [Joint press conference with President of Kazakhstan Nursultan Nazarbaev on the results of Russian-Kazakh talks], May 22, 2008, at <http://kremlin.ru/transcripts/183>.

64. 2011年11月11日のモスクワでのヴァルダイ会議の夕食会にて、プーチン大統領との質疑応答。著者の個人的なメモより。

65. アレクセイ・ナワリヌイのこの一件についての詳しい解説は、以下などを参照：

Peter Beaumont, “Alexei Navalny: Firebrand Bidding for Russia’s Soul,” *The Guardian*, August 10, 2013, at

www.theguardian.com/theobserver/2013/aug/11/sergei-navalny-liberal-hero-bidding-for-russia-soul

; and Andrew Roth, “Court Orders House Arrest, and No Internet, for Fierce Critic of Putin,” *New York Times*, March 1, 2014, at

www.nytimes.com/2014/03/01/world/europe/aleksei-navalny.html.

66. プーチンのプッシー・ライオットに対する処遇の詳細については、以下を参照：Gessen (2014).

67. “Russian Opposition Figures Udaltsov, Razvozhayev Sentenced to Prison,” RFE/RL, July 24, 2014, at

www.rferl.org/content/udalstov-razvozhayev-trial-verdict-guilty-bolotnaya/25468624.html.

68. たとえば、以下を参照：

Brian Whitmore, “Ksenia and Vladimir,” *The Power Vertical* (blog), RFE/RL, June 18, 2012, at

www.rferl.org/content/ksenia-anatolevna-and-vladimir-vladimirovich/24618330.html.

69. 以下を参照 : Leonid Bershidsky, “Parsing the Marriage of Russia’s Paris Hilton,” *Bloomberg View*, February 2, 2013, at www.bloombergview.com/articles/2013-02-05/parsing-the-marriage-of-russia-s-paris-hilton.

70. 以下を参照 :

Julia Ioffe, “A Week before the Olympics, the Kremlin Is Attacking Russia’s Last Independent TV Channel,” *The New Republic*, January 31, 2014, at www.newrepublic.com/article/116434/putin-attacks-dozhdtv-russias-last-independent-tv-channel.

71. アレクセイ・ナワリヌイの汚職容疑での逮捕についてのプーチンの記者会見でのコメント、および2013年9月3日のAP通信とのインタビューを参照。インタビューでは、プーチンはナワリヌイの名前にはいちども言及せず、「この紳士 [etot gospodin] 」と述べるにとどまっているが、これは意識的に侮蔑を示して距離を置く戦略だろう。ナワリヌイの名前を言及することを拒否したプーチンに世間から批判が集まると、ジャーナリストのアレック・ルーンとの会話のなかで彼はやっとその名前を口にした :

“Putin Finally Says Navalny’s Name, Journalist Tweets,” *Moscow Times*, September 20, 2013, at www.themoscowtimes.com/news/article/putin-finally-says-navalnys-name-journalist-tweets/486380.html.

72. 以下を参照 :

“Bolotnoye delo” [The Bolotnaya Square affair], Levada Center, October 4, 2013, at www.levada.ru/04-10-2013/bolotnoe-delo.

73. 以下を参照 :

Hill and Thoburn, “The Populist Threat to Putin’s Power,” *Brookings Up Front Blog*.

74. “Russia’s NATO envoy appointed deputy PM for defense industry,” *RIA Novosti*, December 23, 2011, at <http://en.ria.ru/russia/20111223/170446490.html>.

75. 以下を参照 :

“Putin Tells Zhirinovsky to ‘Tone it Down,’” *Moscow Times*, November 8, 2013, at www.themoscowtimes.com/news/article/putin-tells-zhirinovsky-to-tone-itdown/489148.html?id=489148.

76. 2011年11月にモスクワで開かれたヴァルダイ会議では、ジリノフスキー本人とのトークセッションも用意されていた。会議開催中の著者との会話のなかで、ロシア人政治工学者アンドラニク・ミグラニアンは、ジリノフスキーのロシア諜報機関とのつながりについて率直に語った。また、ロシアの民族主義者の心情を一定の方向に導くために、1990年代にジリノフスキーが割り当てられた役目についても語った。著者らに対して、ミグラニアンは皮肉っぽくこう言った。「こちらの狂信者とそちら [アメリカの] 狂信者の違いは、そちらの狂信者は自分たちの考えを心から信じていることだ」 : 著者のメモより。

77. しかしながら、政党〈祖国〉の党首を務めていたあいだ、ロゴージンはクレムリンによって厳重に監視されていた。この事実は、2005年9月のヴァルダイ会議開催中、ロゴージンの監視役だったウラジーミル・フローロフが著者に直接教えてくれた。

78. Bullough (2013)を参照。

79. 以下を参照 :

“Rossiyane o dele pussy riot” [Russians on the Pussy Riot case], Levada Center, July 31, 2012, at

www.levada.ru/31-07-2012/rossiyane-o-dele-pussy-riot.

80. AP通信およびチャンネル1によるインタビュー中のプーチンの発言：

“Interv’yu Pervomu kanalu i agentstvu Assoshyeyted Press” [Interview with First Channel and the Associated Press], September 4, 2013, at

<http://kremlin.ru/transcripts/19143>.

81. 以下を参照：

Vladimir Putin, “Poslaniye Prezidenta Federal’nomu Sobraniyu” [Message of the President to the Federal Assembly], December 12, 2012, at

<http://kremlin.ru/news/17118>.

82. Vladimir Putin, “Poslaniye Prezidenta Federal’nomu Sobraniyu” [Message of the President to the Federal Assembly], December 12, 2013, at

<http://kremlin.ru/transcripts/19825>.

「混沌とした暗闇」について話したとき、プーチンは現代のロシア語で「暗闇」を意味する「*temnota* (テムノタ)」ではなく、古代教会スラヴ語の「*t’ma* (チマ)」という単語を使った。現代ロシア語では、*t’ma*は暗闇だけでなく、「数えきれないもの」(大群、無数、多量)を意味する。たとえば、シベリアからロシアの侯国に攻め込んできたモンゴルの大群は*t’ma*であり、その人数の多さはロシアに「暗闇」をもたらした。実際、*t’ma*はモンゴル語に由来する単語で、1万人の兵士の部隊を意味する「*tumen* (トゥメン)」の複数形である。プーチンは、この単語を意味なく使ったわけではない。

83. Brett Forrest, “Putin’s Party,” *National Geographic*, January 2014, at

<http://ngm.nationalgeographic.com/2014/01/sochi-russia/forrest-text>.

84. 以下を参照：

Peter Finn, Carol D. Leonnig, and Will Englund, “Tamerlan Tsarnaev and Dzhokhar Tsarnaev Were Refugees from Brutal Chechen Conflict,” *Washington Post*, April 19, 2013, at

www.washingtonpost.com/politics/details-emerge-on-suspected-boston-bombers/2013/04/19/ef2c2566-a8e4-11e2-a8e2-5b98cb59187f_story.html.

85. 以下を参照：Owen Matthews, “Russia Tests ‘Total Surveillance’ at the Sochi Olympics,”

Newsweek, February 12, 2014, at

www.newsweek.com/2014/02/14/russia-tests-total-surveillance-sochi-olympics-245494.html.

86. ホドルコフスキーの恩赦は認めたものの、プーチンは彼の犯罪行為自体を無実としたわけではない。釈放についての発言のなかで、プーチンは、ホドルコフスキーへの罰はロシアのシステムが決めたことである点を強調した。「ごく最近、彼は私に恩赦を求めてきた。彼はすでに10年以上刑務所で暮らしてきた。これはかなり重い処罰といっている。彼は人道的な状況についても言及した——母親が病気だということだ。これらのすべての状況に鑑み、適切な判断が下されるだろう。つまり近い将来、彼の恩赦を許可する大統領令が発行されることになる」：

“Press-konferentsiya Vladimira Putina” [Press conference by Vladimir Putin], December 19, 2013, at

<http://kremlin.ru/transcripts/19859>.

ホドルコフスキーの母は実際に重篤な病気で、2014年8月に死んだ。

87. コンスタンティン・エルンストを紹介する記事のなかで、『ニューヨーカー』誌のジョシュア・ヤッフアは次のように記している。「ロシアの公の文化は国家主義への熱狂的支持と、かけがえない唯一のリーダーであるプーチンが率いる“重要な国家”というイメージを作り出す高い生産性を兼ね備えたものだ。その文化のなかで、エルンストは唯一無二の存在である。エルンストの美的感性が、5月9日の戦勝記念日の軍事パレードの演出を決め、毎年恒例のプーチンの視聴者参加型番組を作り上げる。この番組は4時間以上にわたって放送され、ウラル地域の工場労働者や極東の心

配性の母親らの質問にプーチンはひたすら答えつづけるのだ」：

Joshua Yaffa, “Putin’s Master of Ceremonies,” *The New Yorker*, February 5, 2014, at www.newyorker.com/news/news-desk/putins-master-of-ceremonies.

88. 以下を参照：

James Poniewozik, “Russian through History: The Sochi Olympics Opening Ceremonies,” *Time*, February 8, 2014, at <http://time.com/6025/russian-through-historythe-sochi-olympics-opening-ceremonies/#6025/russian-through-history-the-sochiolympics-opening-ceremonies/>.

89. 以下を参照：

Vladimir Putin, “Interv’yu predstavitel’yam telekanalov ‘Pervyy,’ VGTRK, NTV, RBK” [Interview with representatives from television channels, Channel One, VGTRK, NTV, and RBK], February 25, 2014, at <http://kremlin.ru/transcripts/20336>.

第11章 プーチンの世界

1. プーチンのヒラリー・クリントン非難については第10章を参照。

2. 以下を参照：

“Russia’s Putin Signs NGO ‘Foreign Agents’ Law,” Reuters, July 21, 2012, at www.reuters.com/article/2012/07/21/us-russia-putin-ngos-idUSBRE86K05M20120721.

3. 第10章を参照。

4. 2014年3月18日のクリミア編入を宣言するクレムリンでの演説において、プーチンは次のように強調した。「われわれは今何が起きているのか理解しているはずだ。[色の革命以来、ウクライナにおける西側の] 行動のすべては、ウクライナやロシアに対抗するものであり、ユーラシア地域の統一を邪魔しようとするものだ、と」：

Vladimir Putin, “Obrashcheniye Prezidenta Rossiyskoy Federatsii” [Address by the President of the Russian Federation], March 18, 2014, available on the Kremlin’s website archive (in Russian) at <http://kremlin.ru/>

<http://news.kremlin.ru/news/20603/print>.

<http://eng.news.kremlin.ru/news/6889/print>. (英語版)

5. 2014年3月18日の演説のなかで、プーチンは次のように語った。「西側の政治家のなかには、[クリミア編入に対する] 制裁措置以外にも、ロシア国内の問題への干渉の強化をちらつかせて、われわれを脅そうとする者もいる。私としては、彼らの意図を知りたい。なぜ第五列のような行動、つまり国家の裏切り者の行為を助長しようとするのか？あるいは彼らは、ロシアの社会経済的な状況を悪化させることができると考えているのだろうか？こうすることによって、人々の不満を駆り立てることができるだけでも？われわれとしては、西側によるこの種の発言のすべてを、無責任かつ明らかかな攻撃だとみなし、相応の対応を取ることになるだろう」：

Putin, “Obrashcheniye Prezidenta Rossiyskoy Federatsii” [Address by the President of the Russian Federation], March 18, 2014, Moscow.

6. マフムト・ガレエフ将軍は著名な軍事歴史家で、第二次世界大戦での功績に対して勲章を授与された退役軍人である。ソ連軍参謀本部の元副総長で、現在はロシア軍事科学アカデミー所長。1989～91年、ガレエフはアフガニスタンのナジブラ大統領の最高軍事顧問を務めた。

7. 「脅威の認識：モスクワからの視点」と題したガレエフ将軍のこのスピーチは、2010年7月28日、アメリカの複数のシンクタンクが共催した「ロシアの軍事改革と現代化の2020年までの見通し」に関する会議で行なわれたもの。2009年11月、訪米中だったエゴール・ガイダルがガレエフをこの会議のスピーカーとして推薦した。本文中の引用は、会場で配布されたガレエフ将軍のスピーチ原

稿（ロシア語）、質疑応答およびガレエフとの議論における著者のメモより。

8. この台詞は、2004年のバスランの学校占拠事件後にプーチンがロシア国民に向けて行なった演説の一節。プーチンは続けてこう発言した。ロシアの領土を引き裂こうとする人々は、常に誰かほかの人間たちの支援を受けていた。「おそらく、彼らが支援を続けるのは、ロシアがまだ世界随一の核保有国であり、彼らにとっての脅威となるからだだろう。彼らにしてみれば、この脅威をすぐにでも消し去りたいに違いない。そこでテロリズムの出番となる。言うまでもなくテロは、これらの目標を達成する手段にすぎない」：

Vladimir Putin, “Obrashcheniye Prezidenta Rossii Vladimira Putina” [Address by the President of Russia Vladimir Putin], September 4, 2004, at <http://archive.kremlin.ru/text/appears/2004/09/76320.shtml>.

9. ブルッキングス研究所の国際秩序・戦略計画責任者トーマス・ライト（Thomas Wright）によるプレゼンテーション：

“The Return of Revisionist States,” at the Brookings Institution, Washington D.C., June 5, 2014.

なぜほかの大国がアメリカの攻撃的な行動や「一般的に受け入れられたアメリカの力」を恐れていなかったのか、という議論の詳細についてはKagan (2012)を参照：

10. 2014年3月18日のクレムリンでの演説でプーチンはこう語った。「ウクライナはできるかぎり早くNATOに加入する、とキエフ政府はすでに発表していた。その動きは、クリミアとセヴァストポリ [ロシア黒海艦隊の母港] にとって何を意味するのか？ ロシア軍の栄光の街に、NATOの艦隊が現われることになっていたかもしれない。ロシア南部全体に、脅威が広がっていたかもしれない。それは、一時的な脅威などではなく、確固とした脅威である」：

Putin, “Obrashcheniye Prezidenta Rossiyskoy Federatsii” [Address by the President of the Russian Federation], March 18, 2014.

11. ロシア語では、プーチンは次のような直接的な表現を使った。

「Nu chto Rossiya? Opustila golovu i smirilas’, proglotila etu obidu. Nasha strana nakhodilas’ togda v takom tyazhyolom sostoyanii, chto prosto ne mogla real’no zashchitit’ svoi interesy」：See Putin, “Obrashcheniye Prezidenta Rossiyskoy Federatsii” [Address by the President of the Russian Federation], March 18, 2014.

12. See Vladimir Putin, “Soveshchaniye poslov i postoyannykh predstaviteley Rossii” [Meeting of ambassadors and permanent representatives of Russia], July 1, 2014, at <http://kremlin.ru/transcripts/46131>.

13. たとえば、Krstev (2014)やMead (2014)を参照。

14. セルゲイ・グラジエフはプーチンの経済顧問を務める政治家で、ウクライナ問題に関するロシア随一の解説者。ウクライナ危機のあいだ、制裁対象者としてアメリカにリストアップされた活動家の1人である。たとえば、以下を参照：

Henry Meyer and Stephen Bierman, “Putin Allies Targeted by U.S., EU Sanctions over Ukraine Crisis,” Bloomberg, March 17, 2014, at www.bloomberg.com/news/articles/2014-03-17/putin-allies-targeted-by-u-s-sanctions-over-ukrainian-standoff.

2014年7月、ウクライナ政府は、セルゲイ・グラジエフやそのほかの民族主義政治家のウクライナ危機における活動について正式な調査を開始し、彼らがドネツク地方の分離独立派に資金提供をする可能性があるとして非難した：

“Ukraine Launches Probes of Zyuganov, Zhirinovskiy,” RFE/RL, August 1, 2014, at www.rferl.org/content/zyuganov-zhirinovskiy-avakov-kolomoyskiy-probe/25469971.html

15. 2013年6月、妻のリュドミラ・プーチナとの別居と離婚を正式に発表したときにも、プーチン

はこの不幸な出来事が、彼のロシア国家への奉仕に起因するものであることを示唆した。ロシアへの完全なる献身によって、家族のためのプライベートな時間がなかった、と。大統領であり男であるウラジーミル・プーチンは、国家と結婚したも同然だった：

Ol'ga Marandi, "Vladimir i Lyudmila Putiny ob'yavili o razvode" [Vladimir and Lyudmila Putin announce divorce], *Moskovskiy komsomolets*, June 6, 2013, available (in Russian) at www.mk.ru/politics/2013/06/06/865914-vladimir-i-lyudmila-putinyi-obvavili-o-razvode.html

16. 以下を参照：

Vladimir Putin, "Poslaniye Prezidenta Federal'nomu Sobraniyu" [Message of the President to the Federal Assembly], December 12, 2012, (in Russian) at kremlin.ru/events/president/news/17118

17. 以下を参照：

Peter Baker, "Pressure Rising as Obama Works to Rein in Russia," *New York Times*, March 2, 2014, at www.nytimes.com/2014/03/03/world/europe/pressure-rising-as-obama-works-to-rein-in-russia.html.

『ニューヨーク・タイムズ』紙のホワイトハウス担当記者であるピーター・ベイカー (Peter Baker) は、メルケルとオバマの電話会談に関するブリーフィングを行なった匿名のアメリカ政府役人から、メルケルのこのコメントについて聞いたという。ベイカーの記事はドイツのメディアでも報道された：“Merkel schimpft: Putin lebt in einer anderen Welt” [Merkel complains: Putin is living in another world], *Bild*, March 3, 2014, at www.bild.de/politik/ausland/krim/merkel-schimpft-im-obama-telefonat-ueber-putin-34911584.bild.html

また、『ニューヨーク・タイムズ』のベルリン特派員によってさらに詳細な記事が発表された：Alison Smale, "Ukraine Crisis Limits Merkel's Rapport With Putin," *New York Times*, March 12, 2014, at www.nytimes.com/2014/03/13/world/europe/on-ukraine-merkel-finds-limits-of-her-rapport-with-putin.html? r=0.

この発言の正式な文書記録は存在しないものの、メルケル首相が実際にこうコメントしたというのがドイツ・メディアでの大方の見方だ。この発言は、プーチンや彼の考え方についてのメルケルのこれまでの発言（オフレコの会議やインタビューにおける発言）と合致するものだった：2013年3月31日、独『ディー・ツァイト』紙のワシントン支局長マルティン・クリングストと著者による討論より。

18. Vladimir Putin, "Obrashcheniye Prezidenta Rossiyskoy Federatsii" [Address by the President of the Russian Federation], March 18, 2014.

19. 2014年3月31日、ワシントンDCでの著者とのプライベートな討論のなかで、クレムリンの権力中枢に定期的にアクセスできるヨーロッパ企業のCEOが、つい最近ロシアの代表的なオリガルヒに会った際、その人物がプーチンと同じことを指摘したと教えてくれた。そのオリガルヒは、2014年のソチ冬季オリンピックの成功をプーチン大統領とともに祝う式典に参加した直後に飛行機に乗り、そのまま会議の場所までやってきた。式典のなかでプーチンは、クリミアを「編入せざるをえなかった」とそのオリガルヒに語ったという。ほかに道はなかった。西側からのウクライナに対する脅威はあまりに強すぎた、と。

20. 以下を参照：

"V Kremle vrucheny premii deyatelyam kul'tury i premii za proizvedeniye dlya detey" [In the Kremlin, awards were given to cultural figures and awards for works for children], March 25, 2014, at

<http://kremlin.ru/transcripts/20638>.

21. 以下を参照 :

“Minkul’t: “Rossiya ne Evropa”” [Ministry of culture: “Russia is not Europe”], *Colta*, April 4, 2014, at

www.colta.ru/news/2779,

and Garrison Golubock, “Culture Ministry Affirms ‘Russia is not Europe,’” *Moscow Times*, April 7, 2014, at

www.themoscowtimes.com/arts_n_ideas/article/culture-ministry-affirms-russia-is-not-europe/497658.html.

この引用は、報告書の非公開の下書きより。続く2014年5月17日付の『コメルサント』紙の報道によると、この下書きは調子を和らげて書き直され、「ロシアはヨーロッパではない」という趣旨のトルストイの発言内容は、最終版には反映されないことになったという :

www.kommersant.ru/doc/2473782.

最終的にロシア政府発行の『ロシイスカヤ・ガゼータ』紙で発表された報告書は以下を参照 :

“Osnovy gosudarstvennoy kul’turnoy politiki,” May 15, 2014, *Rossiyskaya gazeta*, at

www.rg.ru/2014/05/15/osnovi-dok.html.

また、2012年5月のウラジーミル・メジンスキーのロシア文化大臣就任については、第4章の原注2を参照。

22. Poe (2003), p. 66.

23. 同上、preface, p. xii.

24. 同上、pp. 17–18.

25. 同上、p. 23.

26. Keenan (1986), p. 139.

27. Poe (2003), pp. 30–32.

28. 同上、p. 32.

29. 同上、pp. 38–45.

30. 同上、p. 45.

31. 以下の議論も参照 : Hill and Gaddy (2003), pp. 7–10 and pp. 26–28.

32. たとえば、Eklof, Bushnell, and Zakharova (1994)による一連の記事を参照。

33. モスクワ大公国は外国人の入国を管理し、国境を閉ざした唯一の大陸国だったとポー (Poe) は指摘する : Poe, 2003, p. 57.

34. 同上、pp. 50–51.

35. Pipes (1974).

36. Pipes (1999).

37. Poe (2003), p. 51.

38. 同上、p. 52.

39. Keenan (1986), p. 164.

40. Poe (2003), p. 51.

41. 同上、p. 62,

42. 同上、p. 52.

43. 同上、p. 53.

44. Neil MacFarquhar, “Putin Strives to Harness Energy of Russian Pilgrims for Political Profit,” *New York Times*, August 2, 2014, at

www.nytimes.com/2014/08/03/world/europe/from-pilgrims-putin-seeks-political-profit.html?_r=0.

45. アンドレイ・イラリオノフのブログ記事を参照：“The Rape of Chersonesus Vladimirom Tavrisheskim,” March 27, 2014, *Ekho Moskvy*, at <http://echo.msk.ru/blog/ailar/1287568-echo/>

聖公ウラジーミルに対するのロシア正教会の立場については、モスクワ総主教の公式ウェブサイトの以下の記事を参照：

“Svyatoy ravnoapostol’nyy velikiy knyaz’ Vladimir” [The Holy, Apostolic Great Prince Vladimir], at www.patriarchia.ru/db/text/910305.html.

46. Poe (2003), p. 66.

47. 同上, p. 58.

48. 以下を参照：

Putin, “Obrashcheniye Prezidenta Rossii Vladimira Putina” [Address by the President of Russia Vladimir Putin], September 4, 2004, available in Russian at <http://archive.kremlin.ru/text/appears/2004/09/76320.shtml>.

49. レーニンの外国での経験は、プーチンよりもずっと豊かである。レーニンと側近の一部は、ロンドンやパリを含むヨーロッパ各国の主要都市で20年近く暮らし、1917年のロシア革命に乗じてロシアに戻った。ヨシフ・スターリンは例外で、度重なるシベリア流刑のあいだ（たいてい逃亡したので、1回の期間は短かった）をのぞき、コーカサスの生まれ故郷の地域にとどまった。1912年にスターリンは、ロシア帝国の国籍の問題についての調査・執筆のためにウィーンに1カ月滞在した。それが、スターリンの人生のなかでもっとも長い海外滞在だった。

50. ロシアとドイツの関係のさらなる背景については以下を参照：

Laqueur (1990) and chapter 1, “Comrades in Misfortune: The USSR and Germany,” in Stent (1999).

51. 落書きの一部は以下で閲覧可能：

www.rarehistoricalphotos.com/reichstag-covered-graffiti-seized-nazis-red-army-1945/.

また、Baker (2002)も参照。

52. 『春の十七の瞬間』 (*Seventeen Moments of Spring*) の小説、テレビドラマ、作者についての詳しい情報、ほかの情報源へのリンクについては、ウィキペディアの各記事を参照。小説とドラマのあらゆる情報（シュティルリッツの厳選ジョーク集を含む）を網羅したロシア語のサイトは以下：<http://mgnoveniya.ru/kniga/>

一般的には、KGBが作者のユリアン・セミョーノフにシュティルリッツ・シリーズの執筆を依頼したといわれている（25年のあいだに12作品が発表された）。KGBが執筆依頼したのは、ソビエトの秘密機関を賛美するキャンペーンの一部であり、いわゆる「アンドロポフの新人採用」の一環として若い幹部候補生を組織に引き入れるためでもあった（第6章を参照）。この本は1978年に *The Himmler Ploy*（ヒムラーの策略）という題名で英語で出版された。詳しくはSemenov (1978)を参照。

53. Simis (1982), pp. 195–96を参照 [邦題『ソビエト：権力と腐敗』（木村明生訳／PHP研究所）の240ページより引用]。サイミスの息子ディミトリ・サイミスは、アメリカを代表するアナリストで、ワシントンDCに拠点を置くシンクタンク〈センター・フォー・ザ・ナショナル・インタレスト〉の所長。サイミスと彼の著書のさらに詳しい情報は、以下を参照：Patricia Sullivan, “Konstantin Simis; Critic of Soviet Corruption,” *Washington Post* (obituary), December 17, 2006, at

www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2006/12/16/AR2006121600909.html.

54. Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), p. 70 [邦訳は101ページ] この考えを形成するに至った経緯については第4章を参照。

55. LeVine (2008)を参照。

56. たとえば、以下を参照：

Julia Ioffe, “Putin’s Press Conference Proved Merkel Right: He’s Lost His Mind,” *New Republic*, March 4, 2014, at

www.newrepublic.com/article/116852/merkel-was-right-putins-lost-his-mind-press-conference

; and Evan McMurry, “Here Are All The People Who Think Putin Has Straight Up Lost His Mind,” *Mediaite*, March 4, 2014, at

www.mediaite.com/tv/here-are-all-the-people-who-think-putin-has-straight-up-lost-his-mind/

57. 2008年のプライベートなオフレコの会議において、グルジアとの戦争勃発をとりまく状況に関するロシアの公式声明や政府の解釈について議論を進めるなかで、きわめて高い地位のアメリカの政府高官が額を叩き、「どうして彼らは私たちのように考えないんだ？」と声を荒らげた。ほかの米高官たちも、この衝突に対するロシアやプーチンの見方はまったく筋が通らない、と主張した。彼らはアメリカの見方に従おうとはしないし、向こうを分析・理解しようとすることに意味などない、と（会議でのメモより）。アンジェラ・ステント（Angela Stent）の著書でも指摘されているように、グルジア戦争をめぐるのは、米露の言い分は真っ向から対立し、どちら側も他方の立場を理解しようとしなかった：

The Limits of Partnership: U.S.-Russian Relations in the Twenty-First Century, in chapter 7, “From Kosovo to Georgia: Things Fall Apart,” pp. 159–76.

58. ベルリンやワシントンDCで2011～2014年にかけて著者が行なった、首相周辺のスタッフや閣僚への数々のインタビューより。

59. Kornelius (2013), p. 182.

60. 同上, pp. 181–82.

61. 前述の首相周辺のスタッフや閣僚へのインタビューのなかで、この出来事がたびたび言及された。

62. Shore (2014), p. 81.

63. 2014年2月6日にドイツ・ドレスデンにて行なわれた、『ディー・ツァイト』紙ドレスデン支局長へのインタビューより。

64. Thumann (2005)を参照。『ディー・ツァイト』紙の外交政策担当・主任編集者であるトゥマン（Thumann）は、シュレーダー首相とプーチン大統領の関係について大がかりな研究プロジェクトを実施。2005年6月30日、ワシントンDCで開かれたドイツ・マーシャル基金のトランスアトランティック・アカデミーの会議で結論の概要を発表した：

www.gmfus.org/archives/2005/06/

65. 以下を参照：

Tony Patterson, “Gerhard Schroeder’s Birthday Party with Vladimir Putin Angers Germany,” *The Telegraph*, April 29, 2014, at

www.telegraph.co.uk/news/worldnews/europe/ukraine/10795042/Gerhard-Schroeders-birthday-party-with-Vladimir-Putin.html.

66. 以下を参照：

“Meeting with Helmut Schmidt,” December 22, 2013, at

<http://eng.kremlin.ru/news/6398>.

67. アンハルト＝ツェルプスト公女ゾフィー・フリーデリケ・アウグステは1729年に東プロイセンのポンメルンのシュテッティン（現在のポーランド・西ポモージェ県の県都シュチェチン）で生まれた。エカテリーナ2世（1762～96）として、ゾフィーはロシア文化に没頭し、典型的なロシアの支配者となった。時間がたつにつれ、彼女のヨーロッパのルーツや「ドイツらしさ」は消え、周囲の人々もそんなことはほとんど忘れてしまった。

68. ケルバー財団の会議のドイツ語の議事録は以下で閲覧可能：

www.koerber-stiftung.de/internationale-politik/bergedorfer-gespraechskreis/protokolle/protokol-l-detail/BG/russland-und-der-westenbrinternationale-sicherheit-und-reformpolitik.html.

会議でのプーチンの様子については、イギリスの学者ティモシー・ガートン・アッシュ (Timothy Garton Ash) による2014年7月20日付の『ニューヨーク・タイムズ』の以下の記事でも言及されている：

“Putin’s Deadly Doctrine” at

www.nytimes.com/2014/07/20/opinion/sunday/protecting-russians-in-ukraine-has-deadly-consequences.html?ref=opinion&_r=1.

ガートン・アッシュはプーチンの会議での発言を引き合いに出し、ロシアのクリミア編入のずっと以前から、プーチンが民族主義的な見解を表明していたと主張した。事実、会議でのプーチンの発言は、ほかのロシア人の参加者の意見のトーンや趣旨と完全に調和するものだった。たとえば、参加者の1人、当時の第一国防次官アンドレイ・ココーシンは、あるリスク——将来のどこかの時点で、ロシア人や旧ソビエトの住民たちが、現存する事実を変えようとするかもしれない——について強い警告を発した。当時のドイツ国防大臣フォルカー・リュエとの会話のなかで、ココーシンはこう語った。「崩壊したソ連のどこかに住む人々が、私たちの予測とは違う決断を下すかもしれない。なぜなら、現在、政治を動かすのは彼ら自身だからだ。そういった可能性に、われわれは目を背けてはいけない。この点において、サプライズが絶対にないとは言い切れないのだ

(Möglicherweise kommt ein Volk in irgendeinem Teil der zerfallenen Sowjetunion zu einem anderen Entschluß, als wir dies vorhersehen; denn jetzt bestimmt es selbst das politische Handeln. Vor solchen Möglichkeiten darf man die Augen nicht verschließen. Hier sind durchaus Überraschungen nicht auszuschließen)」。

サンクトペテルブルクでこれらの会話が交わされた1994年は、ちょうどソビエトがドイツから完全撤退した時期だった。フォルカー・リュエ国防大臣とドイツ政府は、帰国する軍人とその家族の住宅手配に奔走していた。このドイツからの撤退についてロシア政府上層部は、秩序と誠意にあふれたものだと見ていた。一方、国境の反対側のバルト三国での撤退には、そんな秩序や誠意はなかった。バルト三国からの撤退は、ロシア軍にしてみれば、西側の圧力によって突然追い出されたも同然だった。

69. Vladimir Putin, “Obrashcheniye Prezidenta Rossiyskoy Federatsii” [Address by the President of the Russian Federation], March 18, 2014, available on the Kremlin’s website archive (in Russian) at

<http://news.kremlin.ru/news/20603>.

<http://eng.news.kremlin.ru/news/6889>. (英語版)

第12章 プーチンの「アメリカ教育」

1. この期間の米露関係の変遷に関する詳しい分析については、以下などを参照：Stent (2014).

2. 2010年3月、著者による個人的なインタビュー。

3. 2013年4月、個人的にインタビュー取材した高い地位の米政府高官もまた、(彼が会ったことのある中国やほかの世界のリーダーたちとは違い) プーチンはアメリカにまったく興味を示さなかったと語った。

4. 2010年の訪米中、メドヴェージェフはアメリカに関して興味のある側面(とくにテクノロジー)について、できるかぎりのことを学ぼうとした。彼はシリコンバレー視察にかなりの時間を費やし、アップル本社やロシア企業ヤンデックスのオフィスを訪問し、ツイッター本社では自らのアカウントを開設した。さらに、メドヴェージェフはシスコやグーグルのCEOたちと会い、カリフォルニア知事で映画スターのアーノルド・シュワルツェネッガーと会談し、ワシントンDCの〈レイズ・ヘル・バーガー〉でオバマ大統領とハンバーガーを食べ、ブルッキングス研究所で一般の観客を前に

スピーチを行なった。さらに詳しい情報は以下を参照：Andrew Clark, “Dmitry Medvedev Picks Silicon Valley’s Brains,” *The Guardian*, June 23, 2010, at www.theguardian.com/business/2010/jun/23/dmitry-medvedev-silicon-valley-visit.

5. Stanley Meisler, “Circus of ’59: Khrushchev’s U.S. Tour Recalled,” *Los Angeles Times*, May 30, 1990, at

http://articles.latimes.com/1990-05-30/news/vw-234_1_nikita-khrushchev

6. Fischer (1997)を参照。この報告書には、(元KGB職員の亡命者オレグ・ゴルディエフスキーの翻訳による) KGBのファイルからの抜粋や、ドイツ統一後に入手した東ドイツ政府公文書の諜報ファイルの翻訳資料が含まれている。フィッシャー (Fischer) は報告書のなかで、CIAが心理戦のための作戦計画 (PSYOPプログラム) を1981年から段階的に進め、アメリカが実際にソ連を攻撃するかもしれないという考えを助長しようとしたと訴えている。それは、ソ連側を常に警戒状態にさせ、アメリカの意図が何か不安を抱かせつづけるための作戦だった。「この計画では、アメリカの意図をソ連側に伝えることよりも、次に何が来るか不安にさせつづけることのほうが重要だった。この計画はまた、ソ連の諜報機関の早期警戒システムの欠点と脆弱性を探るためのものでもあった」。これに対抗して、ソ連はアメリカの動きを監視するための戦略的警告プログラム「RYAN作戦」を起ち上げた。

7. Fischer (1997). 特に“The Soviet Intelligence Alert and Operation RYAN.”のセクションを参照。

8. 同上。“RYAN: Retaliatory or Preemptive Strike? February 1983” (オレグ・ゴルディエフスキーの翻訳によるKGBの電信の抜粋) のセクションを参照。電信はさらにこう続く。「たとえば、アメリカ大陸部から戦略ミサイルの発射を探知したのち、その軌道の方角を見極めるために必要な時間を考慮すると、残された反応時間は約20分。西ドイツに「パーシングII」ミサイルが配置されれば反応時間はさらに短縮され、ソ連国内の離れた場所にあるターゲットに到達するまでの飛行時間は4～6分と推測される」

9. 以下を参照：Claire Duffin, “Civil Servants Prepared ‘Queen’s Speech’ for Outbreak of World War III,” *The Telegraph*, August 1, 2013, at

www.telegraph.co.uk/news/uknews/queen-elizabeth-II/10212063/Civil-servants-prepared-Queens-speech-for-outbreak-of-World-War-Three.html.

10. スピーチのビデオと原稿は、ロナルド・レーガンの大統領公文書保管所に保管されている。原稿は以下で読むことができる：

[www.reaganfoundation.org/pdf/Remarks Annual Convention National Association Evangelicals 030883.pdf](http://www.reaganfoundation.org/pdf/Remarks%20Annual%20Convention%20National%20Association%20Evangelicals%20030883.pdf).

11. 以下を参照：“The Day After” (1983) and “Threads” (1984) in the Internet Movie Database, at

www.imdb.com/title/tt0085404/

www.imdb.com/title/tt0090163/

12. ポスターの詳細については、ロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館のアーカイブを参照：<http://collections.vam.ac.uk/item/O76710/gone-with-the-wind-poster-houston-john/>

このポスターは、イギリスの左派の新聞『ソーシャリスト・ワーカー』のために、アーティストのボブ・ライトとジョン・ヒューストンによって1981年に描かれたものである。1980年代初めから半ばにかけて、ポスターはイギリス全土の小売店で販売されるようになり、とりわけ大学のキャンパス内で人気を博したという。さらにアメリカでも印刷され、販売された。ポスターの画像は以下で閲覧可能：

http://www.politicalgraphics.org/cgi-bin/album.pl?photo=30presidential_rogues_02%2F065_PG_06468.jpg

3. グリーナム・コモン女性平和キャンプに関するあらゆる記録文書と歴史については、英国公文書館とそのウェブサイトで見覧可能：

<http://apps.nationalarchives.gov.uk/a2a/records.aspx?cat=106-5gcw&cid=1#-1>

14. Fischer (1997). 1983年のこの時期、アメリカ人ジャーナリストのレスリー・ゲルブがソ連の軍参謀本部だったニコライ・オガルコフ元帥と対談。2人は、アメリカの軍事力に追いつくことが難しくなった現実に対して高まるソ連の不安について語った。また、このような現状を受け、KGBは全職員と協力者に西側の技術的な秘密を盗むように命令した。これは、レニングラードやドレスデンにおいて、ウラジーミル・プーチンと同僚たちが行っていたことである（第7章を参照）。

15. さまざまなインタビューのなかで、マルクス・ヴォルフはKGBから機動部隊を起ち上げるように指示を受けたことについて語った。「われわれのソビエトのパートナーたちは、核ミサイル攻撃の脅威に取り憑かれていた……しかし、ほとんどの諜報部員と同じように私としても、こんな戦争ゲームは莫大な時間の無駄だと感じていた。それでも、ソ連からのこういった命令については、上層部からの命令同様、こちら側では是非を議論することなど許されなかった」：Wolf with McElvov (1997), p. 222.

16. Fischer (1997). “The Enduring Trauma of BARBAROSSA”と“Conclusion: The War Scare Was for Real”のセクションを参照。

17. 音声記録は以下で視聴可能：

www.youtube.com/watch?v=wgSSRE27GQ0

18. 以下を参照：

Jason Saltoun-Ebin and Andrea Chiampan, “The Reagan Files: From the Euro-Missiles Crisis to the Intermediate Range Nuclear Forces Treaty, 1979–1987,” October 17, 2011, at www.thereaganfiles.com/inf-treaty.html.

19. Pepper (2012).

20. 同上、p. 23.

21. 2014年6月26日、ワシントンDCでのジョン・エヴァンスへのインタビュー取材より。

22. Pepper (2012), p. 44を参照。P&GのCEOジョン・ペッパー（John Pepper）の息子デイヴィッドは、サンクトペテルブルク地域の開発を促進するこの計画の補佐役となった。自著のなかで、ジョン・ペッパーはこう指摘した。「息子のデイヴィッドが当時のプーチンについて“手荒で、物静かで、率直な男”だったと語った。サブチャックのカリスマ的かつ感動的な指導力をさらに強固なものにする逸材だ、と」。第8章の原注44で述べたとおり、この委員会が設立された目的は、サンクトペテルブルク市のために外国から投資を募り、使われなくなった軍需工場を工業用の工場に変え、さまざまな製造プロセスを改革することだった。

23. 以下を参照：

Scott Shane, “Cold Warrior Kissinger Sells Old Nemesis Russia,” *Baltimore Sun*, June 24, 1993, at

http://articles.baltimoresun.com/1993-06-24/news/1993175015_1_petersburg-cold-warrior-russian

24. プーチンは、ヘンリー・キッシンジャーとの交遊が1990年代以来途絶えることなく続いていることによく言及する。プーチンとキッシンジャーの詳しい関係については、第8章原注44を参照。

25. プーチンのオリガルヒ保護については、第8章の「オリガルヒたちのジレンマ——プーチンの出した解決策」の項を参照。1998年のロシア金融危機の直後、悪意のある反ユダヤ主義の運動家たちは、ユダヤ人オリガルヒたち、特にボリス・ベレゾフスキーに経済崩壊とロシア人の苦しみの原因を押しつけようとした。そんな過激なキャンペーンの先頭に立ったのが、共産党の国会議員アリベルト・マカシヨフだった。ほかの下院の議員たちは共産党に対し、マカシヨフへの厳しい処分、さらには離党処分を求めたが、党首のゲンナジー・ジュガーノフはそれを拒否。ちなみに、ジュガ

ーノフ自身の反ユダヤ的発言には、次のようなものがある。「われわれの人民は……攻撃的で破壊的なユダヤ主義者たちが金に物をいわせ、ロシアの経済を破壊し、全国民が共有する資産を略奪したということから目を背けてはいけない」：Hoffman (2003), p. 445. 1998年7月にロシア連邦保安庁 (FSB) の長官になったプーチンは、マカショフの一件に対応する中心的な人物だった。1998年11月11日、マカショフがベレゾフスキーに対してあからさまな脅迫行為をするようになると、ベレゾフスキーはプーチンに手紙を送って保護を求めた。その手紙のなかでベレゾフスキーは、マカショフだけではなく、1997年にはFSB内の一部門から脅迫されたことがあると訴えた。マカショフの反ユダヤ的発言が犯罪と認められるかどうかを最終的に決めるのは、プーチン率いるFSBだった。1999年2月、FSBはマカショフの発言は犯罪行為には当たらないと判断。この一件については以下で詳説されている：

“The Reemergence of Political Anti-Semitism in Russia,” Anti-Defamation League, 2001, at http://archive.adl.org/russia/russian_political_antisemitism_1.html

26. *Ot pervogo litsa*, pp. 14–15を参照 [邦訳は22～23ページ]。プーチンは老夫婦がいかにかを「愛してくれた」かを語った。時には、一日の半分を夫婦のアパートメントで過ごすこともあったという。加えてプーチンは、市政に携わりはじめたばかりの1993年、サンクトペテルブルク市の公式代表団としてイスラエルを訪れたことにも言及している。

27. 2013年7月と10月、ワシントンDCのブルッキングス研究所において、著者はイスラエルの政府高官たちに個人的なインタビュー取材を行なった。そのなかで高官たちは、プーチンがイスラエルに移住したロシア系ユダヤ人たちとの個人的なつながりを深め、公式訪問中にできるかぎり彼らと面会しようとしていたことを認めた。元モスクワ駐在イスラエル大使は、ハイレベルな会合のなかでプーチンがイスラエルの長所を絶賛し、経済的・軍事的な成功を褒めたたえていたと証言した。その会話のなかで、元大使はひどく驚かされることがあったという。「わが国の利益や安全保障にとって何が最良なことなのか、プーチンはわれわれよりも詳しく知っているんですよ」

28. Michal Margalit, Polina Garaev, “I Was Vladimir Putin’s Teacher,” *Ynetnews.com*, March 29, 2014, at

www.ynetnews.com/articles/0,7340,L-4504539,00.html.

29. 以下を参照：Ellen Barry, “In Big New Museum, Russia Has a Message for Jews: We Like You,” *New York Times*, November 9, 2012, at

www.nytimes.com/2012/11/09/world/europe/russias-new-museum-offers-friendly-message-to-jews.html?_r=0.

モスクワの〈ユダヤ博物館・寛容センター〉の公式ウェブサイト：

www.jewish-museum.ru/en

30. 「最大の犠牲」にあたるロシア語は「*zhertvy*」。ほかの多くの言語と同じように、ロシア語の*zhertvy*は「犠牲 (sacrifices)」と「犠牲者 (victims)」の両方を意味する。

31. 以下を参照：

“Vstrecha s Prezidentom Izrailya Shimonom Peresom” [Meeting with President of Israel Shimon Peres], November 8, 2012, at

www.kremlin.ru/news/16772.

32. ペレスはこう続けた。「あの戦争では3,000万人のソビエト市民が死んだ。彼らは世界を惨事から救ってくれた。彼らの記憶に、そしてソビエトとロシア市民の勇敢さに敬意を表したい。ロシアの人々は、大きな兵力を持つナチスに決してひるむことなく戦いつづけ、ベルリンの門へとたどり着き、全人類を脅かすもっとも恐ろしい危険から世界を解放した。これは、世界のための、人類のための、そして私たちの民のための解放だった。ナチスは私たち民族を抹殺しようとした。彼らは、150万人の子供を含め、600万人のユダヤ人を殺害した。私は世界の市民として、1人のユダヤ人として、あなた方に感謝したい。この勝利によって、われわれは再び生活を始め、また独立した

民族になることができた……」 :

“Statements for the Press Following Russian-Israeli Talks,” November 8, 2012, (英語版) :

<http://eng.news.kremlin.ru/transcripts/4601>

33. ソビエト時代、反ユダヤ主義は正式に国家によって排斥・違法化された。しかし、その後に成立したソビエト連邦 (USSR) は、西側の世界主義や資本主義に対抗するための手段の一部として、反ユダヤ主義政策を採り入れた。さらに詳しい議論は以下などを参照 :

Antonella Salomoni, “State Sponsored Anti-Semitism in Postwar USSR: Studies and Research Perspectives,” *Quest. Studies in Contemporary Jewish History*, April 1, 2010, at

www.quest-cdejournal.it/focus.php?id=212

本書の最終章における『シオン賢者の議定書 (*Protocols of the Elders of Zion*) 』についての議論も参照。

34. 2004年、マンジョシンはプリホチコの後任として大統領府国際関係部門の主席補佐官に就任。プリホチコは大統領府でさらに上位の階級に昇進し、2012年にはクレムリンから首相府に異動し、2013年に副首相に任命された。

35. 2003年2月、著者らを含むブルッキングス研究所の学者グループは、米露関係について調査するためのモスクワへの研究視察の一環として、アレクサンドル・マンジョシンと対談する機会を得た。マンジョシンとのこの会談は、大統領府との個人的なつながりから実現したもので、ワシントンDCのロシア大使館や、この研究視察計画を支援してくれたロシア外務省の北米部への依頼を通して実現したのではない。外務省北米部の代表者は、プリホチコとは普段からあまり接触がないため、会談をアレンジするのは難しいと告白した。一方、マンジョシンにいたっては、いちども会ったことがないという (当時のモスクワのアメリカ大使館の職員も誰1人マンジョシンに会ったことはなかった)。外務省の役人は、「マンジョシンに会うために」ブルッキングス研究所のチームに同行して会合に参加したいと申し出るほどだった。初め、その役人はクレムリンのガードマンに入場を拒否された。その理由は、「われわれの仲間ではない (*ne nash*)」から、つまり大統領府のメンバーではないからというものだった。ガードマンの上司に何度か掛け合った末、その役人は私たちとともにマンジョシンのオフィスに行くことを許された。

36. Goldgeier and McFaul (2003). See the section on “NATO is a Four-Letter Word,” pp. 183–210.

37. 同上、p. 188.

38. 同上、p. 184.

39. 同上、p. 191. NATOの将来的な拡大に関して、1990年代初頭にロシアが取りつけた約束についての議論は以下を参照 : Sarotte (2014)

40. 以下を参照 :

Korber Stiftung, “Europa—aber wo liegen seine Grenzen?” [Europe—but where do its frontiers lie?], 104th Bergedorfer Gesprächskreis [104th Bergedorf Roundtable], Warsaw, Königsschloss, 1995, at

www.koerber-stiftung.de/fileadmin/bg/PDFs/bnd_104_de.pdf.

41. Goldgeier and McFaul (2003), p. 201.

42. “Dr. Michael Haltzel Shares Insights on the Balkan Wars and NATO Enlargement. . .,” American Hungarian Federation, August 26, 2011, at

www.americanhungarianfederation.org/news_CEEC_USEngagement_2011_Haltzel.html.

43. Goldgeier and McFaul (2003), pp. 208–10.

44. 同上、p. 247.

45. NATOの介入はロシア国民をも震撼させるものだった。〈レヴァダ・センター〉の前身である世論調査団体〈VTsIOM〉が行なった調査によると、アメリカの台頭について否定的な見方を持つ

ロシア人の割合が、1999年前半に20%から50%に跳ね上がったという。〈レヴァダ・センター〉のデータは以下で報告されたもの：Sberbank Investment Research, “Russia Economic Monthly,” July 2014.

46. 以下を参照：

Vladimir Putin, “Obrashcheniye Prezidenta Rossiyskoy Federatsii” [Address by the President of the Russian Federation], March 18, 2014, at

<http://kremlin.ru/events/president/news/20603>

<http://en.kremlin.ru/events/president/news/20603> (英語版)

47. Goldgeier and McFaul (2003), p. 249. この一件に対するアメリカの外交官からの見方については以下を参照：Talbot (2002), chapter 12, “Hammer and Anvil.”

48. 同上。

49. 以下を参照：

Putin, “Obrashcheniye Prezidenta Rossiyskoy Federatsii” [Address by the President of the Russian Federation], March 18, 2014.

50. Goldgeier and McFaul (2003), pp. 261–62を参照。

51. 同上、p. 263.

52. 同上、p. 264.

53. 以下において、コソボでの作戦実行中にプーチンと交流した人物の個人的な談話を読むことができる：

Strobe Talbot, “Vladimir Putin’s Role, Yesterday and Today,” *Washington Post*, March 21, 2014.

クリントン政権下の国務副長官ストローブ・タルボットはこの記事のなかで、連邦安全保障会議の議長だったプーチンと会談したときの様子について述べている。ロシアのコソボ介入におけるプーチンの役割について、タルボットは「いまだ謎のまま」と説明する。

54. 同上。

55. Goldgeier and McFaul (2003), pp. 282–83.を参照。

56. Akhmadov and Daniloff (2013)を参照。

57. Vladimir Putin, “Why We Must Act,” *New York Times*, November 14, 1999, at

www.nytimes.com/1999/11/14/opinion/why-we-must-act.html.

58. 以下を参照：

“Terror Strikes—and Putin Proposes an Antiterrorist Alliance,” in Stent (2014), pp. 62–66.

ロシアの軍司令官たちも違う観点から、ユーゴスラビアでのNATOの空爆作戦とチェチェンでの作戦を直接結びつけようとした。彼らは、チェチェンのテロ活動に立ち向かうにあたって、NATOの戦略を真似しているだけだと説明した：

Michael Gordon, “Imitating NATO: A Script Is Adapted for Chechnya,” *New York Times*, November 28, 1999, at

www.nytimes.com/1999/09/28/world/imitating-nato-a-script-is-adapted-for-chechnya.html.

59. Stent (2014), pp. 62–63.

60. “Vneshnepoliticheskiye kontakty—zayavleniye dlya pressy i otvety na voprosy po okonchaniy rossiyско-bel’giyskikh peregovorov” [Foreign political contacts—statements for the press and answers to questions at the conclusion of Russian-Belgian negotiations], Kremlin Archive website, October 2, 2001, at

http://archive.kremlin.ru/appears/2001/10/02/0002_type63377type63380_28650.shtml. [アクセス不可]

61. Stent (2014), p. 67.

62. 同上、p. 69. また、Hill (2002)も参照。
63. Stent (2014), p. 69. ステントによる元ロシア外務大臣イーゴリ・イワノフへのインタビューより。
64. 同上。
65. “Chechnya, Again”のセクションを参照：Goldgeier and McFaul (2003), pp. 267–86.
66. Stent (2014), pp. 69–72を参照。
67. 以下を参照：Vladimir Putin, “Vstrechi s predstavitelnyami razlichnykh soobshchestv” [Meetings with representatives of different communities], September 15, 2001, at http://archive.kremlin.ru/appears/2001/09/15/0003_type63376type63377_28632.shtml.
68. 2010年、ワシントンDCで行なわれたガレエフのプレゼンテーションでの著者のメモより。
69. アメリカの弾道ミサイル防衛に対するロシア側の態度に関する詳細な議論（ロシア政府高官への詳細なインタビューを含む）については以下を参照：Lilly (2014).
70. ブルッキングス研究所の専門家グループに対するマンジョシンの発言内容は、同時期にモスクワのアメリカ大使館の代表者に向けてクレムリンの役人が発した言葉と一致するものだった。マンジョシンが主として訴えたのは、フセインが見事なはったりで相手を騙したということだった。国内の反対勢力、イラン、中東地域の敵対国、そしてアメリカ政府に対して、イラクが大量破壊兵器を保有していると勘違いさせようとしたのだ、と。フセインの最終目的は、国内の体制をさらに強固にし、考えられるすべての敵を抑制すること。しかし、国際社会からの武器査察を拒否したことによって、フセインは自身が恐れていた結末を自ら招くことになった。マンジョシンによれば、当時、大量破壊兵器の拡散に関して最大の脅威を抱えていたのはパキスタンだったという。パキスタンの核技術者アブドゥル・カディール・カーンのネットワークが、核技術を北朝鮮、リビア、イランに提供していると彼は示唆した（しかし、この点についてマンジョシンはそれ以上詳述しなかった）。2002年2月6日、モスクワのクレムリンで行なわれた大統領府国際関係部門の主席補佐官アレクサンドル・マンジョシンとの対談での著者のメモより。
71. 私たち著者自身も、ポーランド外務大臣のラドスワフ・シコルスキからこの話を何度か耳にした。ちなみに、彼は国際関係の面白いジョークが大好きだ。
72. 2004年9月7日、モスクワの国防省で行なわれたセルゲイ・イワノフとの対談での著者のメモより。
73. Goldgeier and McFaul (2003), p. 365. 1990年代末までにロシアがアメリカにとって脅威ではなくなったという考えは、このゴールドガイアーとマクフォールによる著書の最終章「Lessons」（pp. 330–65）のテーマであり結論である。
74. プーチンが権力トップの座にとどまるあいだ、アメリカでは3人が大統領を務めた——ビル・クリントン、ジョージ・W・ブッシュ、バラク・オバマ。ジェームズ・ゴールドガイアー（James Goldgeier）、マイケル・マクフォール（Michael McFaul）、アンジェラ・ステント（Angela Stent）はそれぞれの自著のなかで、これら3人の大統領のもとで米露関係がどう進展したのかを細かく分析している（ゴールドガイアーとマクフォールの場合は1990年代から2002年、ステントの場合は2000年代から2013年まで）。こういった実地的かつリアルタイムの報告や解説の数々は、それぞれの期間の空気感を見事にとらえたものである。さまざまな局面において、3人の著者は単なるアナリストや観察者としてだけでなく、実際に当事者としてその場にいた。ゴールドガイアーはクリントン政権下の1995年～96年にかけて、アメリカ国務省と国家安全保障会議で働いた経験を持つ。マイケル・マクフォールは、同時期に行なわれたロシアにおけるアメリカの技術支援プロジェクトに深くかかわった人物で、アメリカでもっとも著名なロシア専門家の1人である。2009年、マクフォールはオバマ政権のロシア政策顧問としてホワイトハウスに迎えられ、2012～14年には駐露大使を務めた。アンジェラ・ステントは1999～2001年に米国務省の政策企画本部に所属し、その後2004～06年には国家情報会議のロシア専門上級アナリストを務めた。彼らの分析と見識は、米露の大統

領たちがみな物理的にも精神的にも別の世界に住んでいることを示すものである。往々にして、彼らは相手の視点から物事を見ることを苦手とし、相手が何を脅威とみなすのかを理解できずにいた。

75. 第一次大戦後、バルト三国は独立を達成。第二次大戦中にソ連が再び占領したが、アメリカやその他の国々はそれを認めなかった。

76. 色の革命に対するロシアの反応やロシア政府の見解についての詳しい議論は以下を参照：
Stent (2014), pp. 97–123

77. ブッシュ政権の「フリーダム・アジェンダ」に関連する政策についての詳しい情報は以下を参照：
George W. Bush archives at

www.georgewbush-whitehouse.archives.gov/infocus/freedomagenda/

; Yerkes and Wittes (2006); and Paulette Chu Minter, “Why George Bush’s Freedom Agenda Is Here to Stay,” *Foreign Policy*, August 21, 2007, at

www.foreignpolicy.com/articles/2007/08/20/why_george_bushs_freedom_agenda_is_here_to_stay.

(<http://foreignpolicy.com/2007/08/21/why-george-bushs-freedom-agenda-is-here-to-stay/>)

78. 以下を参照：

Vladimir Putin, “Obrashcheniye Prezidenta Rossiyskoy Federatsii” [Address by the President of the Russian Federation], March 18, 2014, at

<http://news.kremlin.ru/news/20603>.

<http://eng.news.kremlin.ru/news/6889> (英語版)

79. Stent (2014), p. 10.

80. たとえば、以下を参照：“Cheney’s Speech in Lithuania,” *New York Times*, May 4, 2006, at www.nytimes.com/2006/05/04/world/europe/04cnd-cheney-text.html?pagewanted=all&r=0.

81. 以下を参照：Anne Kornblut, “Cheney Shoots Fellow Hunter in Mishap on a Texas Ranch,” *New York Times*, February 13, 2006, at

www.nytimes.com/2006/02/13/politics/13cheney.html.

「トゥデイ」のビデオ映像とインタビューの分析は以下を参照：

www.nbcnews.com/id/12355000/ns/world_news-europe/t/putin-takes-swipe-cheney-over-criticisms/

このインタビューのクレムリンの公式記録は以下を参照：

http://archive.kremlin.ru/appears/2006/07/12/1130_type63379_108507.shtml.

インタビューのなかでプーチンは強い口調で独自の政策について説明し、アメリカの一極支配に代わる地球規模の安全保障システムの確立を強く求め、アメリカのイラク政策を徹底的に批判した。

82. Vladimir Putin, “Speech and the Following Discussion at the Munich Security Conference on Security Policy,” February 10, 2007, at

http://archive.kremlin.ru/eng/speeches/2007/02/10/0138_type82912type82914type82917type84779_118123.shtml.

83. Stent (2014), pp. 147, 149.

84. Vladimir Putin, “Press Statement and Answers to Journalists’ Questions Following a Meeting of the Russia-NATO Council,” April 4, 2008, at

http://archive.kremlin.ru/eng/text/speeches/2008/04/04/1949_type82915_163150.shtml.

85. Stent (2014), p. 161より。

86. 同上, pp. 238–39. 私たち著者は、メドヴェージェフ訪独と同時期に開かれたドイツ外交問題評議会主催の国際会議に参加するためにベルリンにいた。その際に話を聞いたロシアやドイツの政府高官たちは、メドヴェージェフのスピーチがドイツ側との事前調整を重ねて練られたものであることを強調した。ロシアの高官たちはその提案について、ロシアと欧州大西洋の安全保障制度の共

存のための新しい形を模索する「最後の試み」だったと説明した。ミュンヘンやブカレストでは、プーチンが強固なスタンスを貫いたために失敗した。しかし今回は、クレムリンの「ニューフェイス」の登場と建設的なアプローチによって問題解決を前進させることができるのではないかと、と彼らは期待したのだった。

87. Stent (2014), pp. 168–76.

88. 同上, pp. 211–34.

89. 2011年11月11日、リビアやシリア問題などを幅広く扱ったヴァルダイ会議の席で、プーチンはカダフィの死を「無法 (*bezobraziye*/ベゾブラジエ)」と表現した：著者のメモより。

90. Vladimir Putin, “A Plea for Caution from Russia: What Vladimir Putin Has to Say to Americans about Syria,” *New York Times*, September, 11, 2013, at www.nytimes.com/2013/09/12/opinion/putin-plea-for-caution-from-russia-on-syria.html?_r=0.

91. Stent (2014), p. 274

第13章 ロシア、復活

1. Gaddy and Hill (2002)を参照。

2. Figs (2003)より。引用は、1909年10月のストレイピンの有名なインタビューより。

3. 2001年7月、スロベニアでの初会談を通して、プーチンはブッシュとの個人的な関係を築くことに成功した。それを裏づけるように、ブッシュ大統領は次のように語った——プーチンの目を見てみると「彼の魂」を感じた（このコメントのちに頻繁に引用されることになる）：

“Press Conference by President Bush and Russian Federation President Putin,” Brdo Castle, Brdo Pri Kranju, Slovenia, July 16, 2001,

全文は以下で閲覧可能：

<https://georgewbush-whitehouse.archives.gov/news/releases/2001/06/20010618.html>

スロベニア会談の概要とプーチンとブッシュのやり取りについては以下も詳しい：Stent (2014), pp. 60–66. 二国間の政治的関係にはさまざまな緊張があったものの、2期に及ぶブッシュ政権のあいだ、プーチンはジョージ・W・ブッシュへの個人的な敬意を常に示そうとしていた（ヴァルダイ会議でもその態度は変わらなかった）。

4. 本書執筆のための準備中、インタビューしたロシア高官全員がこの点を強調した。また、ヴァルダイ会議ではプーチン大統領本人がそう明言した。

5. ピカレスク小説とは、下層出身者の主人公のさまざまな冒険を描く社会風刺的フィクション作品の形態。ミゲル・デ・セルバンテスの『ドン・キホーテ』、マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』や『トム・ソーヤーの冒険』、ロシアの小説家ニコライ・ゴーゴリの『死せる魂』などがこのジャンルの代表例である。

6. Akiner and Barnes (2001).

7. たとえば、Meier (2004), p. 118を参照。

8. Gall and de Waal (1998), pp. 56–75を参照。第二次世界大戦中の中央アジアとシベリアでの強制移住については、Nekrich (1981)を参照。

9. 一例として、バスランの悲劇後のロシア国民に対するプーチンのテレビ演説を参照：

Vladimir Putin, “Obrashcheniye Prezidenta Rossii Vladimira Putina” [Address by the President of Russia Vladimir Putin], September 4, 2004, at

<http://archive.kremlin.ru/text/appears/2004/09/6320.shtml>.

10. Vladimir Putin, “Vystupleniye na parade, posvyashchennom 56-y godovshchine Pobedy v Velikoy Otechestvennoy voyne” [Speech at the parade commemorating the 56th anniversary of victory in the Great Patriotic War], May 9, 2001, at

http://archive.kremlin.ru/appears/2001/05/09/0001_type63374type82634type122346_28544.sht

[ml](#).

11. 2003年の2月に行なわれた、ブルッキングス研究所代表团とクレムリンのアレクサンドル・マンジョシンの会談についての12章の議論を参照。

12. Herspring and Kipp (2001). 引用はp. 14.

13. 同上、p. 15.

14. 同上、p. 16.

15. Vladimir Putin, "Speech and the Following Discussion at the Munich Security Conference on Security Policy," February 10, 2007, at

http://archive.kremlin.ru/eng/speeches/2007/02/10/0138_type82912type82914type82917type84779_118123.shtml

16. 初期のプーチンの分析において、ハースプリング (Herspring) とキップ (Kipp) はこう述べた。「ロシア政府の国際債務に関するプーチンの動きは実に興味深い。彼の頭のなかには、とにかく完済することしかなかった」 : Herspring and Kipp (2001), p. 15.

17. プーチンにとって「財務的な主権」がいかに重要かという議論については、第5章の「ロシアの財政備蓄」の項を参照。

18. 2009～2013年、ワシントンDCやベルリンでのドイツ高官への個人的なインタビューより。発言の細部は少しずつ異なるものの、私たち著者はこのエピソードを何度となく聞かされた。

19. Vladimir Putin, "Zasedaniye Sovyeta Bezopasnosti" [Meeting of the Security Council], July 22, 2014, at

<http://kremlin.ru/transcripts/46305>.

20. チャベスの死後、ベネズエラのチャベスの経済政策についてプーチンは不快感を表明した。 : "Vladimir Putin Answered Journalists' Questions at the End of his Trip to Vologda," March 7, 2013, at

<http://eng.kremlin.ru/news/5095>.

21. Michael Birnbaum, "Ukraine Factories Equip Russian Military Despite Support for Rebels," *Washington Post*, September 15, 2014, at

www.washingtonpost.com/world/europe/ukraine-factories-equip-russian-military-despite-support-for-rebels/2014/08/15/9c32cde7-a57c-4d7b-856a-e74b8307ef9d_story.html.

22. たとえば、以下を参照 :

Vladimir Putin, "Meeting with Russian Ambassadors and Permanent Representatives in International Organizations," July 9, 2012, at

<http://eng.kremlin.ru/news/4145>.

プーチンはスピーチのなかでこんなことを述べた。「もういちど強調したい——CIS [独立国家共同体] の統合プロセスを進めることは、われわれの外交政策の核であり、戦略的目標である。もちろん、ロシア、カザフスタン、ベラルーシが統合の機動力であり、この3カ国はすでにユーラシア関税同盟を発足させ、共通の経済領域での協力を始めている」 : Vladimir Putin, "Annual Address to the Federal Assembly," April 26, 2007, at

http://archive.kremlin.ru/eng/speeches/2007/04/26/1209_type70029type82912_125670.shtml.

23. Hill and Gaddy (2003)を参照。この問題のさらに詳しい議論は以下を参照 : Lo (2008).

24. 中国の新しいリーダー習近平が、2013年の国家主席就任後の最初の外遊先としてロシアを選び、さらにこれまで以上に個人的な交流を増やす政治スタイルを採用したことは、プーチンにとってはメリットとなった :

David Herszenhorn and Chris Buckley, "China's New Leader, Visiting Russia, Promotes Nations' Economic and Military Ties," *New York Times*, March 22, 2013, at

www.nytimes.com/2013/03/23/world/asia/xi-jinping-visits-russia-on-first-trip-abroad.html

; and Cheng Li, “XiJingping’s Inner Circle” (two-part series), *China Leadership Monitor*, January/July 2014, available at

www.brookings.edu/research/papers/2014/01/30-xi-jinping-inner-circle-li

www.brookings.edu/research/articles/2014/07/18-xi-jinping-inner-circle-friends-li.

25. 以下も参照：

Sergei Karaganov’s article “Vpered k Velikommu okeanu” [Toward the Great Ocean], *Rossiiskaya gazeta* (Federal issue), No. 6464, August 26, 2014, at

www.rg.ru/2014/08/26/usilenie.html.

26. Fiona Hill and Bobo Lo, “Putin’s Pivot: Why Russia Is Looking East,” *Foreign Affairs*, July 31, 2013, at

www.foreignaffairs.com/articles/139617/fiona-hill-and-bobo-lo/putins-pivot.

27. 中国の艦艇がオホーツク海に移動した数時間後、ロシア国防省は（当時としては）冷戦終結以来最大規模となる陸・海軍の軍事演習を東部軍管区で行なった。プーチンは中国との国境に近いロシア東部のチタ州にいったん飛び、さらにサハリンに移動して緊急演習を自ら視察した。2013年10月に東京で行なった露日中関係に関する著者のインタビューのなかで、日本の軍事アナリストたちは、ロシアの関係者から直接（個人的に）聞いたという話を教えてくれた——ロシア政府が軍事訓練を開始したのは、中国政府に不快感を示すためだった。中国の船がわざわざ遠回りして帰国したことは、ロシアにとっては驚きだった。サハリンやほかの諸島沖を通過したあと、中国の艦艇はさらに日本周辺を航行し、中国の領海に戻ったという。詳しくは、以下を参照：

Fiona Hill, “Gang of Two: Russia and Japan Make a Play for the Pacific,” *Foreign Affairs*, at

www.foreignaffairs.com/articles/140288/fiona-hill/gang-of-two.

28. 「クリル列島」「北方領土」は、択捉島（イトウルップ島）、国後島（クナシル島）、色丹島（シコタン島）の3島と歯舞諸島（ハボマイ諸島）で構成される群島で、1945年にソ連が占拠・実効支配した。領土問題を抱えたこの島々は、日本最北の領土である北海道からロシアのカムチャッカ半島まで連なる千島列島（クリル列島）の南端に位置する。

29. Hill (2013)を参照。

30. 2013年10月東京、日本政府高官への日露関係に関するインタビューより。

31. アメリカの学者ブルース・ジョーンズは2014年の著書のなかで、BRICS各国の状況、開発計画のための国際的な融資機関（BRICS銀行）の設立に向けた動きなどを分析し、次のように指摘した。

「ブラジルをのぞくBRICS各国は、過去のどこかの時点で西側の経済制裁に苦しんだ経験を持っている。そのため、国際問題を解決する手段として経済制裁を用いることを、原則として嫌う傾向がある…… [銀行を設立して協力関係を強化することによって] BRICS諸国は、アメリカの財力の誇示になるべく左右されない仕組みを模索している。彼らは、西側諸国にとらわれない多様性のある関係を築こうとしているのだ…… [BRICSは新しい同盟ではなく] 国際的なシステムのなかでのより大きな行動の自由を得ること、西側の支配を打ち破ることをを望む国々の集まりである」：Jones (2014).

32. Stent (2014), pp. 215–22を参照。

33. 2011年の9月から10月にかけて、プーチンとメドヴェージェフの両方が、タンデム体制を作る前の2007年からこの役職の交代について相談していたことを示唆した。たとえば、以下を参照：

“Interv’yu s predsedatelem pravitel’sтва RF Vladimirom Putinom” [Interview with the Prime Minister of the Russian Federation, Vladimir Putin], *Perviy Kanal*, October 17, 2011,

www.ltv.ru/news/polit/188478.

34. 2011～12年、ドイツの政府高官へのインタビューより。

35. 2012～13年、ワシントンDCとベルリンでのOst-Ausschuss der Deutschen Wirtschaft（東欧経済関係委員会）の代表者へのインタビューより。東欧経済関係委員会とは、ロシアと東欧に投資

するドイツ産業界のための経済団体である。自動車製造業の現状については、著者らがロシアのカールーガ地方を実際に視察したのちに執筆した以下の記事を参照：

Fiona Hill and Clifford Gaddy, “Putin’s Next Move in Russia: Observations from the 8th Annual Valdai International Discussion Club,” Brookings Institution, December 12, 2011, at www.brookings.edu/research/interviews/2011/12/12-putin-gaddy-hill.

36. 詳しい解説については、以下を参照：

Fidelius Schmid and Holger Stark, “In the ‘Land of the Enemy’: Spies Strain German-Russian Ties,” *Spiegel Online*, July 2, 2013, at www.spiegel.de/international/world/trial-of-russian-spies-in-germany-strains-diplomatic-relations-a-908975.html.

37. 以下を参照：

Markus Dettmer and Christian Reiermann, “Bailing out Oligarchs: EU Aid for Cyprus a Political Minefield for Merkel,” *Spiegel Online*, November 5, 2012, at www.spiegel.de/international/europe/german-intelligence-report-warns-cyprus-not-combating-money-laundering-a-865451.html.

ドイツ高官へのインタビュー取材のなかで、BNDの報告書の結論部について言及されることがたびたびあった。この結論は、ドイツ政府と国会議員に提示されたものだという。

38. たとえば、以下を参照：

Section 18, “Relations with Russia on Protracted Conflicts” in Vaisse and Dennison (2013), and Philip Remler, “Negotiation Gone Bad: Russia, Germany, and Crossed Communications,” *Carnegie Europe*, August 21, 2013, at <http://carnegieeurope.eu/publications/?fa=52712&reloadFlag=1>.

39. 2013年5月と14年2月のベルリン、および14年5月にパリで開かれた国際会議の際に行なったインタビュー取材のなかで、ドイツ外務省の高官たちは一様に悲しそうに言った——この状況では、ロシア側は沿ドニエストル地域の問題を解決する気がまったくないのだと判断せざるをえない。ロシアは、結論に達することよりも、人々が注目するヨーロッパの外交政策についてドイツと二国体制で話し合うというプロセスのほうにより興味があった。ドイツと直接やり取りすれば、交渉のあいだはEUとアメリカをこの問題から遠ざけておける。よって、ロシア政府は主導権を握ることができるし、希望どおり少ない数の相手と交渉することができる。さらにドイツ側が気づいたのは、近隣諸国に対するロシアの外交政策にとって、沿ドニエストル地域は甚大な影響力を持つ地域であり、彼らが権利を放棄するはずなどないということだった。沿ドニエストル地域のロシア領土の編入への動きの加速と減速を繰り返すことによって、ロシアはモルドバを鎖につないだままにしておけるのだ。加えて、NATOからモルドバを遠ざけておくこともできる。2008年のグルジアとの戦争後、独立派が主流を占める国がロシアの警告を無視し、NATOと近づこうとする傾向があることをロシアは痛感していた。そのためロシア政府は、グルジア政府やヨーロッパ諸国に明確なメッセージを出した——グルジアのNATO加入の動きに罰を与えるため、ロシアは南オセチアとアブハジアの独立を承認した。

40. 2014年2月までのデータの分析については以下を参照：

Hannes Adomeit, “Collapse of Russia’s Image in Germany: Who Is to Blame?,” *Eurasia Outlook*, Carnegie Moscow Center, February 18, 2014, at <http://carnegie.ru/eurasiaoutlook/?fa=54540>.

2014年5月までのデータは以下を参照：ARD-Deutschlandtrend, “Vertrauenswürdige Partner Deutschlands,” at www.tagesschau.de/inland/deutschlandtrend2238.pdf.

41. 以下を参照：Robert Coalson, “As Merkel Heads for Russia, Moscow Is in for a Schockenhoff,” *RFL/RL*, November 16, 2012, at

www.rferl.org/content/news-analysis-merkel-putin-schockenhoff/24768692.html.

ウクライナ危機の勃発後、2014年7月にショッケンホフは第2弾となる報告書を発表：

http://schockenhoff.de/download/140701_Russia_Paper_EN.pdf. [アクセス不可]

42. 2013年～14年、ワシントンDCやドイツにおける、アンドレアス・ショッケンホフやほかのCDU（ドイツキリスト教民主同盟）所属の国会議員、ドイツ人ジャーナリストへのインタビューより。

以下も参照：

Alison Smale, “Germany Puts Curbing Russia Ahead of Commerce,” *New York Times*, August 13, 2014, at

www.nytimes.com/2014/08/14/world/europe/ukraine-crisis-hardens-germany-against-russia-an-old-partner.html?_r=1

43. 注目に値するのは、ウクライナ危機後も、プーチンはなおもドイツへのアピールをやめなかったということだ。2014年3月18日、クリミア併合を宣言する演説のなかでプーチンは、冷戦末期にロシアが東西ドイツの統合を支援したことを、再びドイツ人に思い出させた。

44. ラジオ番組『*Polnyy Albats*』内のコンスタンチン・シモノフの発言：

Yevgenia Albats, *Polnyy Albats*, Ekho Moskvii, April 24, 2014, at

<http://echo.msk.ru/programs/albac/1304074-echo/>.

45. Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), pp. 155–56.

46. 同上, p. 156.

47. 以下を参照：

Fiona Hill, “Dinner with Putin: Musings on the Politics of Modernization in Russia,” October 2010, Brookings Foreign Policy Trip Reports, No. 18, at

www.brookings.edu/research/reports/2010/10/russia-putin-hill.

48. ジョークの細部は多少異なるものの、共通するのは次のような流れだ。神は世界の宗教リーダーにメッセージを送る——人間を罰するために洪水を起こすが、今回はすべての土地が水で覆われ、全世界が水面下に沈んで全員が溺れ死ぬ。ほとんどの宗教リーダーは信奉者に対し、残りの時間も敬虔でありつづけ、これまでの行為を悔み、運命を受け入れるよう懇願した。しかし、ラビは信奉者のところに行き、こう伝える。「ユダヤの民よ、水中で暮らす術を編み出そう」

49. 以下を参照：

Guy Rolnik, “Taking Stock/Learn to Breathe Under Water,” *Haaretz*, February 9, 2009, at

www.haaretz.com/print-edition/business/taking-stock-learn-to-breathe-under-water-1.269722.

50. 2012年2月にプーチンがこのジョークを言ったことは、ニコライ・ズロービンが私たち著者に教えてくれた。ズロービンは、2012年2月29日に非公開で開かれたプーチンの「公認の選挙運動代表者 (*doverennyye litsa*)」の会議に出席していた。

51. 2013年11月1日、ワシントンDCのブルッキングス研究所の会議での著者のメモより。これはプライベートな会議であり、出席したジャーナリストはプーチンとの会話について記事として発表したり、公の場で話したりしたことがない。そのため、このジャーナリストは出所を明示しないことを望んだ。

52. King and Cleland (1978), pp. 55–56.

53. 2011年7月、アメリカの政治コメンテーター、チャールズ・クークが『ナショナル・レビュー』誌の記事で次のように言及した。「1950年代後半、あるジャーナリストがイギリスの現職の首相だったハロルド・マクミランに尋ねた——今の政権にもっとも大きな打撃を与えるものがあるとすれば、それは何か？　そこで、彼は歴史に語り継がれる名回答を口にする……『事件だろうな。そう、事件』。これは根本的な真理を見事に言い当てた答えであり、ハロルド・ウィルソンの有名な格言にも通じるものがある——「政治の世界では1週間は長い (A week is a long time in politics)」：Charles Cooke, “Events, Dear Boy, Events,” *National Review*, July 18, 2011, at

www.nationalreview.com/corner/272089/events-dear-boy-events-charles-c-w-cooke.

54. 2009年と2010年の個人的な会合にて、グルジアの政府高官がこの発言について私たち著者に教えてくれた。

55. Dmitry Medvedev, “Poslaniye Federal’nomu Sobraniyu Rossiiskoi Federatsii” [Message to the Federal Assembly of the Russian Federation], November 5, 2008, at http://archive.kremlin.ru/appears/2008/11/05/1349_type63372type63374type63381type82634_208749.shtml.

56. Stent (2014) and Asmus (2010)を参照。

57. 第12章の議論を参照。

58. Helene Cooper and Thom Shanker, “After Mixed U.S. Messages, a War Erupted in Georgia,” *New York Times*, August 12, 2008, at www.nytimes.com/2008/08/13/washington/13diplo.html?pagewanted=all&_r=0.

59. この点については、「グルジア紛争に関する独立国際事実調査委員会」の報告書でも明確に指摘されている。この委員会は、8月戦争（ロシア・グルジア戦争）の原因究明のために、スイス人外交官ハイディ・タツリアヴィニを代表として欧州連合理事会によって設立された。

2009年9月30日、正式な最終報告書が欧州連合理事会、欧州安全保障協力機構、国連、ロシアとグルジアの政府に提出された。

www.ceiig.ch/Report.html

60. Thom Shanker, “Russians Melded Old-School Blitz with Modern Military Tactics,” *New York Times*, August 17, 2008, at www.nytimes.com/2008/08/17/world/europe/17military.html?pagewanted=all&_r=0.

61. Medvedev, “Poslaniye Federal’nomu Sobraniyu Rossiiskoi Federatsii” [Message to the Federal Assembly of the Russian Federation], November 5, 2008.

62. 同上。

63. 2008年のグルジア戦争直後の一部の軍事専門家による反応は、2014年のクリミア事変後の反応に驚くほど似ている。それぞれの紛争の直後に発表された『ニューヨーク・タイムズ』の2つの記事を比較すると実にわかりやすい：

Shanker, “Russians Melded Old-School Blitz with Modern Military Tactics,” *New York Times*, August 17, 2008, and C. J. Chivers and David Herszenhorn, “In Crimea, Russia Showcases a Rebooted Army,” *New York Times*, April 2, 2014, at

www.nytimes.com/2014/04/03/world/europe/crimea-offers-showcase-for-russias-rebooted-military.html.

64. Fred Weir, “In Georgia, Russia Saw Its Army’s shortcomings,” *Christian Science Monitor*, October 10, 2008, at

www.csmonitor.com/World/Europe/2008/1010/p01s01-woeu.html.

ロシア側の専門家による、ロシア軍のパフォーマンスの評価、戦争全般とグルジア軍の行動の分析については以下を参照：Pukhov (2010).

65. チェチェンがロシア軍にとっての「どん底」であり「墓場」だったことに改めて注目したい。チェチェンでの2度の戦争は、国内外の軍事専門家やアナリストにとって、ロシア軍がもはや実効的な戦闘力を持ち合わせていないことを証明する出来事だった。ロシア軍は、海外での作戦はもろろんのこと、自らの領域内での作戦も遂行することができない状態だった。詳しくは以下を参照：Lieven (1998).

66. セルジュコフの詳しい経歴については、第8章の原注25を参照。

67. Nikolai Makarov, “Vremya razgil’dyaystva, populizma i demagogii zakonchilos” [The time of slipshod efforts, populism, and demagoguery is over], *Voyenno-promyshlennyy kur’yer*,

February 8, 2012, at

<http://vpk-news.ru/articles/8597>.

68. 改革の重要性などの軍問題について訴える、プーチンの2012年の大統領選キャンペーン記事を参照：

“Vladimir Putin: Byt’ sil’nymi: garantii natsional’noy bezopasnosti dlya Rossii” [Vladimir Putin: To be strong is the guarantee of Russia’s national security], *Rossiyskaya gazeta*, February 20, 2012, at

www.rg.ru/2012/02/20/putin-armiya.html.

69. 大統領令603 (2012年5月7日) :

“O realizatsii planov (programm) stroitel’sтва i razvitiya Vooruzhennykh Sil Rossiyskoy Federatsii, drugikh voysk, voinskikh formirovaniy i organov i modernizatsii oboronno-promyshlennogo kompleksa” [On implementing plans (programs) for building and developing the Armed Forces of the Russian Federation, other troops, military units and agencies, and modernizing the military-industrial complex], at

<http://kremlin.ru/acts/15242>.

また、以下の大統領令604 (2012年5月7日) も参照：

“O dal’neyshem sovershenstvovanii voyennoy sluzhby v Rossiyskoy Federatsii” [On further improvements to military service in the Russian Federation], at

<http://kremlin.ru/acts/15253>.

70. 米議会調査局のアナリスト、ジム・ニコル (Jim Nichol) による評価がその一例——「多くの専門家によれば、ロシアで現在行なわれている軍改革はこれまでの試みよりも大規模で、軍の構造や部隊の作戦にまで変更を加えるものだという。しかし、改革は度重なる延長、修正、失敗にさらされている。迅速な行動力を兼ね備えた高度で専門的な軍隊を作り出すために、予算と人材を計画どおり割り振ることができるのか？ 一連の新兵器を手に入れるために、廃れた軍需産業を今後10年のあいだに現代化できるのか？ 見通しは不明瞭なままである」：Nichol (2011).

71. イラリオノフは、リトアニアのヴィリニウスで開催されたNATO議員評議会の会議での演説、およびラジオ局〈エーハ・モスクヴィ〉のウェブサイト上のブログでこう主張した。「この戦争は、何年も前からずっと入念に計画・準備されてきた」：

Andrei Illarionov, “Chetvertaya mirovaya voina,” [The fourth world war], *Ekho Moskvy*, June 12, 2014, at

www.echo.msk.ru/blog/aillar/1338912-echo/.

72. プーチンの記事については原注68、大統領令については原注69を参照。

73. プーチンによる国防法の改正案は、2013年4月5日に下院で可決された。改正内容については以下で閲覧可能：www.consultant.ru/document/cons_doc_LAW_144635/#p21.

新たな国防計画に関する文書のリストは以下で閲覧可能：

“Ukaz Prezidenta Rossiyskoy Federatsii ot 23 iyulya 2013 g. No. 631, ‘Voprosy General’nogo shtaba Vooruzhennykh Sil Rossiyskoy Federatsii’” [Decree of the President of the Russian Federation of July 23, 2013, No. 631 on “Questions of the General Staff of the Armed Forces of the Russian Federation”], available at

http://stat.doc.mil.ru/documents/quick_search/more.htm?id=11807834@egNPA.

74. 2013年1月のゲラシモフ参謀総長の演説の英語翻訳版 (コメント付き) がマーク・ガレオッティのブログで公開されている：

“The ‘Gerasimov Doctrine’ and Russian Non-Linear War,” *In Moscow’s Shadows*, July 6, 2014, at

<http://inmoscowsshadows.wordpress.com/2014/07/06/the-gerasimov-doctrine-and-russian-non-li>

[near-war/](#).

ガレオッティはニューヨーク大学のイギリス人教授で、ロシアの安全保障、諜報機関、組織犯罪が専門。

75. 2010年のワシントンDCでのスピーチにおいて、ガレエフ将軍もゲラシモフと同じことを主張している：第11章の原注7を参照。

76. 以下を参照：

Mark Galeotti's blog, "The 'Gerasimov Doctrine' and Russian Non-Linear War," *In Moscow's Shadows*.

77. 同上。

78. Valeriy Gerasimov, "General'nyy shtab i oborona strany" [The general staff and the defense of the country], *Voyenno-promyshlennyy kur'yer*, February 5, 2014, at <http://vpk-news.ru/articles/18998>.

79. Vladimir Putin, "Soveshchaniye o vypolnenii gosoboronzakaza" [Meeting on implementation of the defense order], May 14, 2014, at <http://kremlin.ru/transcripts/21021>.

80. "Peskov: Kreml' proanaliziruyet resheniye vostoka Ukrainy po referendumu" [Peskov: The Kremlin is analyzing the decision of eastern Ukraine on a referendum], RIA Novosti, May 8, 2014, at <http://ria.ru/politics/20140508/1007012830.html>.

81. たとえば、2014年5月2日にクレムリンのウェブサイトでこう発表された——プーチンはウクライナ南東部の軍事情勢に関する「すべての情報」を「実戦モードで (*v operativnom rezhime*/ヴ・オペラティヴノム・レジメ)」受け取った：
<http://kremlin.ru/news?since=02.05.2014&till=02.05.2014>.

ロシア国防省は、*operativnyy rezhim* (オペラティヴヌイ・レジム) を次のように定義している——「一連の作戦上の規則、施策、規範のこと。その目的は、政治的・戦略的な軍事情勢を安定化させ、部隊の戦闘即応性を維持し、武力衝突の激化を抑制し、敵による侵略の可能性を阻止し、(必要に応じて) 戦争開始に向けて準備を進め、初期攻撃を成功裏に行なうことである。危機が迫っているかどうかにかかわらず、平時に実戦モードが導入されることもある」：

http://encyclopedia.mil.ru/encyclopedia/dictionary/details_rvsn.htm?id=7660@morfDictionary.

82. Gerasimov, "General'nyy shtab i oborona strany" [The general staff and the defense of the country], *Voyenno-promyshlennyy kur'yer*, February 5, 2014.

第14章 国外の工作員

1. 以下を参照：

Sergey Brezkun, "Ne radi podgotovki k novym voynam, a dlya isklyucheniya ugrozy voyny. U Rossii yest' lish' odin nadezhnyy soyuznik—yeyo yadernoye oruzhiye" [Not for the sake of preparing for new wars but for ruling out the threat of war. Russia has but one reliable ally—its nuclear arsenal], *Voyenno-promyshlennyy kur'yer*, February 8, 2012.

ロシア軍事科学アカデミーの教授で、マフムト・ガレエフ将軍の弟子でもあるブレズクン (Brezkun) は、ロシアが核戦力を大規模な報復措置の手段として適切に設定し、あらゆる攻撃に対して核兵器を使う可能性を明確にすれば、ロシアは束縛から放たれると主張する。「国の安全保障と歴史的な未来を守ることを目的とすれば、ロシアはあらゆる行動を取ることができるようになる。たとえば、ロシア連邦やベラルーシ・ロシア連合国家に加わることを望む、旧ソビエト圏の国の軍事勢力への支援などもできるはずだ」

2. Stent (2014), pp. 241–42を参照。

3. Tom Parfitt, “Vladimir Putin Consoles Exposed Russian Spies with ‘Singalong,’” *The Guardian*, July 25, 2010, at

www.theguardian.com/world/2010/jul/25/vladimir-putin-russian-spy-ring.

テーマ曲「祖国はどこから始まるか (*From What the Motherland Begins*)」は以下で聴くことができる:

www.youtube.com/watch?v=9mhXpu9Eoj8.

4. 同上。

5. プーチンは、全国放送された2013年4月の『ホットライン』のなかで、チュバイスがCIAの工作員に「囲まれていた」と発言した:

“Pryamaya liniya s Vladimirom Putinyim” [*Hot Line with Vladimir Putin*], April 25, 2013, at <http://kremlin.ru/transcripts/17976>.

チュバイスは翌日に反論:

“Chubais schital slukhami dannyye o rabote v TsRU dvukh sovetnikov” [Chubais dismisses reports that two advisers worked for CIA as rumors], RIA Novosti, April 26, 2013, at <http://ria.ru/politics/20130426/934784673.html>.

6. たとえば、『ネザヴィシマヤ・ガゼータ』紙は人権活動家のリュドミラ・アレクセエワが次のように語ったと報じた。「わが国へのスノーデンの亡命が認められたことは、とても喜ばしいことです」:

“Russian Press Hail Snowden Asylum Move,” *BBC News*, August 2, 2013, at www.bbc.com/news/world-europe-23548785.

7. 以下を参照:

Steven Pifer, “Edward Snowden in Moscow: A Case Study in Diplomatic Mismanagement,” Brookings Institution’s Up Front Blog, August 9, 2013, at

www.brookings.edu/blogs/up-front/posts/2013/08/09-snowden-moscow-diplomatic-mismanagement-pifer.

また、Stent (2014), pp. 269–71も参照。

8. たとえば、以下を参照:

Cornelius Rahn and Leon Mangasarian, “Germans Hail Snowden as NSA Evokes Stasi Seizing Lives of Others,” Bloomberg, July 10, 2013, at

www.bloomberg.com/news/2013-07-10/germans-hail-snowden-as-nsa-evokes-stasi-seizing-lives-of-others.html

; and “Stateless in Moscow: Germany Rejects Asylum for Snowden,” *Spiegel Online*, July 3, 2013, at

www.spiegel.de/international/germany/germany-has-rejected-edward-snowden-asylum-application-a-909128.html.

9. 電話の会話の音声記録:

www.youtube.com/watch?v=KIvRljAaNgg.

10. このセクションの説明とコメントは、ドイツの政府高官、企業の代表者、ジャーナリストへの広範囲にわたるインタビュー取材に基づく。インタビューはワシントンDC、ミュンヘン、ベルリンで2014年に行なった。

11. ロシアのNGO組織〈GOLOS〉(ロシア語で「投票」と「声」の両方を意味する)は、選挙の違反・不正行為について調査し、ロシア全土で選挙監視員を訓練する活動を行っていた。この組織が運営する「違反の地図 (Map of Violations)」は誰もが参加できるウェブサイトで、2011年12月の国会選挙にまつわる数々の問題を記録し、抗議運動のきっかけを作る役割も果たした。

〈GOLOS〉は、クレムリンの取り締まりの最初のターゲットとなった組織の1つだった。さらに詳

しくは以下を参照：

“Golos Election Monitoring NGO Fined under New Law,” RFE/RL, April 25, 2013, at www.rferl.org/content/russian-election-monitoring-golos-trial/24968090.html.

12. David M. Herszenhorn, “New Russian Law Assesses Heavy Fines on Protesters,” *New York Times*, June 8, 2012, at www.nytimes.com/2012/06/09/world/europe/putin-signs-law-with-harsh-fines-for-protesters-in-russia.html.

13. Alexander Grigor'yev, “Vladimir Markin: ‘Navalnyy smozhet borot'sya s korruptsiyey i iz tyur'my’ [Vladimir Markin: ‘Navalny can fight against corruption from prison’], *Izvestiya*, April 12, 2013, at <http://izvestia.ru/news/548376>.

14. “Putin Ally Lambasts Western Values Embodied by Conchita Wurst,” Reuters, May 15, 2014, at www.reuters.com/article/2014/05/15/us-germany-russia-idUSKBN0DV0YB20140515.

15. 以下を参照：

Miriam Elder and Chris McGreal, “USAid Ordered out of Moscow as Putin’s Protest Crackdown Continues,” *The Guardian*, September 18, 2012, at www.theguardian.com/world/2012/sep/18/usaaid-moscow-putin-protest.

16. 大統領になって間もないころのプーチンは、ロシアの民間部門に接近したロシア人アナリストやアメリカの元諜報部員を次々に逮捕・起訴することによって、市民たちに似たようなメッセージを送った。アナリストたちは、西側諸国ではまったく問題視されないような行動や接触によって逮捕された。以下を参照：

Herspring and Kipp (2001), p. 11, and Scott Peterson and Fred Weir, “Pope Case a Resurgence for Russian Spy Agency,” *Christian Science Monitor*, December 6, 2000, at www.csmonitor.com/2000/1206/p1s3.html.

17. たとえば、アリシエル・ウスマノフは鉄鋼業で財産を築いたあと、電気通信とメディア分野に進出。一時期、彼はフェイスブックの10%の株を保有し、アップルの大株主でもあった。以下を参照：

Ilya Khrennikov and Yuliya Fedorinova, “Billionaire Usmanov Aims at China after Apple, Facebook Sale,” Bloomberg, March 18, 2014, at www.bloomberg.com/news/2014-03-17/billionaire-usmanov-turns-to-china-after-selling-apple-facebook.html.

アリシエル・ウスマノフのビジネスパートナーだったユーリー・ミリネルもまた、西側のソーシャル・メディア企業に投資して大成功を収めた。ミリネルは、ロシア最大のソーシャル・ネットワーク〈フコンタクテ (VKontakte) 〉を傘下に収める〈Mail.ru〉を所有。さらに『フォーブス』誌によれば、「2009年、ミリネルは〈フェイスブック〉の最も初期の主要な後援者の1人となり、それ以降、自身が運営する投資ファンド〈DST Global〉を通して数々の新興インターネット巨大企業に積極的に投資してきた。〈グルーポン〉(2011年に株式公開)、〈ジンガ〉(2011年に株式公開)、音楽ストリーミング配信サービス〈Spotify〉、宿泊予約サイト〈Airbnb〉などが投資先の一例である。伝えらるところによると、2011年までに〈DST〉が〈ツイッター〉に投資した額は4億ドルにのぼり、同年11月の株式公開時、DSTの保有する株の評価額は12億ドルに達したという。ミリネルは個人としても、DNA解析サービスを展開する〈23andMe〉、次世代シーケンサー開発ベンチャー〈Genapsys〉、教育ベンチャー〈Coursera〉などの数々のベンチャー企業に巨額の投資をしている」：

“#35: Yuri Milner,” *Forbes*, at

www.forbes.com/profile/yuri-milner/.

18. Herspring and Kipp (2001), p. 10の議論を参照。

19. Ewan MacAskill, “Putin Calls Internet a ‘CIA Project’ Renewing Fears of Web Breakup,” *The Guardian*, April 24, 2014, at

www.theguardian.com/world/2014/apr/24/vladimir-putin-web-breakup-internet-cia.

20. 以下を参照：

Rebecca DiLeonardo, “Russia President Signs Law Re-Criminalizing Libel and Slander,” July 30, 2012, at

www.jurist.org/paperchase/2012/07/russia-president-signs-law-re-criminalizing-libel-and-slander.php.

21. 1日にアクセス数が3,000件を超えるブログは、情報発信メディアとしての正式な登録が義務づけられた。また、公衆Wi-Fiネットワークを利用するためには、ID登録が必須になった。これらの法律についての詳細は以下を参照：

“Russia Internet Blacklist Law Takes Effect,” *BBC News*, October 31, 2013, at

www.bbc.com/news/technology-20096274

; Michael Birnbaum, “Russian Blogger Law Puts New Restrictions on Internet Freedoms,” *Washington Post*, July 31, 2014, at

www.washingtonpost.com/world/russian-blogger-law-puts-new-restrictions-on-internet-freedoms/2014/07/31/42a05924-a931-459f-acd2-6d08598c375b_story.html

; “Russia Demands Internet Users Show ID to Access Public Wifi,” *Reuters*, August 8, 2014, at www.reuters.com/article/2014/08/08/us-russia-internet-idUSKBN0G81RV20140808.

それまで一定の自由が与えられていたケーブルテレビ局や出版社の経営陣も刷新された。また、ロシアのソーシャル・ネットワーク最大手〈フコンタクテ〉の創業者パーヴェル・ドゥロフCEOは、ユーザーの情報を政府と共有することを拒否すると、CEOの座を追われ、さらに自身が所有する自社株の売却を強要された。その後、ドゥロフはロシアを脱出：

Miriam Elder, “CEO of ‘Russian Facebook’ Says He Was Fired and That the Social Network Is Now in the Hands of Putin Allies,” *BuzzFeed*, April 21, 2014, at

www.buzzfeed.com/miriamelder/ceo-of-russian-facebook-says-he-was-fired-and-that-the-social-network-is-now-in-the-hands-of-putin-allies

(www.buzzfeed.com/miriamelder/ceo-of-russian-facebook-says-he-was-fired-and-that-the-social-network-is-now-in-the-hands-of-putin-allies?utm_term=.lvqPPOr1N#.utBZZzRry)

独立系テレビ局〈ドジュチ〉への政府の攻撃については、第10章で説明した。

22. たとえば、以下を参照：

Jill Dougherty, “Everybody Lies: The Ukraine Conflict and Russia’s Media Transformation,” Shorenstein Center on Media Politics and Public Policy, Discussion Paper Series D-88, July 2014, at

<http://shorensteincenter.org/everyone-lies-ukraine-conflict-russias-media-transformation/>

23. “Ukaz Prezidenta Rossii RF ot 20.10.2012 N 1416 ‘O sovershenstvovanii gosudarstvennoy politiki v oblasti patrioticheskogo vospitaniya’” [Presidential Decree of October 20, 2012, No. 1416, ‘On improving state policy on patriotic education’], October 20, 2012, at

<http://graph.document.kremlin.ru/page.aspx?1;1630683>.

24. Anna Pushkarskaya and Taisiya Bekbulatova, “Kreml’ prodolzhit obucheniye zarubezhom” [The Kremlin continues its education abroad], *Kommersant*, October 2, 2013, at

www.kommersant.ru/doc/2309989.

25. この政策をさらに強化するため、2014年5月にプーチンは、第二次世界大戦中のナチスの犯罪

やソビエトの役割を疑問視あるいは否定することを違法とする法律に署名した。いちど公式の歴史解釈が確立したら、それが不変の事実となり、再解釈することは許されない——これが法律に込められたメッセージだった：

Alexei Anishchuk, “Russia’s Putin Outlaws Denial of Nazi Crimes,” Reuters, May 5, 2014, at www.reuters.com/article/2014/05/05/us-russia-putin-nazi-law-idUSBREA440IV20140505.

26. 以下を参照：

Gabrielle Tétrault-Farber, “RIA Novosti Staff to Remain ‘In Demand’ at New Agency,” *Moscow Times*, December 11, 2013, at

www.themoscowtimes.com/news/article/ria-novosti-staff-to-remain-in-demand-at-new-agency/491236.html.

27. 以下も参照：“Revamp Underway at State News Agency RIA Novosti,” RIA Novosti, March 11, 2014, at

www.themoscowtimes.com/news/article/revamp-underway-at-statenews-agency-ria-novosti/495869.html.

28. 以下を参照：

“Russian News Agency RIA Novosti Closed Down,” *BBC News*, December 9, 2013, at www.bbc.com/news/world-europe-25299116.

29. 2014年8月、BRICSサミットに参加するために南米を訪れたプーチンは、アルゼンチンと交渉を進め、アルゼンチン国内でRTを24時間放送する約束を取りつけた。スペイン語版RTが南米に進出するのは初めてであり、クレムリンのメディア・チームにとっては大きな成功となった：

“The Opinion-Makers: How Russia Is Winning the Propaganda War,” *Spiegel Online*, May 30, 2014, at

www.spiegel.de/international/world/russia-uses-state-television-to-sway-opinion-at-home-and-a-broad-a-971971.html.

30. 2013年、RTはかつてCNNで活躍した司会者ラリー・キングを自社のレギュラー番組に起用することに成功し、さらなる世界進出を遂げた：

Lloyd Grove, “Larry King’s Russian TV Dilemma: ‘It Would Be Bad If They Tried to Edit Out Things. I Wouldn’t Put Up With It,’” *Daily Beast*, March 6, 2014, at

www.thedailybeast.com/articles/2014/03/06/larry-king-s-russian-tv-dilemma-it-would-be-bad-if-they-tried-to-edit-out-things-i-wouldn-t-put-up-with-it.html.

31. キセリョフの発言の要約は以下を参照：

Stephen Ennis, “Dmitry Kiselev: Russia’s Chief Spin Doctor,” *BBC News*, April 1, 2014, at www.bbc.com/news/world-europe-26839216.

32. 以下を参照：

Peter Pomerantsev, “Russia and the Menace of Unreality,” *The Atlantic*, September 9, 2014, at www.theatlantic.com/international/archive/2014/09/russia-putin-revolutionizing-information-warfare/379880/.

33. 以下を参照：Oliver Bullough, “Inside Russia Today: Counterweight to the Mainstream Media, or Putin’s Mouthpiece?,” *New Statesman*, May 10, 2013, at

www.newstatesman.com/world-affairs/world-affairs/2013/05/inside-russia-today-counterweight-mainstream-media-or-putins-mou

；RTのジュリアン・アサンジの番組のウェブサイト：

<http://rt.com/tags/the-julian-assange-show/>.

34. 以下を参照：

Andrew Higgins, “Populists’ Rise in Europe Vote Shakes Leaders,” *New York Times*, May 26,

2014, at

www.nytimes.com/2014/05/27/world/europe/established-parties-rocked-by-anti-europe-vote.html

以下も参照：Charles Grant, “Marine Le Pen and the Rise of Populism,” Center for European Reform, July 20, 2011, at

www.cer.org.uk/insights/marine-le-pen-and-rise-populism

, and Torreblanca and Leonard (2013).

35. 以下を参照：

Stephen Fidler, “Putin Depicts Russia as a Bulwark Against European Decadence,” *Wall Street Journal's Real Time Brussels* blog, September 20, 2013, at

<http://blogs.wsj.com/brussels/2013/09/20/putin-depicts-russia-as-a-bulwark-against-european-decadence/>

, and Nina Khrushcheva, “Putin’s New ‘Values Pact,’” Reuters, March 26, 2014, at

<http://blogs.reuters.com/great-debate/2014/03/26/putins-new-values-pact/>.

36. 以下を参照：

“France Is Plagued by Bankruptcy and Mass Immigration’—Marine Le Pen,” RT, July 1, 2013, at

<http://rt.com/news/marine-le-pen-interview-448/>

, and Patrick Wintour and Rowena Mason, “Nigel Farage’s relationship with Russian media comes under scrutiny,” *The Guardian*, March 31, 2014, at

www.theguardian.com/politics/2014/mar/31/nigel-farage-relationship-russian-media-scrutiny.

37. 第3章と第4章ですでに論じたとおり、ウラジーミル・ヤクーニンは国家戦略上極めて重要な企業である（ロシア鉄道）を経営する一方で、数多くの愛国的組織や宗教団体のスポンサーや代表を務めている：

Max Delany, “An Inside Track to Putin’s Kremlin,” *Moscow Times*, September 28, 2007, at

www.themoscowtimes.com/news/article/an-inside-track-to-putins-kremlin/194008.html.

(<http://www.worldsecuritynetwork.com/Russia/Delany-Max/An-Inside-Track-to-Putins-Kremlin>)

要するに、ヤクーニンはクレムリンの“ロード・オブ・ザ・レール”（鉄道王）として、ロシアを1つにまとめる物理的・形而上学的なインフラストラクチャーを運営・監督しているのだ。帝政時代も、鉄道と教会は密接に結びついていた。教会はロシアの新しい鉄道網の開通を祝福し、広大な国土の津々浦々に信仰を広げるために鉄道を利用した。一方、ヤクーニンは自らプロジェクトを立ち上げ、地方に住む敬虔な信者が鑑賞できるよう、有名な「聖像」（イコン）を鉄道で運んで各地で展示した：

Sophia Kishkovskiy, “In Russian Chill, Waiting Hours for Touch of the Holy,” *New York Times*, November 23, 2014, at

www.nytimes.com/2011/11/24/world/europe/virgin-mary-belt-relic-draws-crowds-in-moscow.html?_r=0.

ヤクーニンの保守的な考え方については、以下のサイトなどを参照：

“Vladimir Yakunin: Homosexuality Is the Same Threat as Environmental Pollution,” Moscow, May 25, 2011, available at

www.pravoslavie.ru/english/46736.htm

www.interfax-religion.com/?act=news&div=8484.

クリミア併合直前の2014年3月、ヤクーニンはアメリカと「世界的な金融寡頭制」がロシアを崩壊させようとしていると非難した。さらに彼は、ウクライナをロシアから切り離そうとする動きは、

古くからのCIAの陰謀の復活だと訴えた：

Catherine Belton, “US Accused of ‘Trying to Destroy Russia,’” *Financial Times*, March 6, 2014.
38. 外部の複数の保守派コメンテーターがこの点について指摘した。たとえば、Kaylan (2014)を参照。

39. 2014年9月、ワシントンDCでの個人的なインタビューより。2014年8月、「ロシア・ウクライナ・ノヴォロシア：グローバルな問題と課題」と題したカンファレンスがヤルタとクリミアで開かれ、ロシアやヨーロッパ全土から民族主義者たちが集結した。注目すべきことに、プーチンの経済顧問を務めるセルゲイ・グラジエフが基調演説者の1人だった：

Catherine Fitzpatrick, “Kremlin Advisor Glazyev Speaks in Yalta, Surrounded by Separatists and European Far Right,” *The Interpreter*, August 30, 2014, at www.interpretermag.com/russia-this-week/#4057.

また、Polyakova (2014)も参照。

40. 2012年、連邦議会への演説においてプーチンは初めて「脱オフショア化」に言及した：
Vladimir Putin, “Address to the Federal Assembly,” December 12, 2012, at <http://eng.kremlin.ru/transcripts/4739>.

41. “Timchenko Moves Headquarters to Moscow,” *Moscow Times*, July 20, 2012, at www.themoscowtimes.com/business/article/timchenko-moves-headquarters-to-moscow/462357.html.

42. たとえば、以下を参照：“South America Cashes in on Russian Food Ban,” *Deutsche Welle*, August 8, 2014, at www.dw.de/south-america-cashes-in-on-russian-food-ban/a-17842215.

43. 2014年8月9日、カラ海でのウェスト・アルファ (West Alpha) による試掘の開始式典にて、ビデオ中継内でのウラジーミル・プーチンの発言：
<http://kremlin.ru/transcripts/46421>.

44. Högselius (2013)を参照。このアプローチは実に有効だった。1968年のソ連のチェコスロバキア侵攻のあと、ソ連に経済制裁を加えるべきだという声が上がった。しかし、全体の結果が乱れ、ほかの西側諸国との関係を犠牲にしてもソ連と交渉を妥結しようと各国が慌てたことにより、その声は弱まっていった。

45. たとえば、このトピックに関する2003年10月のアナトリー・チュバイスの記事を参照：“Missiya Rossii v XXI veke” [Russia’s mission in the twenty-first century], *Nezavisimaya gazeta*, October 1, 2003, at www.ng.ru/ideas/2003-10-01/1_mission.html.

ロシア系アメリカ人の学者ニーナ・フルシチョワはこの点について、次のように語った。「プーチンが言ったとおり、ロシアが“かつての力を取り戻すためには”天然資源が鍵となる。事実、ロシアの天然資源の可能性が、先進工業国のなかにロシアの特別な居場所を作り出す。だからこそ、人類は再びロシアに対する敬意と恐怖に震え上がることになる。今回は赤軍の侵攻の恐怖ではなく、〈ガスピロム〉のガス供給停止の恐怖に震え上がるのだ」：

Khrushcheva (2008), pp. 27–29.

46. 数多くの取引でロシア企業の代理を務めたディストレス債権マネージャーへのインタビューより。2014年8月、ワシントンDCにて。

47. 〈BP〉の自社による投資の選択肢が限られていたという事実、流出事故後に財政的な打撃を受けていたという事実は、〈ロスネフチ〉との新しい関係における戦略の幅が狭まる可能性を意味した。それでも2011年1月、〈BP〉のロバート・ダドリーCEOと面会したプーチンは、〈BP〉の「弱点」がロシアにとっては「強みの源」になるという明確なメッセージを送った。「われわれは、つい最近メキシコ湾で〈BP〉が直面した問題についても承知している。ただ、ロシアにはこんなこと

わざがあるのをご存知だろうか—— “1人の敗者は2人の勝者並みの価値がある” 。

“Predsedatel' Pravitel'stva Rossii V. V. Putin provyol rabochuyu vstrechu s rukovodstvom kompanii 'British Petroleum'” [Prime minister V. V. Putin conducted a working meeting with the management of the company, British Petroleum], January 14, 2011, at <http://archive.premier.gov.ru/events/news/13857/>.

ロシアのミストラル級強襲揚陸艦の購入についての詳細は以下を参照：

Defense Industry Daily report at www.defenseindustrydaily.com/russia-to-order-french-mistral-lhds-05749/.

このロシアのミストラル購入は、2014年のEUの経済制裁発動後、フランス政府にとって大きな悩みの種になり、完成した船をロシアに引き渡すかどうか国内外で議論を呼んだ。詳しくは以下を参照：

Sharon Muthoni and Ryan Faith, “The Russia-France Warship Deal Is Turning into a Total Mess,” *Vice News*, November 22, 2014 (<https://news.vice.com/article/the-russia-france-warship-deal-is-turning-into-a-total-mess>).

48 . Guy Adams, “Revealed: The Knights, Peers and Even Members of the Royal Family Who Are Now on the Payroll of Russian Oligarchs,” *Mail Online*, July 23, 2014, at www.dailymail.co.uk/news/article-2703574/Revealed-The-knights-peers-members-Royal-Family-payroll-Russian-oligarchs.html.

49 . 以下を参照：

Česlovas Iškauskas, “Third Energy Package: Dispute between Russia and the EU,” *Geopolitika*, March 23, 2011, at www.geopolitika.lt/?artc=4561.

50 . James Kanter and Andrew E. Kramer, “Europe Threatens Gazprom with Antitrust Action,” *New York Times*, October 3, 2013, at www.nytimes.com/2013/10/04/business/international/europe-threatens-gazprom-with-antitrust-action.html?_r=0.

以下も参照：Tim Boersma, “Europe’s Energy Dilemma,” Brookings Institution, June 18, 2014, at www.brookings.edu/research/articles/2014/06/18-europes-energy-dilemma-boersma.

51 . 「第3次エネルギー・パッケージ」の問題に関して、プーチンは個人的かつ積極的にかかわってきた。その一例として、2011年2月のジョゼ・マヌエル・ドゥラン・バロゾ欧州委員会委員長とプーチンの公開討論を参照してほしい。その席でプーチンはこう強調した。「この第3次エネルギー・パッケージは、わが国のエネルギー企業に明らかに悪影響を及ぼすことになる。事実上、財産の没収を意味するものだ」：

“Prime Minister Vladimir Putin and President of the European Commission José Manuel Barroso give a news conference following the meeting of the Russian government and the EU Commission,” February 24, 2011, at <http://archive.premier.gov.ru/eng/events/news/14257/>.

プーチンは、同じ点を2011年11月のヴァルダイ会議でも強調した。

52 . 以下を参照：

Emily Young, “Russian Money in Cyprus: Why Is There So Much?,” *BBC News*, March 18, 2013, at www.bbc.com/news/business-21831943.

53 . Shaun Walker, “Cyprus Bailout—The Russian Angle: Vladimir Putin Hits out at ‘Unjust and Dangerous’ Bank Levy,” *The Independent*, March 18, 2013, at

www.independent.co.uk/news/world/europe/cyprus-bailout-the-russian-angle-vladimir-putin-hits-out-at-unjust-and-dangerous-bank-levy-8539502.html.

54. 2014年5月、ドイツ、イギリス、EU高官と著者の議論より。

55. 理論上、ほかの2つの組織——独立国家共同（CIS）とユーラシア経済共同体（EurAsEC）——が同じ目的のためにすでに設置されていた。しかし、ロシア以外のメンバー国の反発により、実質的な活動はほとんど行なわれていなかった。2014年3月18日の演説のなかでプーチンはこれらの組織の失敗を嘆き、次のように示唆した。もしウクライナやほかの旧ソビエト構成国がロシアの経済・政治制度から離脱しつづけなければ、ユーラシア連合の推進はもとより、クリミア併合の必要さえなかったかもしれない。2013年の著者による個人的なインタビューのなかで、ロシアのある年配の実業家がプーチンのこの発言とまったく同じ点を指摘した。有力人物がプーチンの発言をそのまま繰り返すというのは、ロシアでよくある光景である。

56. “Russia Pushing for EU Visa-Free Travel Deal in January,” RIA Novosti, December 6, 2013, at

<https://en.ria.ru/russia/20131207/185311112/Russia-Pushing-for-EU-Visa-Free-Travel-Deal-in-January.html>

57. 2013年11月～2014年9月に行なわれた複数の会議における、EU高官との個人的なインタビュー取材より。

58. Stent (2014), p. 168を参照。

59. たとえば、以下を参照：

Andrey Kurkov, “Is Ukraine Next?,” *New Statesman*, September 4, 2008, at

www.newstatesman.com/europe/2008/09/russia-ukraine-georgia.

60. 以下を参照：

Clifford Levy, “Ukraine Woos Russia with Lease Deal,” *New York Times*, April 21, 2010, at

www.nytimes.com/2010/04/22/world/europe/22ukraine.html.

61. 2014年2月に国外逃亡したとき、ヤヌコーヴィチは、それまで国庫から使い込んできた金の驚くべき総額を示す記録を残したままにした。ウクライナのジャーナリストの集団が、それらの書類の多くを以下のサイトで公開してきた：

www.yanukovychleaks.org.

さらに詳しくは、以下を参照：

Mikhail Bushuev, “Yanukovych Leaks’ Documents Abuse of Office,” *Deutsche Welle*, March 16, 2014, at

www.dw.com/en/yanukovych-leaks-documents-abuse-of-office/a-17499525.

62. ヤヌコーヴィチの汚職とプーチン率いるロシア政府とのつながりについては、以下の2004年のレガタム研究所の報告書に詳しく記録されている：

Bullough (2014), and in Anders Aslund, “Payback Time for the ‘Yanukovych Family,’” Peterson Institute for International Economics, December 11, 2013, at

<http://blogs.piie.com/realtime/?p=4162>.

63. 2014年2月以降、著者は複数のヨーロッパ高官から次のような話を聞いた。交渉の最中、プーチンは個人的にヤヌコーヴィチに電話し、協定に署名するように迫った。高官たちの話によれば、ヤヌコーヴィチの逃亡には、プーチンもほかの全員と同じように驚いたという。この進展に対して、プーチンは完全に裏切られたと感じ、ヨーロッパ各国がこれを裏で操っているのだと疑った。一方のヨーロッパの高官たちは、プーチンがヤヌコーヴィチに見切りを付け、電話でウクライナからの逃亡を指示したのだと疑った。また高官たちは次のような点も指摘した——ウクライナとの会談に派遣されたロシアの代理人、人権担当オンブズマンであるウラジーミル・ルキンは、合意の最終文書に実際には“署名をしなかった”：

“Russia’s Ombudsman Explains Why He Didn’t Sign Agreement in Kiev,” TASS, February 22, 2014, at <http://en.itar-tass.com/russia/720391>.

真実がどうあれ、ヤヌコーヴィチの逃亡は驚きの出来事であり、この危機における大きなターニングポイントになったことは間違いない。

64. “Extracts from Putin News Conference on Ukraine,” Reuters, March 4, 2014, at <http://www.reuters.com/article/ukraine-crisis-putin-extracts-idUSL6N0M13BN20140304>

65. プーチンはユーラシア連合を「歴史的なユーラシア地域に移住する人々のアイデンティティを保護するためのプロジェクト」だと語った：

Leon Neyfakh, “Putin’s Long Game? Meet the Eurasian Union,” *Boston Globe*, March 9, 2014, at www.bostonglobe.com/ideas/2014/03/09/putin-long-game-meet-eurasian-union/1eKLXEC3TJfzqK54eIX5fI/story.html.

66. プーチンはまたお決まりの話を持ち出した——自分と同じ名前を持つウラジーミル1世（キエフ大公）が、クリミア半島のケルソネソスでの洗礼を通して、ロシアのためにキリスト教を導入した。2014年3月18日の演説のなかで、彼はウラジーミル1世を「キエフ大公」ではなくあえて「聖公ウラジーミル」と呼んだ。

67. 以下を参照：

Vladimir Putin, “Konferentsiya Pravoslavno-slavyanskiye tsennosti—osnova tsivilizatsionnogo vybora Ukrainy” [Conference on Orthodox and Slavic values—The basis of Ukraine’s civilizational choice], July 27, 2013, at <http://kremlin.ru/transcripts/18961>.

68. 以下を参照：

Katarzyna Jarzynska, “Patriarch Kirill’s Game over Ukraine,” Center for Eastern Studies, August 14, 2014, at www.osw.waw.pl/en/publikacje/osw-commentary/2014-08-14/patriarch-kirills-game-over-ukraine.

69. ロシアによるクリミア併合後の2014年3月24日、ウクライナの暫定政権はEUとの連合協定の政治条項に署名した。

70. 以下を参照：

“Ukraine Crisis: Transcript of Leaked Nuland-Pyatt Call,” *BBC News*, February 7, 2014, at www.bbc.com/news/world-europe-26079957

71. 複数のヨーロッパ高官が著者によるインタビュー内で明かした話によると、キエフにアメリカの高官らが現われたことについて、プーチンは激しく抗議し、アメリカとEUの両方が反政府側に資金提供していると非難したという。

72. 2014年1月のロシア・EUサミットにおいて、プーチンは次のように語った。「次に、今回の件にウクライナがどう対処し、どんな行動を取るべきかということへのアドバイスとして、こう言っておきたい——ウクライナの人々は、自分たちの力だけで答えを導くことができるはずだ。それは間違いない。いずれにせよ、ロシアとしては介入する意図はいっさいない。たとえば、ギリシャやキプロスでの危機の最中に、われわれロシアの外務大臣が反EUを打ち出した会合に姿を現わし、観衆にアピールを始めたとしたら、ヨーロッパ諸国のパートナーたちはどう反応するだろう？ 私には容易に想像がつくね」：

“Russia-EU summit,” January 28, 2014, at <http://eng.kremlin.ru/transcripts/6575>

2014年8月にセリゲル湖で開催された〈ロシア青年フォーラム〉を訪問したプーチンは、参加者へ

のスピーチで次のように語った。「われわれの西側のパートナーたちは、実に急進的で民族主義的傾向のある集団を支援し、クーデターを誘発させた。誰がなんと言おうと、真相は火を見るよりも明らかにはずだ。われわれのなかにもそこまで愚かな者はいない。キエフ独立広場の抗議者たちをそのかしたのが誰なのか、みな知っているはずだ。この情報および政治的な支援は何を意味するのか？ この政権交代には、アメリカとヨーロッパ各国が深く関与している。非合法的な政権交代が、力づくで行なわれたのである」：

“Vladimir Putin at the Seliger 2014 National Youth Forum,” August 29, 2014, at <http://eng.kremlin.ru/transcripts/22864>.

73. 以下を参照：Vanessa Mock, “Russia, Ukraine Deadlocked in Gas Talks,” *Wall Street Journal*, June 11, 2014, at <http://www.wsj.com/articles/russia-extends-ukraine-gas-talks-deadline-1402475375>

74. 以下を参照：Clifford G. Gaddy and Barry W. Ickes, “Ukraine: A Prize Neither Russia nor the West Can Afford to Win,” Brookings Institution, May 22, 2014, at www.brookings.edu/research/articles/2014/05/21-ukraine-prize-russia-west-ukraine-gaddy-ickes.

(www.brookings.edu/articles/ukraine-a-prize-neither-russia-nor-the-west-can-afford-to-win/)

75. たとえば、以下を参照：

Simon Shuster, “Putin Says Ukraine’s Revolutionaries Are Anti-Semites. Is He Right?,” *Time*, March 6, 2014, at

<http://time.com/14289/ukraine-putin-anti-semites/#14289/ukraine-putin-anti-semites/>.

76. プーチンは「ノヴォロシヤ」という言葉を何度か使った。たとえば、2014年4月17日の毎年恒例の視聴者参加型テレビ討論番組のなかでも使用した。番組の書き起こし原稿は以下で参照可能：<http://kremlin.ru/news/20796>.

「ノヴォロシヤ」という言葉は、18世紀のエカテリーナ2世時代に、オスマン帝国から統治権を取り戻した黒海沿岸の地域を指す。19世紀になると、オデッサがこの地域の行政の中心地となった。かつて、ロシア正教会の教徒が住むウクライナの領土の大部分も、「リトル・ロシア (*Malaya Rossiya*) 」と呼ばれたことがあった。14世紀後半からロシア革命のころまで、教会の資料のなかでこの言葉が使われるようになり、のちに政府の文書内でも言及されるようになった。

77. クレムリンは、プーチンの兄がサンクトペテルブルクの共同墓地に埋葬されていることも正式に発表した：

“70-letiyе snyatiya blokady Leningrada” [The 70th anniversary of the lifting of the siege of Leningrad], January 27, 2014, at <http://kremlin.ru/news/20110>.

78. 2014年4月3日にワシントンDCにて行なった、AP通信のモスクワ支局長リン・ベリーへの個人的なインタビューより。モスクワ在住歴のもっとも長い外国特派員の1人であるベリーは、この時期のロシア・メディアによる放送内容、特定の番組が放映されるタイミングについてつぶさに観察した。第二次世界大戦のこの時期には、ウクライナがドイツの占領下であり、(当時はロシアの共和国の港だった)クリミアの都市セヴァストポリもその支配下にあった。

79. 以下を参照：

Vladimir Putin, “Obrashcheniye Prezidenta Rossiyskoy Federatsii” [Address by the President of the Russian Federation], March 18, 2014, at <http://news.kremlin.ru/news/20603/print>.

<http://eng.news.kremlin.ru/news/6889/print>. (英語版)

(<http://en.kremlin.ru/events/president/news/20603>)

80. 第二次世界大戦中とその後、ソビエトの指導者ヨシフ・スターリンは、ドイツの占領下に置か

れた住民たちの多くをいっせいに国外に退去させたり、グラグに投獄したり、あるいは単に銃殺したりすることもあった。そのうちのいくつかのケースにおいては、住民がドイツに大々的に協力した証拠はなく、ソ連に対して不満を持つ少数民族がドイツ軍に利用された程度だった。当時、とりわけ第五列のレットルを貼られたのは、ウクライナの民族主義グループ、エストニア、ラトビア、グルジアといった国の住民、クリミア・タタール人やチェチェンなどの民族集団だった。ロシア国境付近に住むこういった民族集団は、この段階からすでにロシアによる侵略を経験していたといっている：Nekrich (1981)。あるいはチェチェンからの国外退去問題に関する第10章の原注84を参照。

81. ロシア革命のあいだ、ウラジーミル・レーニンとボルシェビキは、ウクライナの民族主義思想家たちを、自分たちの政治闘争のために利用しようとした。レーニンはさらに、ウクライナの民族主義を、ロシアの民族主義のバランスを取るための「重り」として活用しようとした。当時のレーニンは、ロシアの民族主義こそが、中央集権化した共産党や新たな「超国家的な社会主義国家」の脅威になると危惧していた。「新しいロシア（ソ連）」の領域が、ウクライナ社会主義共和国に組み込まれることを強く望んだのはレーニンだった——それは、「ロシア共和国」そのもののサイズを小さくし、ロシアの民族主義の魅力を希薄化するためだった。レーニンの死後、ウクライナ共産党の指導者たちはより大きな自治権を要求した。すると、ソビエトの新たな指導者ヨシフ・スターリンは、ウクライナの政治リーダーたちを粛清した。1930年になると、スターリンによる地方の集団農場化と都市化政策によって、ウクライナは破滅的なまでの飢餓状態に陥った：Pipes (1997)も参照。

82. Anderson (2000), pp. 325–51を参照。アンダーソン (Anderson) は、戦争のごく初期の段階に、ドイツがウクライナだけに優遇措置を採っていたと説明する。当時、ナチス幹部で思想家のアルフレート・ローゼンベルクは、東欧諸国の国民の階層化を唱えていた。「人種のはしごのようなもので、もっとも高い位置を占めるのがウクライナ人、その下にポーランド人、ロシア人、さまざまなアジア系人種が続いた。ユダヤ人は最下部に属していた……ドイツの攻撃がコーカサスに及ぶと……グルジア人などのコーカサス人がウクライナ人と似たような地位を与えられた」。一方、ウクライナ国内に住む大勢のユダヤ人たちは、ナチスの攻撃にさらされた。さらには、ウクライナの民族主義者たちにユダヤ人が殺される例も少なくなかった。しかしながら、ドイツ占領軍のウクライナ人への特別な処遇はそう長くは続かなかった。

83. 以下を参照：

Matt Ford, “Good News from Ukraine: Everyone Still Hates Hitler,” *The Atlantic*, March 20, 2014, at

www.theatlantic.com/international/archive/2014/03/good-news-from-ukraine-everyone-still-hates-hitler/284489/

ウクライナとロシアの関係の歴史、および第二次世界大戦が与えた影響は、2014年の出来事にも深く関係する。この点に関する概要については、以下を参照：

Timothy Snyder, “Ukrainian Extremists Will Only Triumph if Russia Invades,” *New Republic*, April 17, 2014, at

www.newrepublic.com/article/117395/historic-ukrainian-russian-relations-impact-maidan-revolution.

この記事の改訂版、“The Battle in Ukraine Means Everything: Fascism Returns to the Continent It Destroyed” は以下に掲載された：

New Republic on May 11, 2014, at

www.newrepublic.com/article/117692/fascism-returns-ukraine

84. たとえば、若手の学者や歴史教師たちとのプーチンとの2014年11月5日の会合を参照：

<http://kremlin.ru/news/46951>. この席においてプーチンは、1939年の独ソ不可侵条約は、ナチス・ドイツとの「避けられない」戦いのために、ソ連軍が現代化するための時間を与えてくれたと主張

した。以下も参照：

Anthony Faiola, “A Ghost of World War II History Haunts Ukraine’s Standoff with Russia,” *Washington Post*, March 25, 2014, at

www.washingtonpost.com/world/a-ghost-of-world-war-ii-history-haunts-ukraines-standoff-with-russia/2014/03/25/18d4b1e0-a503-4f73-aaa7-5dd5d6a1c665_story.html.

85. 2014年8月にセリゲル湖で開催された〈ロシア青年フォーラム〉での会合のなかで、プーチンはロシア人を以下の4種類に分類した。1) (絶対的な) 体制支持者。2) “公式の” 反対者——議会の政党に属する人々などで、数多くの問題においてクレムリンとは意見を異にするものの、クリミア併合を支持して愛国心を示す者。3) 「組織に属さない反対者」のなかの「愛国者」。4) 「組織に属さない反対者」のうち、物事に対する感じ方が一般と異なる者。プーチンは、最初の3種類は「*nash* (ナーシュ)」（われわれの仲間）であり、4種類目の人間は仲間ではないことを明言。4番目のカテゴリーに属する人間は事実上の裏切り者であり、「*chuzhoy* (チュジョイ)」（よそ者）だ、と。さらにプーチンは、ロシアの左派の政治家たち（共産主義者）に彼ら自身の「汚れた秘密」を思い出させた——ボルシェビキもまた、ロシアの裏切り者だったという事実だ。後述するように、第一次世界大戦中に彼らは国を貶めようとした。そのため、第二次世界大戦を含めたその後の時期に、どんなに共産主義者たちが善い行ないをしたとしても、彼らは罪から逃れることはできない、とプーチンは語った：

“Vladimir Putin at the Seliger 2014 National Youth Forum,” August 29, 2014, at <http://eng.kremlin.ru/transcripts/22864>.

86. 第9章の「不信を根底としたシステム」の項を参照。

87. たとえば、以下を参照：

Alexandra Odyanova, “WikiLeaks: Putin’s ‘Personal Gripe’ with Estonia Result of WWII Betrayal,” *Moscow Times*, September 6, 2011, at

www.themoscowtimes.com/news/article/wikileaks-putins-personal-gripe-with-estonia-result-of-wii-betrayal/443254.html.

88. “Russian Parliament Passes Bill on Using Troops Abroad,” RIA Novosti, October 23, 2009, at

http://en.ria.ru/military_news/20091023/156570108.html

89. ロシア議会が大急ぎで採択した決議は、クリミアやウクライナ領内において、ロシア人とロシアの利害を守るための行動に出る権利をプーチンに与えた：

Shaun Walker and Harriet Salem, “Russian Parliament Approves Troop Deployment in Ukraine,” *The Guardian*, March 1, 2014, at

www.theguardian.com/world/2014/mar/02/russia-parliament-approves-military-ukraine-vladimir-putin.

90. ブルッキングス研究所での個人的な討論のなかで、モスクワからやってきたアナリストで学者のロシア人が、一連のウクライナ危機やクリミア併合にまつわるプーチンの発言について次のように主張した——ロシア連邦について語る時、彼は“現在の公式の連邦国家”よりもはるかに大きなロシア (*Rossiia*) という観点から話しているのである。「[プーチンにとって] ロシア連邦は、偉大なるロシア復活への“不恰好な中間地点”でしかない」とその学者は強調した。

91. 以下を参照：

“More Russians Support Annexation of Crimea, Poll Shows,” *Moscow Times*, September 2, 2014, at

www.themoscowtimes.com/news/article/more-russians-support-annexation-of-crimea-poll-shows/506247.html.

2014年8月にセリゲル湖で開催された〈ロシア青年フォーラム〉でプーチンは、ロシア国内でクリ

ミア併合への支持がどれほど広がっているかについて語った。「全国的に広がる反対勢力など存在するだろうか？ もちろん存在する。私はさきほど議会の政党について話した。それに、2012年の大統領選での熾烈な争いを覚えているだろうか？ 繰り返しになるが、あれはタフで決して妥協を許さない選挙戦であり、必ずしも美しいものではなかった。にもかかわらず、クリミア併合については全員が心を一つにして、誰もがわれわれが正しいのだと感じ、理解することができた」：

“Vladimir Putin at the Seliger 2014 National Youth Forum,” August 29, 2014, at

<http://eng.kremlin.ru/transcripts/22864>.

92. 2014年7月、中央アジアが専門の世界銀行幹部と著者の議論より。

93. たとえば、以下を参照：

“Orban Renews Autonomy Call for Hungarians in Ukraine,” Reuters, May 17, 2014, at

www.reuters.com/article/2014/05/17/us-ukraine-crisis-hungary-autonomy-idUSBREA4G04520140517.

フランスの〈国民戦線〉党首マリーヌ・ル・ペンなどの「ヨーロッパの右派」の一部も、ロシアによるクリミア併合を支持する態度を表明した：

“Crimea Is Historically Part of Russia, Referendum Was Legitimate—Marine Le Pen’s Spokesman,” *Voice of Russia*, March 20, 2014, at

http://voiceofrussia.com/2014_03_20/Crimea-is-historically-part-of-Russia-referendum-was-legitimate-Marine-Le-Pens-spokesman-4640/

(https://sputniknews.com/voiceofrussia/2014_03_20/Crimea-is-historically-part-of-Russia-referendum-was-legitimate-Marine-Le-Pens-spokesman-4640/)

94. 第二次世界大戦（大祖国戦争）に従軍した元軍人を前に、プーチンはこう説明した。「われわれの多民族・多宗教の国民が統一されたことこそ、第二次世界大戦勝利の最大の遺産である」：

“Torzhestvennyy priyom po sluchayu Dnya Pobedy” [Reception in honor of Victory Day], May 8, 2014, at

<http://kremlin.ru/news/20988>.

95. See Courtney Weaver, “Chechens Join Pro-Russians in Battle for East Ukraine,” *Financial Times*, May 27, 2014, at

www.ft.com/intl/cms/s/0/dcf5e16e-e5bc-11e3-aeef-00144feabdc0.html#axzz33EOnse4i.

96. モスクワに本拠を置くシンクタンク〈政治工学センター〉の副所長アレクセイ・マカルキンの発言：

Gabrielle Tétrault-Farber, “Chechens in Ukraine Capture Public Interest,” *Moscow Times*, May 28, 2014, at

www.themoscowtimes.com/news/article/chechens-in-ukraine-capture-public-interest/501105.html.

97. これは、これまでのプーチンの発言内容と合致するものである。たとえば2014年3月18日の演説で彼は、ロシアの歴史的な領土を新たなソビエトの共和国であるウクライナに引き渡したボルシェビキを批判した。また別の機会では、1920年と30年代のあいだにロシア正教会やほかのロシア固有の宗教を破壊し、結果として国民を動員するためにツールを国から奪ったボルシェビキを非難した。

98. Vladimir Putin, “Vserossiyskiy molodyezhnyy forum ‘Seliger-2014’ [All-Russian Youth Forum ‘Seliger 2014’] August 24, 2014,

<http://news.kremlin.ru/transcripts/46507>.

99. たとえば、以下を参照：

Ellen Barry, “Foes of America in Russia Crave Rupture in Ties,” *New York Times*, March 15, 2014, at

www.nytimes.com/2014/03/16/world/europe/foes-of-america-in-russia-crave-rupture-in-ties.html

, and Paul Ames, “Europe’s Far Right Is Rootin’ for Putin,” *Global Post*, April 10, 2014, at www.globalpost.com/dispatch/news/regions/europe/140409/europe-far-right-rootin-for-putin.

100. 以下を参照 : Mackinder (1904) and Dugin (1997).

101. Simon Shuster, “Russia Embraces Europe’s Far Right Even As It Fears ‘Contagion,’” *Time*, May 27, 2014, at

<http://time.com/120650/russia-europe-far-right/>

また、プロハーノフが出演したテレビ局〈Russia24〉の番組も参照 :

www.vesti.ru/videos/show/vid/581823/cid/7/.

102. 引用は以下より : Shuster in *Time*.

103. たとえば、以下を参照 :

Oleg Shynarenko, “Alexander Dugin: The Crazy Ideologue of the New Russian Empire,” *Daily Beast*, April 2, 2014, at

www.thedailybeast.com/articles/2014/04/02/alexander-dugin-the-crazy-ideologue-of-the-new-russian-empire.html#.

104. プロハーノフが『ニューヨーク・タイムズ』のエレン・バリーのインタビュー内で語った言葉 (2014年3月、バリーが著者に明かす)。何年ものあいだ脇に追いやられていたプロハーノフとしては、クレムリンに役割を与えられたことに驚きと喜びを感じたという。

105. 以下を参照 :

Paul Sonne, “Russian Nationalists Feel Let Down by Kremlin, Again,” *Wall Street Journal*, July 4, 2014, at

www.wsj.com/articles/russian-nationalists-feel-let-down-by-kremlin-again-1404510139

106. 第12章を参照。

107. たとえば、タチアナ・グラチェワ (Tat'yana Gracheva) が著した *Nevidimaya Khazariya* [隠れたハザリア] や *Svyataya Rus protiv Khazarii* [聖なるルーシ対ハザリア] を参照。これらの本では、ロシアやロシア正教会を貶め、抑圧するために、昔から実際に起きていた (とされる) ユダヤ人による一連の国際的な策略——現在におけるアメリカ政府、あるいはアメリカが支配する国際的な組織による策略——について描かれている。グラチェワは赤軍の大佐で、軍参謀本部軍事アカデミーの外国語・文学部の学部長。彼女の著書は、プーチンの側近であるウラジーミル・ヤクーニンが経営する会社の子会社の1つを通して出版された。ロシア国内ではそれほど広く読まれていないものの、アマゾン・イギリスのサイトなどでも購入可能である。私たち著者は、ヤクーニン本人から *Nevidimaya Khazariya* を紹介された。私たちが本について尋ねると、ヤクーニンは、全員の意見に目を向けることが大切であり、この種の本には一定の需要があると主張した。ヤクーニンは自らの著書やスピーチのなかで、ユダヤ系アメリカ人の策略について、グラチェワと似たような推論を述べたことがある。ヤクーニンの著書 *Novyye tekhnologii bor'by s rossiyskoy gosudarstvennost'yu* [ロシア国家の地位に対抗する新技術] (Yakunin (2013)) は以下のサイトで閲覧可能 (ロシア語) :

<http://rusrand.ru/dev/novye-tehnologii-borby-s-rossijskoj-gosudarstvennostju>.

グラチェワの主張の一例は、2時間近くに及ぶ彼女の講義のビデオ映像でも確認することができる :

www.youtube.com/watch?v=8E18AZbjyvk.

この映像は、モスクワ北東のセルギエフ・ポサードにある至聖三者聖セルゲイ大修道院のスタジオで撮影された。ビデオ内で、グラチェワは「政治学者、ロシア連邦軍参謀本部軍事アカデミー学部長」と紹介されている。クレジットによると、この映像は大統領から補助金をもらって制作されたとされている。グラチェワの反ユダヤ主義については以下も参照 :

Shimon Briman, “Antisemitskaya bomba v Genshtabe rossiyskoy armii” [Anti-Semitic bomb in the general staff of the Russian army], August 4, 2009, at <http://izrus.co.il/diasporaII/article/2009-08-04/5727.html#ixzz38zF4pK1K>.

108. Vladimir Putin, “Vstrecha s predstavitelnyami mezhdunarodnykh obshchestvennykh i religioznykh organizatsiy” [Meeting with representatives of international public and religious organizations], July 9, 2014, at

<http://kremlin.ru/transcripts/46180>

<http://eng.kremlin.ru/transcripts/22635> (英語版)

2014年7月、クリミアのセヴァストポリで開かれたホロコーストに関する式典において、プーチンはユダヤ人の代表者と面会した：

“At Crimean Holocaust Event, Putin Burnishes His Image as Defender of Minorities,” *Haaretz*, at

www.haaretz.com/jewish/features/.premium-1.605696.

さらに詳しい背景については、以下を参照：

Anshel Pfeffer, “The New Dilemma for Jews in Ukraine,” *Haaretz*, February 25, 2014, at

www.haaretz.com/jewish-world/jewish-world-news/.premium-1.576372#!.

109. イラストは以下で閲覧可能：

<http://kprf.ru/party-live/cknews/127574.html>.

このようなイラストが根強く広範に普及している事実については、Kotek (2009)を参照。

110. 2004年、私たち著者は、トヴェリにあるロシア正教会の書店で『シオン賢者の議定書』が実際に販売されているのを目撃した。

111. 以下を参照：

Vladislav Goncharov’s foreword to the 2005 fantasy *The Moscow Labyrinth*, by Oleg Kulagin.

以下も参照：Peter Pomerantsev, “How Putin Is Reinventing Warfare,” *Foreign Policy*, May 5, 2014, at

www.foreignpolicy.com/articles/2014/05/05/how_putin_is_reinventing_warfare.

112. 〈エクсмо〉が出版した「戦場ウクライナ」シリーズ7冊の表紙やあらすじは以下で確認することができる：

http://fiction.eksmo.ru/filter/serie/ukraina-pole-boya-fantasticheskiy-boevik_ID344973/

ロシア最大の出版社であるエクсмоの詳細は以下を参照：Eugene Gerden, “Eksmo and AST: Russia’s Two Publishing Giants Merge,” at

<http://publishingperspectives.com/2014/01/eksmo-and-ast-russias-two-publishing-giants-merge/>

113. ロシアの政治に対する人々の見方を古くから形成しつづけてきた、小説や文学の役割についてはKhrushcheva (2008)が詳しい。

114. 1時間以上に及ぶショーは、ロシアの主要テレビ局〈Rossiya 2〉で放送された。全篇を以下で鑑賞可能：

www.vesti.ru/broadcasts/show/id/35731/.

(<https://www.youtube.com/watch?v=dHtvm62RqSo>)

この豪華絢爛なショーはさまざまな側面を持っているが、西側の大衆文化を意識的に模倣した場面が多々あることは注目に値する。たとえば、体にペインティングを施した覆面姿の男たちがドラマを叩く姿は、『ブルーマン・グループ』や『ストンプ』のパロディーだろう。また、映画『時計じかけのオレンジ』、ザ・フーの『トミー』（音楽アルバム、ミュージカル）、ピンク・フロイドの『ザ・ウォール』（音楽アルバム、映画）、そのほか多数のアメリカやイギリスの映画や舞台などを髣髴とさせる演出が含まれている。ある場面では、アメリカの鷲の紋章の指輪を付けた巨大な手が、抗議デモの参加者を演じる役者たちに向かって空から伸びてくる。するとその直後、映画版『宇

宙戦争』の侵略者の恐ろしい声が会場じゅうにこだまする。

115. 実際にプーチンは、クリミアの出来事を祝う記念コイン、ロシア軍のための記念メダルを発行することを許可した。これらのコインやメダルには、「クリミア帰還」という文字と、作戦の期間を示す「2013年2月20日～2014年3月18日」という日付が刻まれていた。

116. ロシア系アメリカ人の学者で、ナボコフ研究の専門家であるニーナ・フルシチョワ (Nina Khrushcheva) は次のように主張する。「このショーは、根本的な改革と強引な支配をあいだの絶妙なバランスの“中庸”を目指すプーチニズムの縮図であり、ブレジネフの制限主権論、共産主義、KGB思想、市場主義、いくらかの自由をすべて合成したもの」 : Khrushcheva (2008), p. 29.

117. Vladimir Putin, “Meeting with Representatives of State Duma Political Party Groups,” Yalta, Crimea Republic, August 14, 2014, at

<http://eng.kremlin.ru/news/22820>.

118. 2014年8月、〈レヴァダ・センター〉はウクライナ情勢に対するロシア人の見方についての世論調査を行なった。質問は「ロシアから離れてヨーロッパに近づこうとするウクライナ政権の動きについて、自らの意見にもっとも当てはまるものを選んでください」というもの。すると52パーセントの回答者が、「ウクライナは、反露政策を追求する欧米の操り人形になった」という意見に同意した：

“Ukrainskiy krizis: deystviya rukovodstva Ukrainy i Rossii” [The crisis in Ukraine: the actions of Ukraine and Russia], Levada Center, August 12, 2014, at

www.levada.ru/12-08-2014/ukrainskii-krizis-deistviya-rukovodstva-ukrainy-i-rossii.

119. 『プーチン、自ら語る』のなかで、プーチンは「使命」という言葉を多用した : Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), p. 133. [邦訳は177ページ]

120. たとえば、ウクライナ大手のリサーチ企業〈GfK〉が2014年9月に行なった世論調査では、ウクライナのNATO加入を支持する国民が増加傾向にあることがわかった：

“Bil’she polovini ymovirhikh viybortsiv za vstup Ukraini do NATO ta proti miru na umovakh peredachi teritoriy pid kontrol’ Rosiyi,” [More than half of likely voters are for the entry of Ukraine into NATO and against a peace [settlement] under terms transferring territory to Russian control], GfK Ukraine, September 29, 2014, at

www.gfk.ua/ua/news-and-events/press-room/press-releases/pages/politics-290914.aspx.

121. Gevorkyan, Timakova, and Kolesnikov (2000), p. 160. [邦訳は221ページ]